

パレオアジア

ーアジア新人文化形成プロセスの総合的研究ー

文化史学

Cultural History of PaleoAsia

計画研究 B01 班 2018 年度 研究報告



人類集団の拡散と定着にともなう

文化・行動変化の文化人類学的モデル構築

野林 厚志 編

表紙、裏表紙

台湾原住諸民族の装飾品

出典

Chen, C. 1988 [1968] *Material Culture of the Formosan Aborigines*. Taipei: Southern Materials Center, Inc.

研究の目的と概要

本書は、文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「パレオアジア文化史学——アジア新人文化形成プロセスの総合的研究」の領域を構成する計画研究班の中の B01 班「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」の 2018 年度研究活動報告書である。

本年度は領域の研究計画の 3 年目であり、当初の計画にしたがいながら、生業活動、生産活動、象徴化、社会関係等に焦点をあて、主としてアジア諸地域において、継承、製作、使用、流通してきた事物が変化する過程のフィールド調査、国立民族学博物館や国内外の博物館等に収蔵されてきた歴史資料の熟覧調査、史料調査を実施した。これらの調査において班員が本年度に意識したことは、領域内で進められ蓄積されているデータ解釈のための理論的な貢献の方法を具体化させることである。報告書にはその傾向が少しずつ表れており、例えば、生産者集団内における技術継承の様式の民族誌的な解明や、道具利用行動の経時変化の記録といった、現在の集団を対象とする文化人類学、民族誌的研究の強みの部分を活かした調査、研究が進められた。

同時に、研究成果の中間的な公開を本班の研究としてだけでなく、他班や外部研究者と協働しながら進めることに力点がおかれた。日本考古学協会第 84 回総会（明治大学 2018 年 5 月）、国際狩猟採集社会会議（CHAGS XII Universiti Sains Malaysia 2018 年 7 月）におけるパネルの組織、『シンポジウム バスケットリーと人類』（大阪日本民芸館との共催 2018 年 11 月）等の開催と議論を通して、最終的な成果の達成にむけて、何が必要であるかということを考える貴重な機会が得られた。

一方で、本年度に行われた中間評価では、領域内での本班の役割や他班との学融合研究についてはよりふみこんでいく必要があると指摘されており、領域の課題にどのように理論的な貢献を具体化させていくかを最終年度に向けて班全体で議論を深める必要がある。

本班の運営、研究の進行にあたっては、評価委員の先生がた、領域内外の研究者のかたがたに多大にご指導いただいていた。心より感謝するとともに、引き続き、ご助力を賜ることを心よりお願いするしだいである。

計画研究 B01 班代表

野 林 厚 志

国立民族学博物館・教授

研究組織

研究代表者

野林 厚志 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・教授

研究分担者

池谷 和信 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・教授
上羽 陽子 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授
藤本 透子 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授
山中由里子 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授

研究協力者

卯田 宗平 国立民族学博物館 人類文明誌研究部・准教授
大西 秀之 同志社女子大学 現代社会学部・教授
金谷 美和 国立民族学博物館 外来研究員
菊田 悠 北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター・助教
中谷 文美 岡山大学 大学院社会文化科学研究科・教授
丸川 雄三 国立民族学博物館 人類基礎理論研究部・准教授
吉田世津子 四国学院大学 社会学部・教授
岸上 伸啓 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・教授
戸田美佳子 上智大学総合グローバル学部・助教
彭 宇潔 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・プロジェクト研究員
高木 仁 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター・研究支援員

招待研究者

山田 仁史 東北大学 文学研究科・准教授

目次

研究の目的と概要

アジアの新人文化の形成プロセスの多様性

——現存の狩猟採集民の多様性から考える	池 谷 和 信	1
---------------------------	---------	---

道具としての植物利用——インド北東部アッサム地域を中心に	上 羽 陽 子	5
	金 谷 美 和	
	中 谷 文 美	

アイヌ民族・文化形成における異系統集団の混淆

——二重波モデルを理解するための民族史事例の検討	大 西 秀 之	11
--------------------------------	---------	----

ウズベキスタンのリシトン陶業における

19世紀末以降の技術変化と集団接触	菊 田 悠	17
-------------------------	-------	----

民族誌データの定量分析と考古学への援用

——帰納モデルと投射 (projection)	野 林 厚 志	23
-------------------------------	---------	----

中央アジア草原地帯における人の移動と接触	藤 本 透 子	31
----------------------------	---------	----

狩猟採集民における道具利用の多様性

——民族誌データを利用した通文化研究に向かって	彭 宇 潔	37
-------------------------------	-------	----

宗教と神話の進化——集団間の動態におけるその役割	山 田 仁 史	41
--------------------------------	---------	----

旅するマンドラゴラ伝承	山 中 由里子	47
-------------------	---------	----

技術と接触——中央アジア・クルグズスタンの墓碑調査から	吉 田 世津子	49
-----------------------------------	---------	----

研究計画 B01 班 2018 年度研究活動		61
------------------------------	--	----

研究計画 B01 班 2018 年度研究業績		65
------------------------------	--	----

アジアの新人文化の形成プロセスの多様性 ——現存の狩猟採集民の多様性から考える

池 谷 和 信

(国立民族学博物館・人類文明誌研究部)

1 問題の所在

「狩猟採集民の時代」は、約 30 万年の現生人類（ホモ・サピエンス）の歴史のなかで 97% 以上の歴史を占めてきたといわれる。今日、私たちは農耕や牧畜、そして近代文明を発達させてきたが、先史時代の狩猟採集民の文化がまったく消えたわけではない。狩猟民は、農耕民や牧畜民との関係を維持しつつ、国家のなかではマイノリティーとして世界のなかでは先住民として位置づけられるなか、様々な創意工夫のもとに現在にいたっている（池谷編 2017）。

ここでは、アジアの新人文化の形成プロセスの多様性を理解するために、現存するアジアの狩猟採集民の多様性を把握する枠組みを構築することを目的とする。これまで生態人類学では、人類の初期の姿を復元するための研究が行われてきた。しかしながら、近年では先史学・考古学の研究が進展してきており、現在の民族誌はいつの時代の人類の暮らしを復元できるのかが問われている。例えば、現存する多くの狩猟採集民のなかで犬の助けを借りる槍猟が行われてきたが、更新世中期の狩猟採集民の狩猟の復元にはつながりにくい。約数万年前に家畜化された犬の誕生以降における狩猟民の狩猟活動の復元には有効になるであろう。

筆者は、アジア各地での狩猟採集民のなかでのフィールドワークをとおして、現存するアジアの狩猟民の多様性は、『5つの環境区分と5つの地域生態系の仮説』によって説明できると考えている。ここでは、具体的に個々の地域の状況を紹介する。

2 アジアの狩猟採集民の多様性：

『5つの環境区分と5つの地域生態系の仮説』

アジアの狩猟採集民は多様である。北から南へと異なる自然環境に適応してきた。かつては、アジアの隅々まで狩猟採集民は暮らしていたが、冒頭で言及したように農耕社会の拡大や文明の発達、および近代化や開発にと

もない狩猟採集民の生存が危ぶまれている地域が多い。人々は、アンダマン諸島の北センチネル島など一部の地域を除いて国家とのかかわりを持って暮らしている。以下、筆者のフィールドワークと関連文献の渉猟から5つの環境区分（寒帯・冷帯、温帯、3つの熱帯）と5つの地域生態系の仮説を検証する。

1) 寒帯・冷帯：「狩猟民・牧畜民共生系」、あるいは「狩猟牧畜民独立系」

アジアの寒帯である北東部のツンドラ地帯にはロシアエスキモーやチュクチが暮らしてきた。ここでは、エスキモーの方が先に暮らしていたが、内陸に暮らしていたチュクチが生活域を拡大させてエスキモーから海獣狩猟の文化を学習して海岸部に適応したといわれる（写真1）。このため、現在においてもチュクチの大部分は内陸部においてトナカイ牧畜を中心として暮らしをするが（写真2）、海岸部ではセイウチ鯨を中心とした海獣狩猟に依存した生活をしている。

ここで、興味深い点は、海岸部と内陸部との集団間関係である。例えば、チュクチは気候変動などによって内陸部の暮らしが厳しくなると海岸部に移動して海獣鯨をするという。また、海岸部と内陸部の間で交易の関係が



写真1 チュクチのクジラの屠畜（筆者撮影）



写真2 チュクチのトナカイ飼育（筆者撮影）

ある点である。海岸部からアザラシの油などが内陸部にもたらされる。その一方で、チュコト半島の東部においては海獣猟とトナカイ飼育とを組み合わせた生業が営まれている点である。なお、この地帯には狩猟民ユカギールのほかに狩猟と牧畜を組み合わせる狩猟牧畜民のエヴェンキやトゥヴァやツァータンなどが暮らしてきた。

2) 温帯：「狩猟民・文明社会共生系」

アジアの温帯には、現在、あまり多くの狩猟民は見いだせない。アイヌの人々が、北海道からサハリン、千島列島において暮らしてきた（図1参照）。彼らは、江戸時代以前においては狩猟、採集、漁労に加えて交易が重要な生計活動であった。とりわけ、北海道と樺太およびアムール川流域における山丹交易はよく知られている。アイヌ側からは主に毛皮が移出されて、その反対にアムール側からは山丹服やガラスビーズなど中国文明内につく

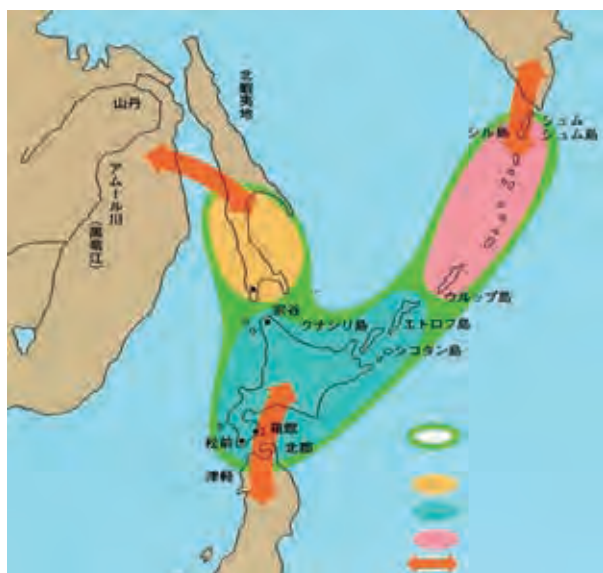


図1 アイヌの居住地域（北海道、サハリン、千島列島）

られるものが移入されていた。その後、北海道のアイヌの人々は、商場知行制や場所請負制をととして日本の幕藩体制のなかに巻き込まれていく。その結果、彼らは本州から移住してきた商人との関係を維持することになる。江戸時代のアイヌの人々が購入した米を食べていたのも交易関係の結果をよく示している。

このほかにもアムール川の下流域に暮らすウデヘ、ナーナイ、ニブヒなどもまた狩猟採集漁撈のほかに交易活動を組み合わせた生計活動を行っており、いずれもが中国文明と密接な関係を維持していた。また、中国の東北部の大興安嶺山脈には、オロチョンが暮らしてきた。彼らはトナカイや馬の飼育をする集団と狩猟採集活動を維持していた集団とに分かれていた。彼らもまた中国文明との関係を持ちながら文化を維持してきた。

3) 熱帯・山岳部：「狩猟民・農耕民共生系」

熱帯には、3つの環境区分に応じて狩猟採集民が暮らしてきた。まず、熱帯の山岳部は、中央政府の力が届かない周辺地域であることが多く、熱帯アジアの内陸部に狩猟採集民が暮らしてきた。ネパールの中間山地帯ではラウテ（写真3）、ラオスやタイの山岳部ではムラブリが知られている。前者は、山中を移動している集団であり、狩猟が規制されていることもあって木工品（とくに農民が物を入れる木箱）を生産してそれを農民に売ることによって米などを入手していた。タイのムラブリの場合には、いずれもが定住化した暮らしをしていて、農民の仕事の手伝いするムラブリのみならず、自らが農耕民と交易する関係を持つ人もいる点が特徴である。

4) 熱帯・島嶼部：「狩猟民独立系」あるいは「狩猟民・農耕民共生系」

現存する狩猟採集民が海岸部を利用することはほとんどみられない。17世紀の熱帯アジアではヨーロッパ人の



写真3 ネパールのラウテの人々（筆者撮影）

移住と植民地化によって海岸部は発展することが多いためそこの狩猟民の暮らしは維持されなかったと推察される。しかしながら、インドのアンダマン島やニコバル島の事例は例外である。

2018年11月に、アメリカ人の宣教師が殺害されたアンダマン島が代表する事例である。ここでは、上述したチュクチの一部の事例のように一つの集団が内陸部と海岸部とを交互に移動する暮らしが営まれてきた。内陸部ではイノシシを対象にした狩猟、海岸部では弓矢を利用した漁撈が行われていた(写真4)。また、ニコバル島においては海岸部にはマレー系農耕民、内陸部には狩猟民のショウベンが暮らしていて、両者の間で共生関係が維持されていた。



写真4 アンダマン島民の漁撈(筆者撮影、アンダマン島の博物館の展示)

5) 熱帯・森林部:「狩猟民・農耕民共生系」

アジアの森林部において、マレー半島のオランアスリやマニ、ボルネオ島のプナン、スマトラ島のクブ、パラワン島のバタック、スリランカ島のヴェッダなど多数の狩猟民が暮らしてきた(写真5)。これらの多くは単独で暮らすものはほとんどいなく、農耕民とのあいだで共生関係を維持する人々が多い。ルソン島北部に暮らすアエタなどでは、数千年のあいだにわたり農耕民との共生関係が維持されてきたことはよく知られている。とくに交易関係では、鉄やタバコが集団に流入されてその代わりに森林産物が移出されてきた。これらの関係は、ボルネオ島のプナンのように森林からの沈香の採取とその販売という点から現在でも維持されている。



写真5 フィリピンのパラワンの女性(筆者撮影)

3 考察:アジアの新人文化の多様性(6区分)と現存の狩猟採集民の多様性(5区分)との比較

本稿では、アジアの狩猟採集民の過去と現在をつなげることがどこまで可能であるのかという問題意識のもとに、現存するアジアの狩猟採集民の多様性を把握する枠組みを構築することを目的とした。その結果、①寒帯・冷帯、②温帯、③熱帯・山岳部、④熱帯・島嶼部、⑤熱帯・森林部という5つの環境区分と①「狩猟民・牧畜民共生系」、②「狩猟民・文明社会共生系」、③「狩猟民・農耕民共生系」、④「狩猟牧畜民独立系」、⑤「狩猟民独立系」という5つの地域生態系から現存するアジアの狩猟採集民の多様性を把握できることが明らかになった。

それでは、パレオアジアの研究においてよく知られているアジアの新人文化の多様性(門脇誠二氏の仮説)との関係はどのようなものであろうか(図2参照)。彼は、更新世の考古遺物の分布からアジアの新人文化を6つに区分している。①シベリア・モンゴル、②中国・日本列

島、③東南アジア、④南アジア、⑤西アジア、⑥ヨーロッパである。このなかでは、ダチョウの卵殻製のビーズがモンゴル、中国、南アジアで共通して存在するなどの興味深い点を指摘できる。

ここで、筆者の環境仮説と門脇誠二氏との地域仮説との比較を試みる必要がある。一見すると、ヨーロッパを除いてみると2つの仮説は類似しているようにもみえる。しかしながら、熱帯の森林部は東南アジアから南アジアに広く存在していて、筆者の方は環境の共通性を重視している。また、筆者の指摘する島嶼部の生態系が新人文化の形成の時代に存在したのか否かは疑問点として残される。両者とも、アジアのなかでの日本列島の狩猟採集民の位置づけが不明瞭である。

今後、以下のような3つの問いを明らかにする必要がある。



図2 パレオアジアの新人文化の多様性（門脇誠二作成）

ある。【問い1】果たして更新世の中期や後期におけるの狩猟採集民の多様性や共通性はどのようなものであったのか、【問い2】別の狩猟民（ネアンデルタール人、デニソワ人など）との共生関係は存在したのか、その後、【問い3】農耕・牧畜の拡大や古代国家の成立などにもともない狩猟採集民社会はどのように維持してきたのか変容してきたのかという点である。筆者は、先史から現在まで

の狩猟採集民の歴史を説明する動態モデルを構築することを今後の課題にしたい。

参考文献

池谷和信編

2017 『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生—』 東京大学出版会。

道具としての植物利用 ——インド北東部アッサム地域を中心に

上 羽 陽 子 (国立民族学博物館)
金 谷 美 和 (国立民族学博物館)
中 谷 文 美 (岡山大学)

1. 本研究の背景と目的

本研究は、民族学的視点から、インド北東部アッサム地域におけるタケ利用の実態を調査し、道具資源としてのタケの特性に注目することで、東南アジアの生態環境における石器製作技術との関連を示唆することを目的としている。

本研究の背景には、「タケ仮説」をめぐる議論がある。東南アジアの更新世から完新世前半の石器資料をめぐっては、①礫石器・二次加工のない剥片が卓越すること、②その特徴が更新世を通じて継続していることが注目され、このことがこの地域の文化的停滞を示すものとみなされてきた。しかし、「タケ仮説」の提唱者によれば、これは文化的停滞の結果ではなく、石器を発達させる必要がなかったためとの見方が提示されている。その理由は、①熱帯雨林地帯には、タケをはじめとした植物質の道具素材が豊富にある(図1)、②石器素材となる岩石は植物質の道具素材の伐採・加工に使われることが主である、③そのために、小石刃技術の発展の必要性がなかった、

④タケが、石器に代わる刃物としての有用性を備えているなどである。

とはいえ「タケ仮説」を支える直接的証拠はこれまでなかった。また、石器を用いることのない現代社会において、石器利用と植物資源との関係性を導き出すような民族誌資料の収集も難しい。したがって、東南アジアの生態環境において、道具資源となる植物の利用実態を明らかにすることが、タケ仮説を検証する視座を与えるのではないかと考えられる。

2. 研究の方法と調査地

本研究の調査地は、インド北東部アッサム地域である(図2・3)。アッサム地域は、石器形成の境界線である「モビウスライン」上にあり、物質文化的に重要な地点にある。気候は温暖夏雨気候に属し、年間降水量は、2,000から4,000mmに達する(浅田 2014: 30)。そのため稲作が卓越し、森林資源にもめぐまれ、本研究対象であるタケは、23属124種確認されている(Nautiyal *et al.* 2012: 3)。



図1 出典: Native bamboo regions (Ranjan 1986: 19)



図2 出典：Stone Tools and Bamboo (Pope 1989: 50)

このような環境資源を背景に、同地域では農耕、漁業、家畜飼養、養蚕、林業などが複合的に展開しており、カースト分業が一般的とされるインドの他地域とは異なる生業のあり方がみられる。このアッサム地域では、タケ、ヤシ、チーク、ラタンなどの森林資源を用いて、漁労具、農耕具、家畜飼養具などが製作されている。とりわけタケの利用が多く、ヒモや杭、柵などから家屋の屋根や壁、建材に至るまで多様な展開がみられる。

筆者等は、アッサム地域におけるタケ利用に関する民族誌調査を実施した。調査内容は、タケを用いた生活用具に関する悉皆調査、タケ伐採とタケを用いた生活用具の制作工程の観察、タケの伐採道具と加工道具の熟覧調査である。

3. 明らかになったこと

上記の調査から、現時点で明らかになっているのは、以下の3点である。

1) 多様な道具を12種類のタケの使い分けによって製作していること

調査地では図4のように、12種類のタケを使って、くらしの用途に適した多種類の生活用具を製作している。たとえば、柱や杭などには平地に生育する固くて強度があるタケ(ジャティ *Bambusa Tulda*, Roxb.)、ウシをコントロールするムチや、ヤシの実を落とす竿、カゴ編み材などには、平地で生育する細く、しなやかで節間が長いタケ(ビジュリ *Bambusa assamica* Barooah et Borthakur)、

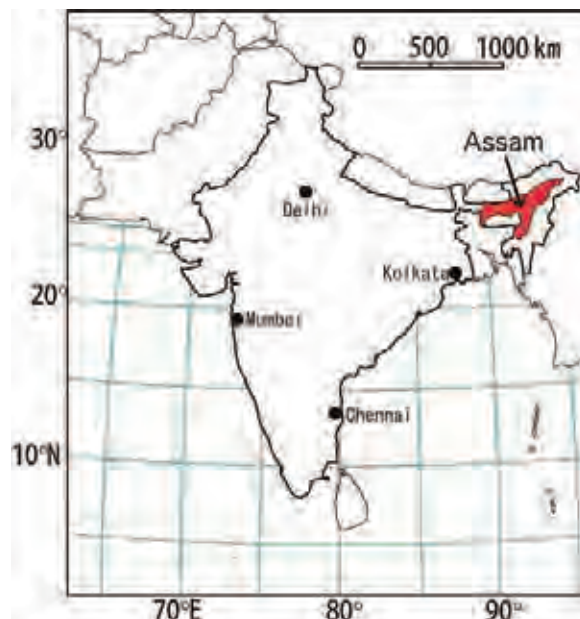


図3 アッサム地図 (筆者作成)

【調査地：平地と山地の12種類の名称】

平地のタケ	1. ジャティ <i>Bambusa tulda</i> , Roxb.
	2. ビジュリ <i>Bambusa assamica</i> Barooah et Borthakur
	3. バルカ <i>Bambusa balcooa</i> , Roxb.
	4. ジャーワ
	5. コタ
山地のタケ	6. ケコア <i>Dendrocalamus hamiltonii</i> Nees and Arn ex Munro.
	7. ノルバ
	8. ドレバ
	9. ケコアバルカ
	10. フールジャル
	11. ナルカゴリ
	12. エコラ

異なる特性をもつ多種類のタケ
↓
合理的に用途に適した
タケを使い分けている

図4 調査地：平地と山地の12種類の名称

収穫した粉を保存する大型カゴの編み材は山地に生育する柔らかくて軽いタケ(ドレバ 学名不明)、漁撈に使用する浮子は湖などの周辺に生育する細く軽いタケ(ナルカゴリ 学名不明)、鋤の把手や柵などにはとても硬く、稈が曲がっている山地で生育するタケ(コタ：学名不明)、などである(図5～図11参照)。

2) 1つの加工具で切る、割る、削るといった作業が可能であること

調査地では、鉈(現地名：ダオ)(図12)を使ってタケを切る、割る、削るといった加工をしている。このように1つの加工具で多様な製作物をつくることのできる要因は、以下の通りと考えられる。

① 細いタケから太いタケまでさまざまな太さのタケが



図5 ヤギをつなぎとめておく杭（タケの種類：ジャティ）



図6 ウシをコントロールするムチ（タケの種類：ビジュリ）



図9 鋤の把手（タケの種類：コタ）



図7 収穫した籾を保存する大型カゴ（タケの種類：ドレバ）



図10 建材（タケの種類：バルカ）



図8 浮子（タケの種類：ナルカゴリ）



図11 ヨーグルトを入れる容器（タケの種類：ドレバ）

図5～図11は2018年3月アッサムにて上羽陽子撮影。



鉈(現地名:ダオ)
切る・割る・削る
刃角:6度
刃部分の重さ:420g

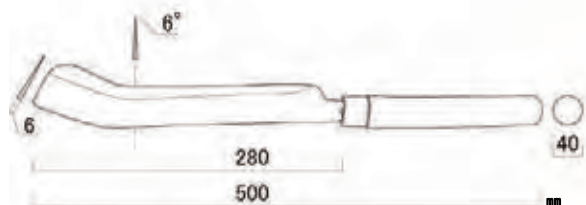


図12 鉈(筆者作成)

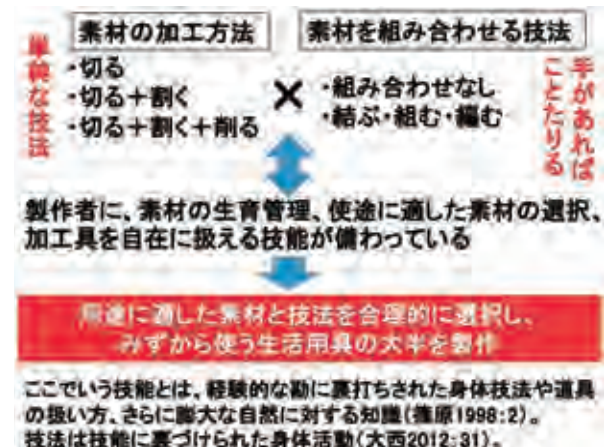


図13 単純な加工技法によるタケ利用

あり、それぞれの稈と枝を利用することができ、生育年数によって太さも選ぶことができる。つまり、用途に応じて多種類の異なる太さが手に入るため、加工により太さを調整する必要がない。

- ② タケの特性である割りやすさと割れるときの規則性により、タケに刃先を入れて負荷をかけることで容易に割ることができる。
- ③ 稈が中空のため、負荷をかけずに伐採することができる。

タケについては、「強度、軽さ、平滑さ、真っ直ぐなこと、丸いこと、中空があること、割りやすさと割れる時の規則性、様々の違った大きさ……他の材料を使う場合と比べて作業時間が四分の一で済む」(ウォレス 1991: 73-74)と、素材としての有用性がすでに指摘されている。つまり、少ない道具で済むのは、タケの素材としての特性のためである。

近隣のマーケットでは、チェンソーや鋸などが販売されており、容易に入手することは可能である。このように加工工具の選択肢は多様であるにもかかわらず、調査地ではタケの特性に応じて鉈という1つの加工工具を選択している。

3) 単純な加工技法を用いてタケを利用していること(図13)

調査地での素材の加工方法は、切る、割く、削るといった単純な技法である。その素材を組み合わせる技法は、①組み合わせなし、つまり切っただけのタケを杭のようにそのまま用いる、あるいは②結ぶ、③組む、④編むである。これらの組み合わせに大がかりな道具は必要なく、手があればことたりる。このような単純な加工技法を支えているのは、製作者の素材の生育管理、用途に適した素材の選択、道具と素材加工を自在に扱える技能である。

そのため、用途に適した素材と加工技法を合理的に選択し、みずから使う生活用具の大半を製作しつづけることが可能となっている。

さらに特筆すべきは、これらの製作物は、一定期間の使用に耐えるだけの耐久性があると同時に、用途に適した機能を備えていることである。そのため、他の種類の道具やより複雑な加工技法をもちいる必要がない。つまり、それ以上の複雑化・進化を必要としない状況で、複合的な生業をなりたせながら継続してきたといえる。

4. まとめ

本研究では、インド北東部に位置するアッサム地域での民族誌調査に基づいて、道具資源としてのタケの特性を明らかにし、限られた種類の加工工具で、単純な加工技術を用いたタケの利用が、複合的生業を成り立たせている実態を示した。これらの実態調査によって明らかにしたことは以下の3点である。

- 1) 道具資源としてのタケの特性が、限られた種類の加工工具と比較的単純な加工技術を用いたタケの利用を可能にしている。
- 2) タケの道具利用には、必ずしも鋭利な断面は必要ない。ただし、礫石器や二次加工のない剥片でタケの伐採・加工が可能であるかどうかは検証が必要である。
- 3) 植物資源それ自体が、道具資源であると同時に食糧資源であった可能性がある(タケノコ、タケの中空をすみかとする蛾の幼虫、樹液など)。

【参考文献】

- Nautiyal, Subhash, S. Razvi, and D. P. Nautiyal
2012 *A Handbook of Bamboos: Resources, Propagation and Management*, Dehra Dun, India: Bishen Singh Ma-

- hendra Pal Singh.
Pope, Geoffrey G.
1989 "Bamboo and human evolution" *Natural History: Incorporating Nature Magazine* Vol.10, pp.49-56.
Ranjan, M. P.
1986 *Bamboo and Cane Crafts of Northeast India*, Ahmedabad: National Institute of Design.
- 浅田晴久
2017 「インド・アッサム州、ブラマプトラ川氾濫原におけるムスリム移民の生業活動と土地利用ーヒンドゥー教徒住民との比較を通してー」『広島大学現代インド研究ー空間と社会』Vol.7, pp.1-18。
- ウォレス, A. R.
1991 『マレー諸島』宮田彬（訳）、東京：思索社。
大西秀之
2012 「序ー技術をモノ語る苦難と悦楽（特集 技術を語る民族誌の新たな地平）」『文化人類学』Vol.77, No.1, pp.27-40。
篠原徹
1998 『現代民俗学の視点1 民俗の技術』東京：朝倉書店。
山岡拓也
2010 「東南アジアにおける更新世から完新世前半の考古学研究とタケ仮説」『論集忍路子』Vol.3, pp.75-88。

アイヌ民族・文化形成における異系統集団の混淆 ——二重波モデルを理解するための民族史事例の検討

大 西 秀 之
(同志社女子大学)

I. はじめに

アイヌ民族・文化の形成過程は、日本列島だけでなく北東アジアを対象とする歴史学や人類学にとって主要な研究課題の一つである。このテーマは、現在まで考古学、歴史学、民族学、自然人類学など様々な研究分野において取り組まれてきた。他方、アイヌ民族の起源は、縄文時代の集団に直接的に遡及できるという説が、一般市民のみならず近年まで数多くのアカデミズムのなかでも信じられてきた。いわゆる、アイヌ民族は、北海道における「縄文人」の直径かつ純粋な子孫である、という社会言説である。

しかしながら、こうしたアイヌ民族・文化の起源に関する言説は、遺伝学や自然人類学などの研究によって現在まで否定されている。これを受けて、本報告では、主に考古学と民族誌のデータを用いてアイヌ民族・文化の形成過程を検討し解明する。

ところで、中世併行期の北海道には、遺伝的にも文化的にも異系統の集団によって担われていた、擦文文化とオホーツク文化という考古学的に規定された二つの先史文化が存在し展開していた〔cf. 河野 1935；河野・名取 1938；大井 1970〕。同時に、これらの文化の考古資料は非常に性格を異にするものであり、それぞれの担い手の集団も遺伝的に異なっていたことが、1930年代には指摘されていた〔石澤 1931〕¹⁾。したがって、これらの異系統集団・文化が、中世併行期以降のアイヌ民族・文化の形成にどのように関わり貢献したのか、という問いは非常に興味深い課題である。

以上を踏まえ、本報告では、擦文文化とオホーツク文化が次の中世併行期のアイヌ民族・文化の形成にどのような関係・貢献を果たしたのか検討・考察を試みる。具体的には、特に中国大陸や本州以南など外部社会からの影響によって引き起こされた擦文文化とオホーツク文化の接触・融合によって、中世併行期のアイヌ文化が形成されてゆく過程に焦点を当てる。このような検討を通して、これまで往々にして縄文文化・時代から直接的かつ

単線的に説明されてきたアイヌ民族・文化の形成史を再検討し新たな展望を提示する。こうした視点は、同時に狩猟採集社会における二つの異系統集団の接触・融合を理解するための事例研究ともなるだろう。

II. 北海道の歴史展開

本報告では、まず北海道の歴史展開に関する基本情報を提示する。第1図は、本州以南の歴史区分と比較した

北海道 （先史・歴史）		日本本土
旧石器時代	旧石器時代	(44,000 BP)
縄文時代	縄文時代	(10,000 BP)
続縄文時代	弥生時代	(250 AD)
オホーツク文化期	古墳時代	(300 AD)
擦文文化期	飛鳥時代	(500 AD)
	奈良時代	(700 AD)
	平安時代	(700 AD)
中世(併行)アイヌ期	鎌倉時代	(1200 AD)
近世(併行)アイヌ期	室町時代	(1500 AD)
	安土桃山時代	(1600 AD)
	江戸時代	(1600 AD)
	近現代	(1868 AD)

図1. 北海道の時代区分

北海道史の区分である〔Ōnishi 2014〕。この表から縄文時代までは、北海道と本州以内の間に主要な部分でそれほど大きな違いがないことが確認できる²⁾。これに対して、縄文時代終末後の二地域の歴史は、現代に至るまで非常に異なる展開となっている。こうした違いは、さまざまな要因が関与するなかで生起しているため、単一の要因をもって容易に説明できるものではない。とはいえ、北海道の歴史の特性が成立した要因は、基本的には自然生態環境の違いや近隣社会との関係に起因する、と概括的にまとめることができる。

もっとも、北海道史の最大の特徴は、同地域に開拓移民が押し寄せる明治期以前まで、当該地域の社会や文化は本州以南の多数派集団とはエスニシティを異にするアイヌの人々によって担われていたことにほかならない。ただアイヌの人々は、無文字社会を営んでいたため、彼ら彼女らは自らの歴史を書き遺すことはなかった。したがって、この時代区分は、基本的に考古学などの調査研究に基づいて構築されたものである。

以上のような背景の下、アイヌ民族／文化の形成過程の解明は、北海道史の主題の一つとして考古学、文献史学、民族学、人類学など多様な研究分野が取り組んでいる。ところで、冒頭でも指摘したように、アイヌ民族の起源については、縄文文化を担った人々の直系の子孫である、という「語り」が近年まで一般市民だけでなく数多くの研究分野でも信じられてきた〔e.g. 埴原 1991〕。だが現在、この種のアイヌ民族の起源譚は、遺伝学や自然人類学の調査研究によって否定されている〔尾本 1996〕。これを受け、本報告では、考古資料を中心にアイヌ民族／文化の形成過程の解明を試みる。

なお第1図に提示した時代区分では、中世併行期以降に「アイヌ期」というタームが使われている。この時代呼称は、たぶんに誤解を孕む表現である。というのも、この時期呼称は、アイヌ民族／文化が中世併行期になって形成された、という認識を導きかねないものだからである。しかしながら、この時代区分は、決して現実の状態を反映するものではなく、考古学上の用語の問題に過ぎない。実際、「中世（併行期）アイヌ期」の前後で人間集団に明白な断絶はなく、むしろその間の連続性が遺伝学や自然人類学の調査研究によって確認されている³⁾。

ただし、中世（併行）アイヌ期とそれ以前の時期の間には、少なくとも物質文化の側面に数多くの大きなギャップが確認できる。実際、中世（併行）アイヌ期の直前には、擦文文化とオホーツク文化という考古学によって設定された二つの先史文化が北海道に広がっていた〔河野 1935；河野・名取 1938；大井 1970〕。これらの文化は、非常に異なる考古資料を遺しており、またその担い手も

遺伝的系統を異にする集団であったことが、既存の調査研究によって明らかにされている。したがって、遺伝的にも文化的にも系統を異にする擦文文化とオホーツク文化が、次の中世（併行）アイヌ期の形成にどのように関係しているか、という問いは非常に重要な研究課題といえる。

Ⅲ. 擦文文化とオホーツク文化の概要

擦文文化は、A.D.700～1200年の期間に北海道と本州北端に分布していた。その生計戦略は、続縄文文化から引き継がれた狩猟・漁撈・採集と一部粗放的な穀物栽培に基づいていた、との想定がなされている〔e.g. 藤本 1982；野村・宇田川 2004；瀬川 2005〕。

第2図には、擦文文化の出土遺物を提示した。これら

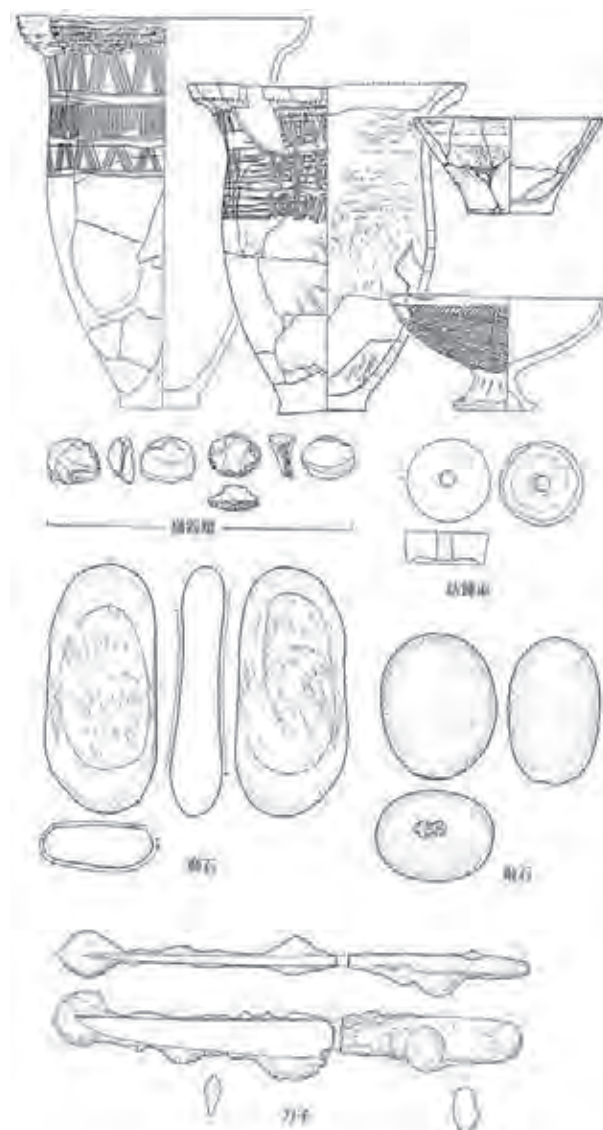


図2. 擦文文化の遺物

の遺物組成に関しては、石器の出土量と器種が非常に乏しい、という特徴が指摘できる。またこうした特徴の背景には、主要なツールが石器から鉄器に代わっていた、との想定が提示されている。実際、擦文文化の遺跡からは、刀子（ナイフ）や縦斧・横斧などの鉄器が出土している。ただし、これらの鉄器は、擦文文化集団そのものが生産したのではなく、本州以南の地で生産された移入品と推察されている。

擦文文化集団は、続縄文文化に系譜が辿りうる在地系の人々によって主に構成されており、現在までのアイヌ民族の直接の祖先である、との認識が広く共有されている。もっとも、その文化複合は、本州北部の強い影響や類似性が認められることから、この地域からの集団移住が同文化の形成に関与していた可能性も指摘されている。

いっぽう、オホーツク文化は、北海道だけでなく日本列島でも最もユニークな先史文化の一つである。オホーツク文化は、A.D.600～1000年代の期間にサハリン南部、北海道北東部の沿岸部、千島列島に分布していた。その生計戦略は、顕著な特徴として海浜での漁撈や海生哺乳類の狩猟、沿岸域に形成される集落や居住パターンなどが認められることから、徹底した海洋適応に基づいていたと想定されている [e.g. 大井 1982; 野村・宇田川 2003; 天野 2008]。

第3図には、オホーツク文化の出土遺物を提示した。

オホーツク文化の遺物組成は、擦文文化と比較すると石器、骨角器、金属器などの多様な原材料から製作された、さまざまなツールキットからなっている。また同文化でも、自製品ではないものの、数種類の鉄器が使用されていた。なおこれらの鉄器は、アムール川流域の大陸側で生産され、北方ルートからサハリンを介して導入されていたと想定されている。さらには、このルートは鉄器にとどまらず、数々の文物や情報などをオホーツク文化にもたらししていた可能性が指摘されている [cf. 菊池 1995; 2004]。

オホーツク文化集団は、擦文文化を含む北海道在来の人々とは遺伝的系統を異にする集団とみなされている。その系譜は、形質的・遺伝的特徴から、アムール川流域やサハリンなどに居住する北方系モンゴロイド集団との近縁性が指摘されている [e.g. Matsumura et al. 2009]。このため、オホーツク文化は、近年までアイヌ民族やその文化の形成には直接関係がない、との認識が一般に共有されていた。

IV. 異系統文化の接触・融合

擦文文化とオホーツク文化は、A.D.700～900年の期間、北海道において同時に展開していたが、それぞれ異なる生活圏に分布し、基本的には相互交流などの接触関係は非

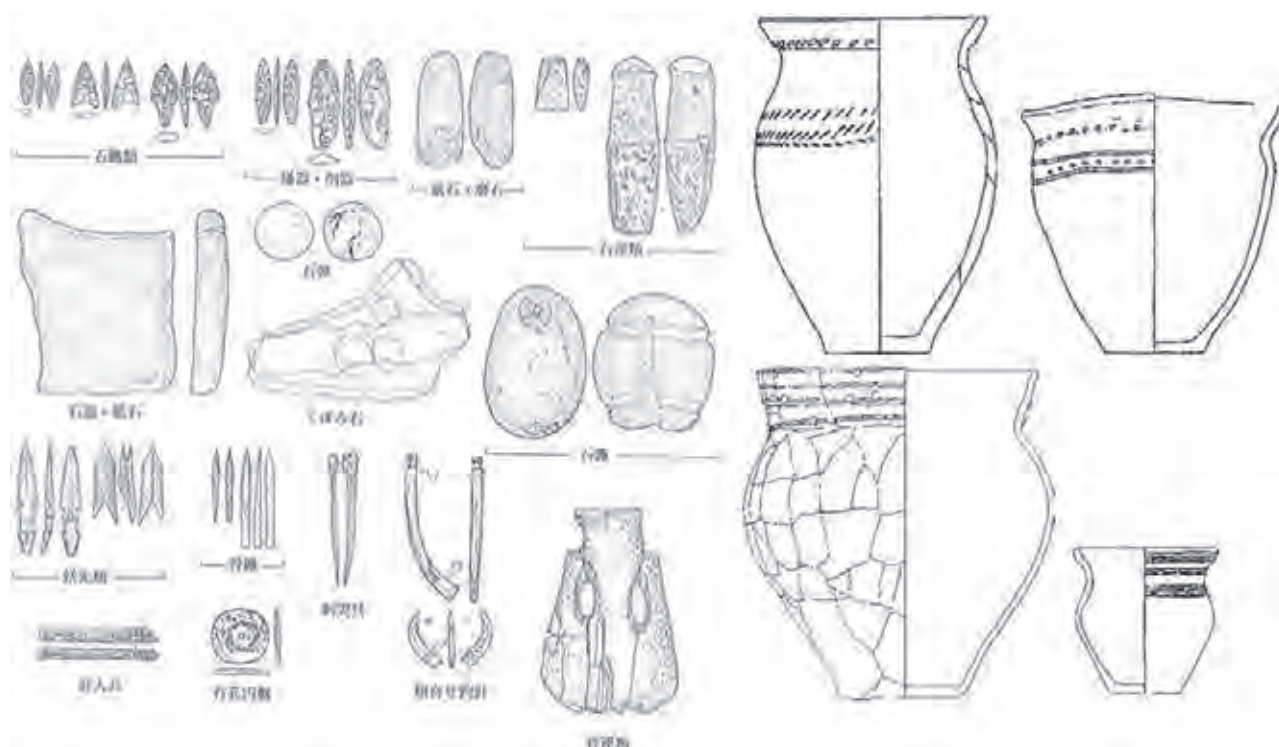


図3. オホーツク文化の遺物



図4. 中世併行アイヌ文化期への移行

常に限定的であった(図4)。ところが、おおよそ10世紀頃に、これら二つの異系統集団・文化は、急激に接触融合を引き起こすのである。ちなみに、こうした接触融合は、北海道の東部と北部で別々に形成されたことが、考古資料から確認されている[e.g. 大井 1972; 山浦 1983; 大西 2009]。

本報告では、資料的にも豊富で調査研究の蓄積が進んでいる、「トビニタイ文化」と考古学的に設定された北海道東部のケースに焦点を当てる。トビニタイ文化は、オホーツク文化が擦文文化から人工物、生産・生業技術、居住パターン、生計戦略などの数々の要素を段階的に受け入れ、最終的に擦文文化に吸収・同化されてゆく移行段階と推定できる。たとえば、最初期のトビニタイ土器は、オホーツク文化の製作技術を用いて擦文式土器の模様、装飾、器形を模倣していたが、最終段階ではその技術を完全に習得し擦文式土器そのものとししか判断できないものを製作するようになる[大西 1996; 2009]。同様な現象は、住居構造や道具組成などにも認められる[大西 2001; 2003; 2009]。これらの事例から、トビニタイ文化は、最終的には少なくとも物質文化側面では擦文文化そのものと区別がつかないものになる(第5図)。

いっぽう、擦文文化の側には、オホーツク文化と接触融合しトビニタイ文化を形成する証拠や動機は確認できない。このため、トビニタイ文化は、オホーツク文化の側が積極的に擦文文化に同化吸収された過程と想定できる。ちなみに、遺伝子レベルでも、考古資料から導かれたオホーツク文化集団の擦文文化集団への同化吸収が確認されている。さらに最新の研究成果では、現在のアイヌ民族はオホーツク文化集団の遺伝子を相当なパーセンテージで受け継いでいることが明らかにされている[Sato and Amano 2007]。

北海道東部におけるオホーツク文化と擦文文化の接触融合が生じた理由としては、環境変動や政治社会的影響などの仮説が提示されている。しかしながら、それらの仮説の大部分は、必ずしも具体的かつ十分な考古学的証拠に基づくものではない。そうしたなか、考古学資料から二つの文化の接触融合の要因を検証できる対象とし

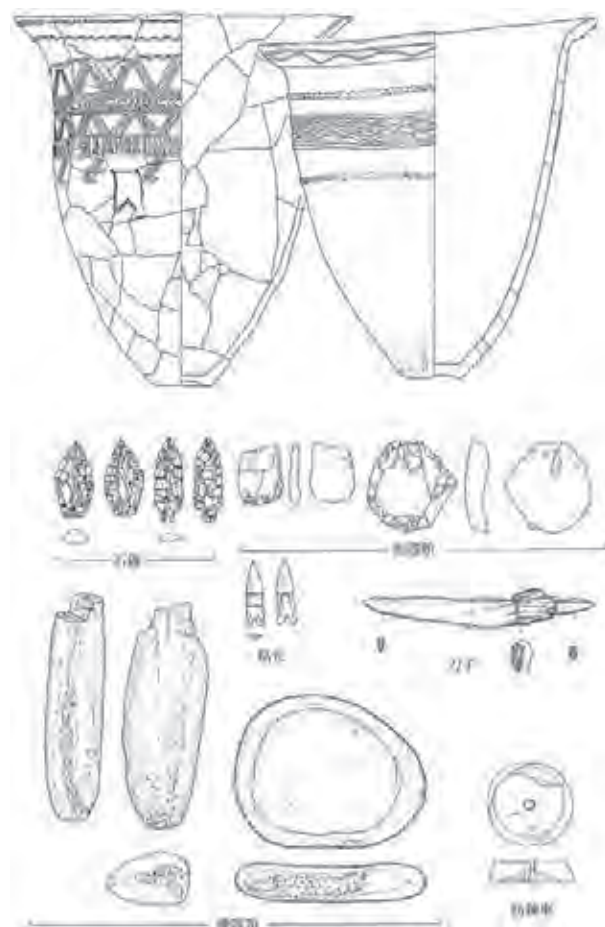


図5. トビニタイ文化の遺物

て、トビニタイ文化の鉄器をあげられる。

まずトビニタイ文化の鉄器は、その形態的特徴から前段のオホーツク文化から擦文文化に類似するものに置き換わることが指摘できる。このことから、トビニタイ文化における鉄器の供給源は、アムール河流域を中心とする北方ルートから、本州以南からの南ルートにシフトしたと推測される。またオホーツク文化の分布圏は、本州以南の鉄器供給ルートに直接接していないため、擦文文化を介して鉄器を入手していたと推定される。これらを是認するならば、北海道東部のオホーツク文化集団は、日常生活を営む上で不可欠な鉄器の安定供給を確保するため、擦文文化との関係性の構築が不可避となり両文化集団の接触融合が進んだ、という仮説が提示できる[大西 2008; 2009](第6図)。なおこうした接触融合は、オホーツク文化の期間よりも遥かに多くの量の鉄器をトビニタイ文化集団に安定的に供給し、その結果日々の社会生活を維持するために不可欠な道具のほとんどを石器から鉄器に置き換えることができた、との推察を導くことができる。

以上の歴史展開を踏まえた時、北海道におけるオホー

ツク文化集団もまた、アイヌ文化形成の潮流に関与している、との理解が可能となる。というのも、「原アイヌ期」とされる擦文文化期から中世（併行）アイヌ期への

移行は、本州以南の日本列島における交易ネットワークと地域分業への統合過程に起因すると想定されるからである。つまりは、遺伝的・文化的に異系統とされるオホーツク文化集団の消長もまた、アイヌ文化形成の展開のなかの一潮流に統合される、という理解が可能となる。



図6. 北海道における擦文・オホーツク文化期の鉄器移入ルート

Ⅵ. アイヌ民族・文化にとっての意義

これまでの議論を踏まえ、本報告では、最後にアイヌ文化形成におけるオホーツク文化の役割について考察する。オホーツク文化のなかには、中世（併行期）以降のアイヌ文化形成において重要な関与を果たし、現在までのアイヌの文化遺産として引き継がれている要素が少なからず指摘できる。

その最も顕著な事例の一つとして、イオマンテと呼称されるクマの送り儀礼があげられる。この儀礼は、アイヌ社会において最も重要な文化的実践と見なされているものである。ところが、現在まで擦文文化には、クマ送り儀礼の痕跡と見なしうる考古資料は極めて限定的にしか確認されていない。これに対し、オホーツク文化の遺跡からは、クマなど動物の送り儀礼に関連すると推察される遺物や遺構が数多く検出されている〔大西 2009〕（第7図）。この他、アイヌ民族／文化の言語や象徴実践などにも、オホーツク文化に由来すると推察される痕跡が少なからず指摘できる〔大西 2009〕。

以上の事例から、オホーツク文化集団は、遺伝的にも文化的にもアイヌ民族／文化のもう一つの源流である、という理解を導くことができる。この見解は、従来、縄文文化／時代から直接的かつ単線的に語られてきたアイヌの人々の歴史に対する再考と新たな展望を開くものとなるだろう。さらには、資料的に限定された先史考古学にとっても、時間的に限定された民族誌調査にとっても、アプローチが困難な異系統集団の接触・融合のプロセスと要因を追究する上で、有用な参照事例ともなるだろう。



図7. オホーツク文化とアイヌ文化の動物儀礼

注

- 1) 石澤命達が報告した同資料は、ほぼ確実にオホーツク文化集団の頭蓋骨であると推察される。もっとも、報告者である石澤は、計測した頭蓋骨の出土地（遺跡）名を明記しておらず、またオホーツク文化と絡めて論じているわけではない。しかし、北方地域に関心を持っていた清野謙次や児玉作左衛門などは、そうした古人骨がオホーツク文化と先史人類学・考古学で呼称されている文化複合に伴うものであることを出土遺跡などから認識していたことが論考から推察される〔清野 1933；児玉 1937〕。
- 2) もっとも、縄文時代の開始期に当たる草創期に関しては、現在までのところ北海道には該当する資料がないことから、旧石器時代に相当する資料を残したライフスタイルが同時期まで存続していたと推察されている。
- 3) 厳密には、擦文文化期の十分な人骨資料が得られていないことから、この推論は前々代に当たる縄文文化との遺伝的・形質的な連続性に基づくものである。なお擦文文化期の人骨資料が得られていない理由は、同時代の墓址の検出事例が極めて少ないためである。

参考文献

- 天野哲也
2008 『古代の海洋民 オホーツク人の世界：アイヌ文化をさかのぼる』 雄山閣
- 藤本強
1982 『擦文文化』 教育社
- 石澤命達
1931 「北見國網走町アイヌ地貝塚出土の石器時代人骨に就て」『人類学雑誌』46(2) pp.47-60
- 埴原恒彦
1991 「アイヌの起源と小進化」『人類学雑誌』99(3) pp.345-361
- 菊池俊彦
1995 『北東アジア古代文化の研究』 北海道大学図書刊行会
2004 『環オホーツク海古代文化の研究』 北海道大学図書刊行会
- 清野謙次
1933 「オホーツク海沿岸の古代文化」『ドルメン』2(8) pp.12-13
- 児玉作左衛門
1937 「アイヌの頭骨に就いて」『聯合大会記事』（口頭発表）
- 河野広道
1935 「北海道の石器時代概要」『ドルメン』4(6) pp.114-122
- 河野広道・名取武光
1938 「北海道の先史時代」『人類学先史学講座』6 pp.1-41 雄山閣
- Matsumura, Hirofumi
2009 “Biological affinities of Okhotsk-culture people with

East Siberians and Arctic people based on dental characteristics.” *Anthropological science: journal of the Anthropological Society of Nippon*, 117(2) pp.121-131

野村崇・宇田川洋（編）

2003 『続縄文・オホーツク文化』 北海道新聞社

2004 『擦文・アイヌ文化』 北海道新聞社

大井晴男

1970 「オホーツク文化と擦文文化の関係」『北方文化』4 pp.21-70

1972 「礼文島元地遺跡のオホーツク式土器について：擦文文化とオホーツク文化の関係について、補論2」『北方文化研究』6 pp.1-36

大井晴男（編）

1982 『オホーツク文化の諸問題：その起源・展開・社会・変容シンポジウム』 学生社

尾本恵市

1996 「アイヌの遺伝的起源」『国際日本文化研究センター紀要』14 pp.197-213

大西秀之

1996 「トビニタイ土器分布圏における“擦文式土器”の製作者：異系統土器製作技術の受容にみる集団関係」『古代文化』48(5) pp.48-62

2001 「“トビニタイ文化”なる現象の追究」『物資文化』71 pp.22-56

2003 「境界の村の居住者：“トビニタイ文化”集落における居住者の出自と世帯構成」『日本考古学』16 pp.157-177

2008 「北海道東部における「中世アイヌ」社会の形成前夜の動向」榎森進・小口雅史・澤登寛聡（編）『エミシ・エゾ・アイヌ：アイヌ文化の成立と変容：交易と交流を中心として（上）』 pp.193-216 岩田書院

2009 『トビニタイ文化からのアイヌ文化史』 同成社

Onishi, Hideyuki

2014 “The Formation of the Ainu Cultural Landscape: Landscape Shift in a Hunter-Gatherer Society in the Northern Part of the Japanese Archipelago.” *Journal of World Prehistory*, 27(3-4), pp.277-293

Sato, Takehoro and Tetsuya Amano

2007 “Origins and genetic features of the Okhotsk people, revealed by ancient DNA analysis.” *Journal of Human Genetics*, 52, pp.618-627

瀬川拓郎

2005 『アイヌエコシステムの考古学』 北海道出版企画センター

山浦清

1983 「オホーツク文化の終焉と擦文文化」『東京大学文学部考古学研究室紀要』2 pp.157-179

ウズベキスタンのリシトン陶業における 19 世紀末以降の技術変化と集団接触

菊 田 悠

(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)

0. はじめに

本報告は、今年度に行ったパレオアジア文化史学に関する現地調査と、これまでの調査結果をもとに、ウズベキスタンのリシトン陶業における 19 世紀末以降の技術変化が、主にロシア人との集団接触によってどのように変遷してきたかをまとめる。今年度の現地調査は、リシトンにおいて主要な陶工たちに参与観察し、インタビューを行った。

1. リシトン陶器の概要

まず 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけての伝統的なリシトン陶業の製法と生態環境とのかかわり、主な製品を見ておこう。基本製法は地元産出の陶土を配合し、成形し、グルブタ（後述）で化粧し、絵付けののち釉をつけて焼くというものである。以下で（ ）内の距離は、リシトン市からの距離を指す。



地図 1 ウズベキスタンとリシトンの位置図

<https://www.worldatlas.com/webimage/countrys/asia/uz.htm> に筆者加筆

陶土 (xoki kuloli) は瘦せた赤土 (xoki surkh) と油っぽい土 (shrador) から配合するが、南部のアライ山系から流れ来る河川が蓄積させた土砂がよい陶土になっている。これらは市内一帯で 1-1.5 メートルの深さに 0.5-1 メートルの厚さの層を成している (Rakhimov 1961)。軽く丈夫な器体となる良質な陶土に恵まれているため、リシトンでは一節によると千年以上前から製陶が行われてきたという。ただしカオリンは含まれていないため、これを焼成しても磁器にはならない。

グルブタ (gulbuta) と呼ばれる耐火粘土・化粧土も重要である。これはリシトン近くの山から採れる。フェルガナ盆地内のイスファラ (60km)、盆地外のアングレン (150 km) から産出する。釉用の石英は近郊のソフ (40-50 km)、グルムサロイ (50-60km)、付近の川から採れる。顔料のうち、青となるラピスラズリはバダフシャンの山やイランのマシュハドから運ばれていた。緑色になる銅はコーカンド (35km)、黒になるマンガンや黄色になる硫黄は近くのアライ山系の斜面より得ていた (Peshchereva 1959)。

次に当時の主要な製品をみてみよう。リシトンにはサルトと呼ばれたムスリム定住民が暮らしており、彼らの主食はノン (non) と呼ばれるパンで、牛肉、羊肉、鶏肉とさまざまな乳製品、米を使ったピラフ (osh) も食べていた。フェルガナ盆地では野菜のほかにブドウ、メロン、スイカ、杏、いちじくなどさまざまな果物も豊富に採れた。半発酵のお茶を飲む習慣も浸透していた。リシトンではこのような食生活に合った食器が作られた。具体的には、基本の食器としてタヴォク (tovoq) と呼ばれる平皿がさまざまなサイズで使用され、40-50cm の直径の charx tovoq は大人数で人生儀礼などの集まりでオシ (ピラフ) を食べるのに向いていた。汁物を入れる碗のコサ (kosa) も使用頻度が高かったと思われる。喫茶に使用するポットと茶碗類は各家庭にいくつもそろっていた。穀物や水、乳製品の保存容器として釉をつけない大型の壺や瓶も用いられていた。パンをこねるのに使ったり、洗濯をする大きなたらいのタゴラ (tog'ora) も生活に密着した陶器製品だった。以下の表に主な製品を記す。

表1 19世紀末から20世紀初頭のリシトン陶器の主な種類

現地語	日本語	用途
tovoq	平皿	食べ物のをせる
charx tovoq	大きな平皿	主にオシ（ピラフ）のをせる
kosa	直径10cm程度の碗	汁物を入れる
kub, choynak	ティーポット	お茶を入れるのに使う
piyola	茶碗	お茶を飲むのに使う
xum	壺	水やミルクの入れ物
qoshquloq, chorquloq,	持ち手のついた壺	水や乳製品の入れ物
ovdasta, kuza	水差し	手を洗う水を入れておく
tog'ora	たらい	洗濯用、パンをこねる用など数種類あった

19世紀から20世紀初頭にかけてチーニー（chinni）、「中国の」とよばれる軟質磁器などを彩り、製品の表面を覆っていたのが天然灰釉イシコール（ishqor）である。イシコールの原義はアルカリで、リシトン陶業においては、草を燃やして採取するガラス状の成分を指す。その原料はリシトン市南部の現クルグズ領の荒地に自生する棘のある草「クルク・ブグン（qirq bo'g'in）」「グロバ（globa）」「イシロン（ishlon）」などである。毎年秋の花の盛りに1ヶ月程度かけて刈り取り、燃やしてできるガラス状の成分を丁寧に採取し、砕いて化粧土と混ぜ、釉としていた。

2. リシトン陶業の近現代史

リシトン陶業は19世紀末から現代にいたるまでどのような変遷を経てきたのだろうか。一言で言うならば、それはロシア人との接触とソビエト政権による近代化による変化である。この節ではPeshchereva（1959）、Rakhimov（1961）、菊田（2013）に基づき生産体制の変化をまとめる。

19世紀末、リシトンには100軒程度の陶器工房があった。陶工の多くは夏には農作業に従事し、農閑期に陶業に携わっていた。陶工はろくろを用いた成形を得意とし、壺や瓶などを作る人々と、釉のついた平皿などの食器を主な製品とし、絵付けを得意とする人々の2グループに主に分かれていた。それぞれの集団内には、自分の工房を持つ親方と、そこで働くハリファと呼ばれる雇い陶工、10代の少年を主とした弟子という3つの階層があった。

当時、フェルガナ盆地（人口は約157万人）ではリシトン産の高価な食器（特に前述したチーニー）は有名で、富裕層によく売れていた。19世紀半ばからの中国の動乱で中国からの磁器輸入が滞っていたこと、ブハラやサマルカンド（両都市を治めていたブハラ・アミール国は1868年にロシア帝国の保護領化している）に比べて、フェルガナ盆地を支配していたコーカンド・ハン国の併合は



図1 クルク・ブグンの展示



図2 ガラス状の成分を粉碎する作業

1876 年であり、その分ロシア製品の流入が 10 年近く遅れたことが影響したと考えられる。

コーカンド・ハン国がロシア帝国領になってから、1899 年にはタシケント―フェルガナ間に鉄道が開通し、タシケント経由でロシアからの磁器製品が入るようになった。そのため 20 世紀初頭には高価な食器は軽く丈夫なロシア製磁器に押されて急減したが、リシトンの陶工はまだ多く、42 軒の陶業工房が釉陶器を作っていた。80 軒という情報もある。

1917 年にロシア革命が起こると 1920 年代にかけて中央アジアも政治的社会的動乱期を迎える。さまざまな勢力が入り乱れて戦ったが、最終的にはソビエト政権が支配権を握り、1924 年に中央アジアの国境を画定する。これによってリシトンはウズベク・ソビエト社会主義共和国の一部となった。

ソビエト政権は、所有に関する不平等をなくす目的で、農業のみならず陶業も集団化することをめざした。こうして 1927 年にはリシトンで最初のアルテリ (artel') と呼ばれる一種の生産組合が作られた。しかし、リシトン陶業の集団化はゆっくりと進み、特に富裕な陶工は 1940 年代まで自分の工房で陶器を作り、生産組合に卸すかたちをとっていた。自らバザールや卸売業者に売る陶工もいた。生産組合に進んで入ったのはハリファが主であった。原料と働く場所が与えられ、ノルマを果たせば給与が得られる生産組合は、親方に雇われたままなかなか独立できない状況よりも良いと考えられたのであろう。

1941 年には全ての陶工が生産組合に強制的に加入させられ、自工房での製陶は禁じられた。1948 年には市内で 4 つの生産組合が活動していた。一番大きい生産組合では 83 人の親方がいて、弟子や助手も入れると 100 人以上が働いていた。この生産組合はロバやチャイハナも所有していた。

しかし、強制的な集団化後も、実際の生産現場では 1960 年代まで、伝統的な製法が主流となっていた。すなわち陶土を用意し、ろくろによる成形を行ってから刻み模様や筆での絵付けを行い、薪で窯焼きをする。この基本ラインに、製品によっては絵付けの前の一度焼きや、二度焼の前の施釉などが加わった。そこでは、複雑な製法のイシコールは親方が自分の子どもや近い弟子以外に秘密にしていたといわれる。生産組合では複雑で手間が掛かるのに給与に反映されないイシコール製品は徐々に作られなくなり、衰退した。

1960-70 年代にかけては生産組合の統合が進み、陶工は増加した。1958 年の最大の生産組合で 70 人の陶工がいたが、1960 年代の工場では 300 人以上が働いた。1972 年には新工場「リシトン陶芸工場」が完成し、広い敷地

では 1500 人以上が働くようになった。これによりリシトンはウズベキスタンにおける日用陶器の主要生産場になった。工場では機械化も進み、電動ろくろや、鋳型、土練機が導入され、ガス窯は電気窯へと変わり、顔料や釉薬の研究部門ができた。ベルトコンベアーを用いた流れ作業も導入され、多くの女性労働者が働くようになった。芸術委員会が決定する見本に忠実な製品を作ることが要求されたため、伝統陶業とは全く異なる日用陶器が量産されることになった。また、タシケントの工場で開発が進んだ磁器も一部で作られるようになった。

伝統製法が失われつつあることへの危機感は、芸術学分野からもたらされた。1974 年にフェルガナ市で開かれた全連邦の芸術学会議で、ウズベキスタン陶業の伝統技法が失われつつあることが懸念され、イシコールを含む伝統技法を残そうという議決がなされたのである (Alieva 1998)。このころから陶器工場内でも伝統製法を復活させる試みがゆっくりと進んでいたが、1988 年からはペレストロイカがそれを加速させた。作家性を明確に打ち出した自由な陶芸が許されるようになり、伝統的な柄やかたちの復活が進んだのである。1970 年代末から個人的に密かにイシコールを研究して復活させた K 親方も、数人の弟子にイシコール製品の配合方法を教え、リシトン陶業の「ルネッサンス」に貢献した。

1991 年にソ連が崩壊しウズベキスタンが独立すると、国営の陶器工場は民営化された。しかし経営はうまくいかず、1996 年に大工場が倒産し、工場の一部を使って操業していた小工場も 1998 年に経営破たんしてしまう。

だがリシトン陶業は消滅することはなかった。1997 年に共和国手工芸協会が設立され、これに加盟した職人は所得税免除、協会からの原材料の供給や販路開拓、展示会出品などで優遇措置を得られることとなった。かつての工場の親方たちは次々と協会に加盟し、独立して陶業を行なうようになった。それに加えて数千人単位の住民が、ほかにめぼしい産業がない中、陶土を採掘して簡単な絵柄をつけて焼く日用陶器作りに従事し、生計を立てるようになった。こうして筆者が調査を始めた 2000 年代初頭は、リシトンの約 3 万人の人口の 10 分の 1 近くが陶業関連に従事している状態であった。

3. 製品と技術変化

次に 20 世紀を通じてリシトン陶業の主な製品がどう変わってきたかを見る。特徴は「磁器の導入」と「製品の代替あるいは継続」そして「秘儀の継承」である。

3-1. 磁器の導入

1954年に中央アジアで初めての磁器工場がタシケントに開かれた（Rakhimov 1961）。2018年3月に私が実施したM. ラヒモフ¹⁾の息子へのインタビューによれば、1952年にM. ラヒモフがレニングラード（当時）のロマノフスキー磁器工場で4か月にわたって磁器の製法を調査し、ウズベキスタンにふさわしい製品の形や柄を研究したという。その結果採用されたのが、ウズベキスタンの名産でありソ連時代は「白い金」として珍重された綿花の文様であった。食器の主要な形はほとんど変わらなかった。

しかしタシケントの磁器工場はウズベキスタン独立後に閉鎖されてしまい、今では生産の中心地でなくなっている。

代わりにウズベキスタン独立後の磁器生産の中心地となっているのはリシトンである。そもそもリシトン近郊で採取される陶土にはカオリン質が含まれず、焼成しても磁器にはなりえない。ところが磁器製品の方が耐久性があり値段が高く、利益が大きいために、個人的な製陶が許されるようになった独立後に、磁器作りに挑戦する者が登場したのである。1990年代末期から磁器の開発を目論んだリシトン住民は陶土を遠方のアングレンなどから取り寄せ、陶器より200-300度高い炎で焼成する等、大変な手間と元手をかけたという。中国からわざわざ高価な機械を購入して磁器を作る人々もいる。しかし、磁器も材料やいくつかのポイントを変えれば陶器と基本的な行程は同じなので、陶器作りに慣れ親しんだリシトン住民にとっては他の産業よりもはるかに敷居が低い。また、儲けも大きいため、現在では数十人の「ビジネスマン」や「起業家（tadbirkor）」を自称する人々が作業場を建てて住民を雇い、国内向けの茶碗や平皿などの日用磁器を大量に生産している。彼らは、国営陶芸工場に代わる私営磁器工場を作り出し、軽工業としての窯業を復活させたといえる。そこまで資金がない者は、磁器に綿花模様や金細工を施す作業のみを自工房で行なって卸売

業者に販売したり、作業場からB級品を仕入れてバザールで販売したりして生計を立てている。彼らも人数に含めれば、リシトンで磁器に携わる人間は数百人規模に及ぶだろう。製品は食器ばかりで種類は変わらず、平皿、碗、ティーポット、茶碗が主である。

3-2. 製品の代替あるいは継続

1961年にタシケントで出版されたM. ラヒモフの『ウズベキスタンの芸術的陶器』によれば、出版当時すでにウズベク女性が嫁入り道具として持参するのは地元産の陶器ではなく、磁器のティーポットとカップ、平皿のセットであった。しかし陶器は完全に衰退したわけではなく、プラスチックや磁器の代替品よりも機能的で生活に合うものは使われ続けていた。例えば、ミルクは中央アジア産の釉つきの陶器の中で長く新鮮に保つことが出来、バターはより上手に作れる。釉を施していないつぼも、夏の暑さの中でも水を新鮮で冷たく保つことが出来るために重宝されていた。それらに加えて、花瓶や植木鉢といった新しい陶器製品も広まった（Rakhimov 1961）。

私が2002年から行っているリシトンでの調査によれば、2000年代以降も嫁入り道具の食器セットはやはり磁器であるが、陶器もピラフ用の大皿を中心に使われている。特にトイとよばれる結婚式や割礼祝いの宴会では、一般的に数百人を饗応しなければならないが、そこでは安価で取替えの効く地元産陶器の皿が多用されていた。この大きな需要を満たすために、町の陶器バザールでは毎週、何百、何千という平皿やティーセット等が活発に取引されている。また、陶器の花瓶や植木鉢も盛んに生産され使用されている。一方で、電化が進み各家庭に冷蔵庫があるためであろう、たらいやミルクの容器はより軽く扱いやすいプラスチックやガラス製品に、水壺は水道やブリキの巨大なタンクに大半が取って代わられている。

3-3. 秘儀の伝承：イシコールを例に

2000年代初頭、リシトンでは数千人が陶業関係の仕事



図3 綿花文様のタヴォク（平皿）



図4 綿花文様のピヨラ（茶碗）

表2 表1製品の2000年代の様子

現地語	日本語	現在の様子
tovoq	平皿	使われ続けているが、磁器版がより一般的
charx tovoq	大きな平皿	大量消費の場で使われ続けている
kosa	直径10cm程度の碗	使われ続けているが、磁器版がより一般的
kub, choynak	ティーポット	使われ続けているが、磁器版がより一般的
piyola	茶碗	使われ続けているが、磁器版がより一般的
xum	壺	プラスチックやブリキ、ガラス容器に代替
qoshquloq, chorquloq	持ち手のついた壺	プラスチックやガラス容器に代替
ovdasta, kuza	水差し	プラスチックや金属に代替
tog'ora	たらい	プラスチックや金属に代替

で収入を得ていた。ただしその中でも、伝統製法をよく受け継いだ人々は、かつて工場の中で親方から何年にも及ぶ修業を経て身に着けた親方たちであり、数十人に過ぎない。このような親方たちは日々の作業に当たってさまざまな手伝いを必要とするが、それを行うのは弟子たちである。だが絵付けや型を使った成形といった基本的な技能以外の、ろくろ成形や複雑な顔料や釉の配合といった一種の秘儀については、親方たちは息子や甥といった身近な親族にのみ伝えようとするのが一般的である。そのため、2000年代初頭から2018年現在までイシコールの配合を知るのは10人程度に過ぎない。ここではその伝承ルートを図にまとめておこう。

このように、イシコール技法は基本的に男系で世襲され、娘が継ぐ例はまだない。息子や甥が陶工としての資質を欠いている場合は伝承されないか、他人弟子に伝え

られる。例えば父親やオジから技法を受け継いでいても、伝統的陶業よりも多くの経済的利益をもたらすような別業種で生計を立てることを選び、イシコール製品を全く作らない者もいる。すなわちイシコール技法を伝承するかどうかは家系・資質・生計のバランスで決まっているといえるだろう。

4. まとめ：技術変化と集団接触との関係

最後に、以上の経緯をパレオアジアの二重派モデルに寄せて技術変化と集団接触の関係を考察する。中央アジア定住民（現在のウズベク人、タジク人など）を先住のA集団とし、ロシア人（厳密にはタタール人なども含まれる）を19世紀以降に大量に入ってきたB集団とする。とその関係は表3のようにまとめられる。

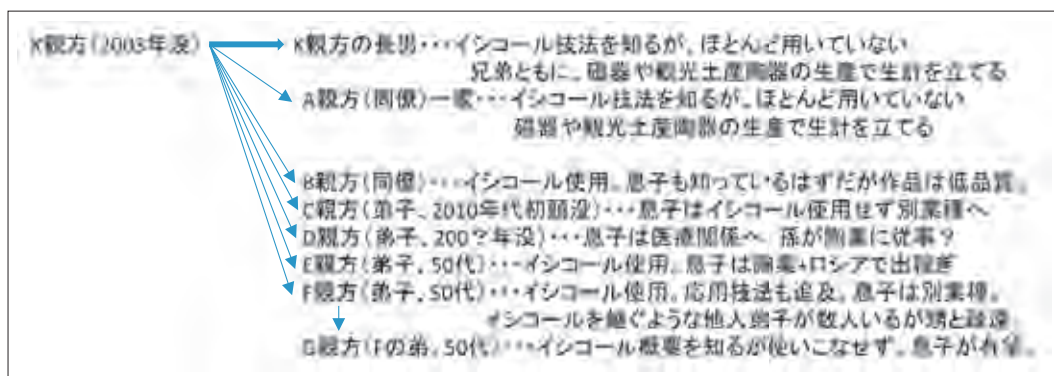


図5 天然灰釉イシコールの伝承ルート（2010年代）

表3 集団接触と技術変化

	19c-1920s	ソ連時代	1991-
集団	A	A + B (政治権力は A < B、人数は A > B)	B の激減
イシコール	主流	手軽な鉛釉などに代替、のち復興	高い価値
磁器	地元非産出	B と接触シタシケントで生産、全国に普及	リシトンで2000年代生産が急増
製品	食器と日用品	食器のかたちは継続だが磁器製が普及し、日用品は非陶器に代替	

イシコールの技術は先住 A が持っていたが、後発 B との接触の結果もたらされたガラス釉薬などの新しい技術が「より進歩的」「簡単で実用的」とされるなかで衰退した。しかし A 民族文化の再評価の機運のなかで復興し、独立後ではイシコールは A 固有の伝統のわざとして付加価値が高い。A のなかでも一部にのみこっそり伝えられている。

磁器作りは B から導入され、ソ連時代は首都タシケントが生産の中心だった。使用に関してはウズベキスタン全土に広がり、食器のかたちは伝統的な食生活に合わせてそれほど変わらなかったものの、陶器よりも磁器の食器が一般的になっていった。磁器の方が耐久性に優れ、軽く美しい（という観念が普及した）ことによる。そしてウズベキスタン独立後 B がほとんど町からいなくなると磁器は A が主導して生産するようになり、今ではリシトンが主要な生産地となっている。食器以外の日用品（たらいやミルク入れなど）はプラスチック製品などに大半が取って代わられている。これは住環境の近代化により、これらの日用品が陶器製であることの利点よりも、代替品の簡便さが勝ったためといえる。

このようなリシトン陶器における技術変化と集団接触の関係は、先住 A が結局後から来た B に取って代わられない例ではあるが、パレオアジア文化史学における 2 派モデルに照らせば、第 1 派（B の数が少ないので共存あるいはニッチをかえて共存）の例になるかもしれない。留意すべきは本稿の事例は新人同士なので、後発 B の進んだ技術（磁器）を A も比較的に容易に取り入れ可能であった点である。また、従来リシトンには陶業のスキルを持った個体の割合が多かったため、磁器等新しい技法

をもたらした後発 B の技法を吸収し凌駕しえた、といえるかもしれない。

ちなみに、ソ連時代の急激な近代化やロシア人らの増加にも関わらず、なぜ食生活と食器のかたちがそれほど変化しなかったかという点は、さらに考察を深めるべきものである。そこには大人数で食卓を囲み大皿から食事を分け合うという中央アジアのムスリムの大家族制度のライフスタイルや、喫茶の習慣、家庭で大量の食事を作るのが主に女性であるというジェンダー構造などさまざまな論点が含まれている。その考察は今後の課題とした

注

- 1) ムヒトディン・ラヒモフ（1903-1985）はタシケントを拠点としながら陶芸の研究と製作に生涯を捧げ、古代のクシャーン朝の陶器から中世のアフラシアブ、ティムール朝の青と白、19 世紀各地の陶器スタイルまで幅広く研究し、独自のスタイルを作って 1940 年代から 50 年代を中心にウズベキスタンの陶芸に大きな影響を与えた陶工かつ学者である。

参考文献

- Alieva, S.
1998 Rishtonning moviy sopoli. *San'at* (1-3): 34-35.
菊田悠
2013 『ウズベキスタンの聖者崇敬—陶器の町とポスト・ソビエト時代のイスラーム』風響社。
Peshchereva, E. M.
1959 *Goncharnoe proizvodstvo Srednei Azii*. Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR.
Rakhimov, M. K.
1961 *Khudozhestvennaya keramika Uzbekistana*. Tashkent: Izdatel'stvo Akademii nauk UzSSR.

民族誌データの定量分析と考古学への援用 ——帰納モデルと投射 (projection)

野 林 厚 志

(国立民族学博物館、総合研究大学院大学)

1. 目的

本稿の目的は民族誌データの定量分析の2つの方向性を示すことである。

パレオアジア文化史において文化人類学や民族誌研究が果たす役割は、考古学的データを解釈するための理論モデルを、人間の行動と文化との関係から提示することである。このために必要なことは、(1)人間の行動と文化との関係の民族誌データの収集、(2)民族誌データからのモデル構築、という過程である。(1)の具体的な方法としては、文化人類学、民族学におけるフィールド調査が主体となり、(2)の具体的な方法としては、データの集成と標準化にもとづく、より一般的な説明をあげることができる。

ここでは、筆者が進めてきた民族誌データの集成と標準化について、ルイス・ビンフォードの著書、*Constructing Frames of Reference: An Analytical Method for Archaeological Theory Building Using Ethnographic and Environmental Data Sets*. 中で使用され、現在ではオープンソースとして活用が可能な、狩猟採集集団の民族誌データの活用方法についての試論と、そこから発展的に民族誌データの投射 (projection) を行う方向性について示してみたい。

2. *Constructing Frames of Reference* のデータ属性

従前の課題に長期的にとりくんできた考古学者は少なくないが、なかでもこの分野に大きな貢献を果たしたのが、アメリカ合衆国の考古学者であるルイス・ビンフォード (Lewis Binford, 1931-2011) である。彼の業績についてはここでは詳しくふれないが、彼のこの分野での貢献は、ミドルレンジセオリーとよばれる、考古学資料と人間の行動とを連結させるための理論的な枠組みの構築であった。ミドルレンジセオリーは考古学資料と人間の行動、換言すれば文化の動態との対応関係に関する理論

であるため、それらの両者を同時に観察することが理論化のために必要となる。例えば、ある狩猟採集民が採食中に動物の骨を落としたり、あるいは投げ捨てたり、または道具を紛失したり、壊したりしてそれらが地面に残される。そうした地面に残された痕跡、すなわち、残存物の組成や散乱状況と類似したパターンが、考古学遺跡中に見出せたとしたら、それを残した過去の人間は、比較の対象となった狩猟採集民と同じ行動をとったと類推することが可能となる。そして、両者を観察する具体的な方法として、ビンフォードは民族考古学を提唱した。

ビンフォード自身はアラスカのヌナミウトが行なう季節性が顕著な生業活動に着目し、その狩猟形態、動物の解体、分配、貯蔵などの各活動のプロセスと同時に、これらの活動によって生じる現在の遺跡の分布とそこに残されていく動物遺存体の組成や破損状況などを克明に記録、分析した (Binford 1978)。ビンフォードの一連の調査からは、今でもしばしば使われる、フォレジャーとコレクターという、生態資源の獲得と利用と、人類集団の移動様式に関わるモデルが提唱されている。

ビンフォードは、自らの研究の基盤となってきた狩猟採集集団の民族誌データを考古学的な課題へ活かす総括的な著書、*Constructing Frames of Reference: An Analytical Method for Archaeological Theory Building Using Ethnographic and Environmental Data Sets*. を2001年に上梓した。これは、1970年代から蓄積してきた講義のための資料、学生や研究生と渉猟した世界の狩猟採集民に関するデータと、その統計的解析の結果、そこから引き出される一般則を示した大著である。ただし、A4の版面で563ページにも及ぶ本書は、日本語訳もまだ刊行されていないし、アメリカの考古学者でさえも舌をまく量と質をもっている。

339の狩猟採集民の集団の200あまりの変数 (居住地、居住形態、人口、セツルメント、経済、政治、戦争、信仰等々) にもとづき、生業、移動性、集団規模、集団密度に焦点をあてた基本的には線型的な分析がなされ、130あまりの一般則、11の問題、90の命題、8のシナリオが

示された。出版後も、データの拡充や整理は続けられており、幸いなことにビンフォードとその周囲の研究者たちは、同書で使用されたデータを公開、オープンリソース化するとともに、統計解析に適した csv やエクセル形式にしたデータの公開を行なっている¹⁾。

トゥルマン大学に開設されている同サイトでは、ビンフォードの狩猟採集民データに関連した複数のデータファイルや、マニュアル、コード表が掲載されている。分析に用いられる基本的な道具立ては、(1) 狩猟採集民の民族誌データ、(2) 世界各地の気象データ、(3) (1) の文化要素の略号の説明をするコード表である。

(1) 狩猟採集民の民族誌データ

393の狩猟採集集団に関する民族誌データがおさめられている。これらのデータは基本的には、選択された特定の民族誌に記載された事項が根拠となっている。例えば、アイヌのデータ出典は、「Watanabe 1972」とされていることから、渡辺仁が1972年に上梓した、*Ainu Ecosystem* が文献として用いられていることが理解できる。

このことが意味するのは、データはある民族集団を一般化したものではないということである。これは、該当する民族集団内の変異が特定の民族誌的記述によって代表されてしまうという危険性は免れ得ない。一方で、該当する民族誌を集めて平均的な「値」をデータとすることは、集団の文化的脈絡を無視していることになる。重要なのは引き出されてきた民族誌の原典が明確にされているということである。換言すれば、分析の結果を検証する際に原典の属性を分析者が把握していることが求められるということである。また、ビンフォードが中心と

なりアメリカ合衆国でこのデータが構築されてきたために、用いられている文献は基本的には英語で公刊されたものに限定されている可能性が高い。

図1は、提供されているデータを世界地図上に落とし込んだ状態を示している。ここから理解できることは、アジアにおけるデータが他の地域に比して少ないということと、中緯度湿潤地域におけるデータが少ないということ等である。前者の背景には先に述べたように英語で公刊された民族誌や資料の多寡が、後者の背景には、同地域に適応的である農耕集団の拡大により、狩猟採集を生業基盤とする集団が減少していった可能性が考えられるであろう。

データの属性については、もちろん名義尺度は含まれているが、順序尺度や間隔尺度をなるべくとりこもうとしていることが理解できる。特に、力点がおかれているのは、生業、移動性、集団サイズ、人口密度などである。これらは、遺跡から出土する動物遺存体、植物遺存体、遺跡の分布や規模と関連性の強いデータであり、集団を考古学的に理解するためのモデル構築が強く意識されていることが理解できる。

一方で、集団の背後にある社会の仕組みもデータに加えられていることがこのデータの重要な特徴である。例えば、住居、リーダーシップ、交易、戦争等対外関係、葬制や信仰、シャーマニズムの有無、婚姻の様式、親族名称 (MZC, FBC)、等がデータの中に含まれている。こうしたデータは特定の民族誌を用いても、集団の変異を大きく無視することにはなりにくい。例えば、まったくリーダーシップの形態が異なる集団を同一のエスニシティをもった集団とは認めにくい、といったことがこれ



図1 Binford (2001) に収録された狩猟採集集団の地理的分布

に相当する。

ビンフォードはしばしば環境決定主義者のように評されることがあるが、民族考古学の調査を通じて、「生きた社会」を経験しており、社会的な脈絡の重要性は十分に認識している。その表れの一つが社会組織に関わるデータを充実させようとしたことと考えてよい。

(2) 世界各地の気象データ

世界中の環境観測データ（WorldClim）を集成したものである。これは、狩猟採集民が利用可能な、植物と動物の資源の豊富さとアクセスのしやすさを評価することをねらいとしている。重要な視点は、年間を通しての各月の温度や降水量をデータ化することによって、季節的な資源利用の議論も可能にしようとした点である。季節的に環境変動の大きな地点は年間を通じての居住や生活には適していないが、一時的に降水量が期待できる場所は居住だけでなく、狩猟キャンプや一時的な滞在のために利用できる。こうした微小環境への関心をビンフォードらが持ち得たのは、やはり民族考古学調査によって人間の日常について、微に入り細をうがつ観察を行なった経験があるからだと言える。これは、人間の居住空間の環境を考えるうえで、温湿度、太陽光の照射量だけでなく、土壌の性質（保水能等）もデータ化していることからもうかがうことができる。

(3) データコード

ビンフォードのデータシートは基本的には項目が英語の略語で書かれていることから、それぞれの意味が何かを参照するためのコード表は必需となる。それ以上に重

要なのが、項目内でのパターン分類の決定過程である。

例えば、‘sed’は、Degree of sedentism という項目であるが、これに対応する民族誌のパターンは、1: Fully nomadic、2: Semi-nomadic、3: Semi-sedentary、4: Seasonal permanence、と分類されている。これらの分類を決定する過程は個々の民族誌については必ずしも明確にはされておらず、特定の民族誌からの情報であること以上に、分類された範疇と集団の移動パターンとの間の整合性について、分析者は留意しておく必要がある。

3. 民族誌データの解析事例

従前の述べたデータ属性の条件や留意点はあるものの、同じ基準で規格化された民族誌データを用いて、狩猟採集集団の行動則についての抽出を試みることは可能である。ここでは GIS を用いて、比較的単純な属性間の関係についてその傾向を概観してみることにする。

(1) 生業（狩猟・採集・漁労）の依存比と移動回数（世帯1年）との関係

各集団の生業の依存比の算出は民族誌の記述から判断したものがデータで与えられており、これらと世帯あたりの1年間の移動回数との関係を示したのが図2である。全体の傾向としては、1) 寒冷・乾燥地域（北半球高緯度）と温暖・乾燥地域（南半球中緯度）の間では、移動回数には大きな差が見られないが、生業依存比は環境に応じて異なっている。2) 熱帯湿潤地域では移動回数は相対的に多いが、採集の依存比が高くなると移動回数は減る傾向がある、ということが理解できる。

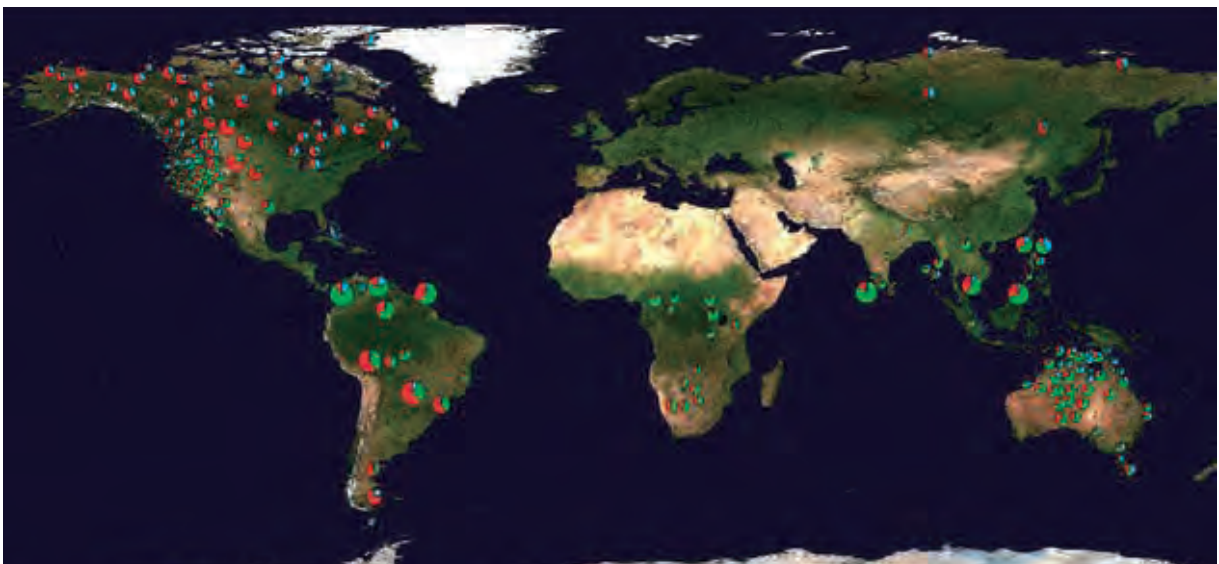


図2 生業（パイチャートの割合：狩猟・採集・漁労）の依存比と移動回数（パイチャートの直径・世帯1年当たり）との関係

(2) 生業（狩猟・採集・漁労）の依存比と移動距離（1年）との関係

先に示したのは、生業の依存比と移動回数との関係であるが、ここでは、移動の回数ではなく、移動の距離を変数とした（図3）。理解できるのは、寒冷・乾燥地域（北半球高緯度）と温暖・乾燥地域（南半球中緯度）に対して、熱帯湿潤地域では採集の依存度が高い傾向にあり、移動距離は相対的に小さいということである。また、(1)と(2)の結果をあわせて考えた場合、熱帯湿潤地域における採集への依存度が高いことと、世帯の移動回数や移動距離が少ないということが、他の地域に比べて相関しやすい属性であることが仮説的に引き出されることになる。

(3) 移動パターンと移動距離（1年）との関係

(1)(2)と資源収奪に関わる移動パターンとの関係を示したのが図4である。これまでのビンフォードの有名な、渉猟（フォレジャー）型、集積（コレクター）型の2類型に加えて、データセットでは、1: Fully nomadic、2: Semi-nomadic、3: Semi-sedentary、4: Seasonal permanenceの4つの分類がなされていた。全体的な特徴としてあげられるのが、狩猟依存度が相対的に高い寒冷・乾燥地域（北半球高緯度）では、渉猟型と準渉猟型が混在し、採集依存度が高い温暖・乾燥地域（南半球中緯度）では渉猟型が優勢であること、熱帯湿潤地域では渉猟・準渉猟型が混在していることである。

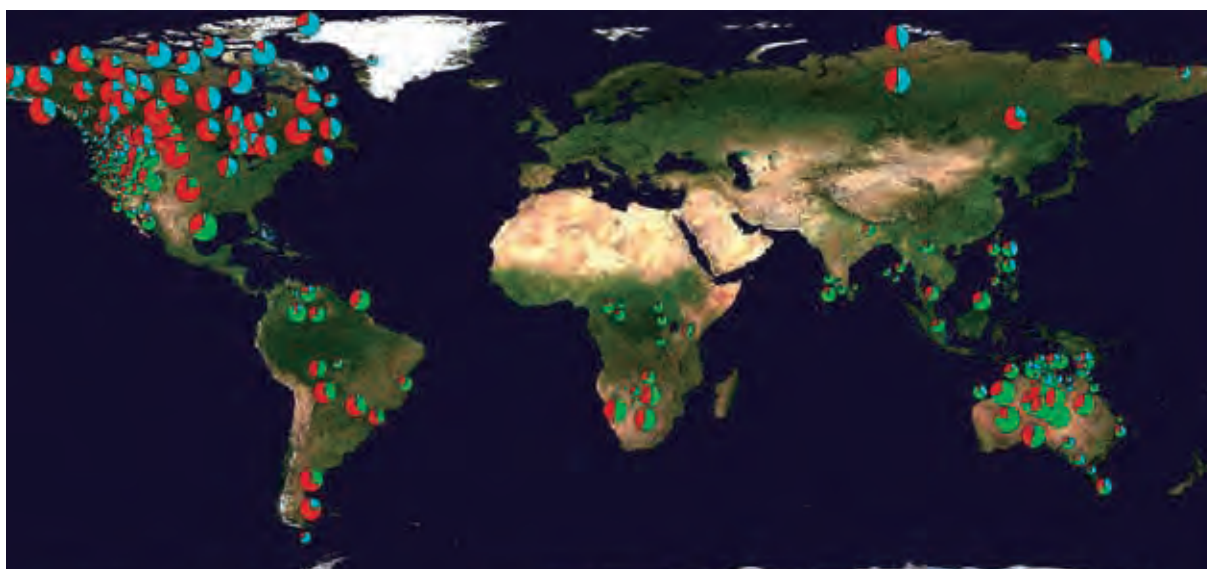


図3 生業（パイチャートの割合：狩猟・採集・漁労）の依存比と移動距離（パイチャートの直径・1年）との関係

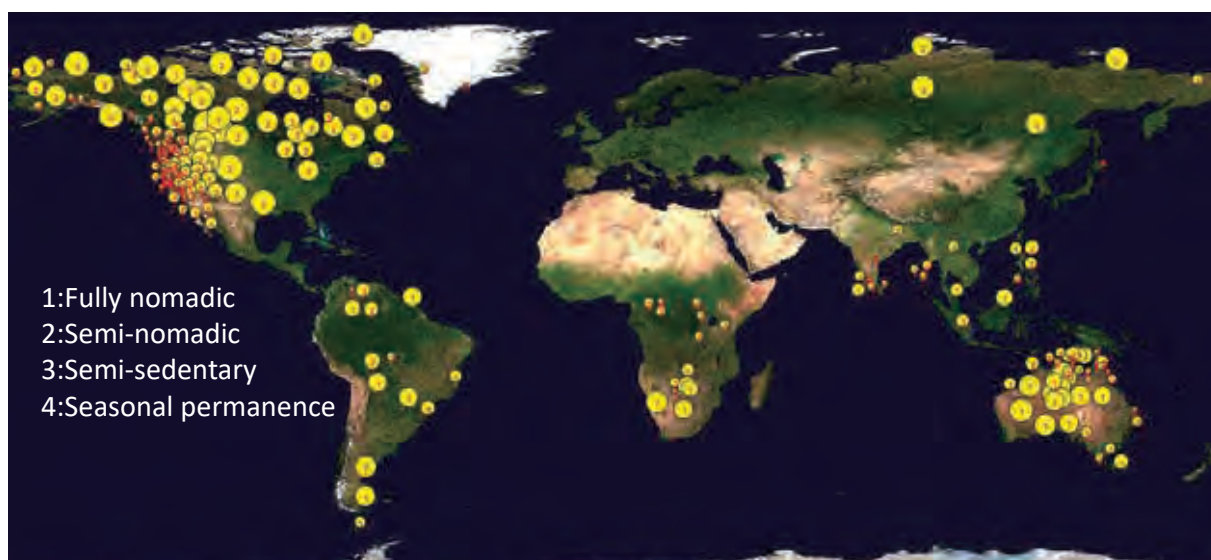


図4 移動パターンと移動距離（パイチャートの直径・1年）との関係

これらを、もう少し丁寧に見ていくと別の傾向が見えてくることもある。例えば、生業比のデータをあわせた場合、中低緯度地域、例えばオーストラリア中部や南部アフリカでは、狩猟依存度が25%を超えると渉猟型になる傾向が見られる（図5）。これを先の採集への依存度と移動回数、距離との相関関係もあわせて考えた場合、狩猟採集集団の移動や渉猟行動が増加する動機は、狩猟によるものであるという行動則が仮説的に得られる。

(4) 100km²あたりの人口と生業比（狩猟・採集・漁労）との関係

集団の維持や拡大に関わる人口と生業との関係について示したものが、図6である。海岸地域の漁労適応は巨大な人口密度を支えるという従来の経験則も全体の傾向とは一致している。興味深い点の一つは南アジアのいくつかの集団が限られた地域の中で人口密度を高めていることである。該当する民族誌の質的な検証が必要であるが、これらはパッチ状の環境を集約的に利用する形態に該当するかもしれない。

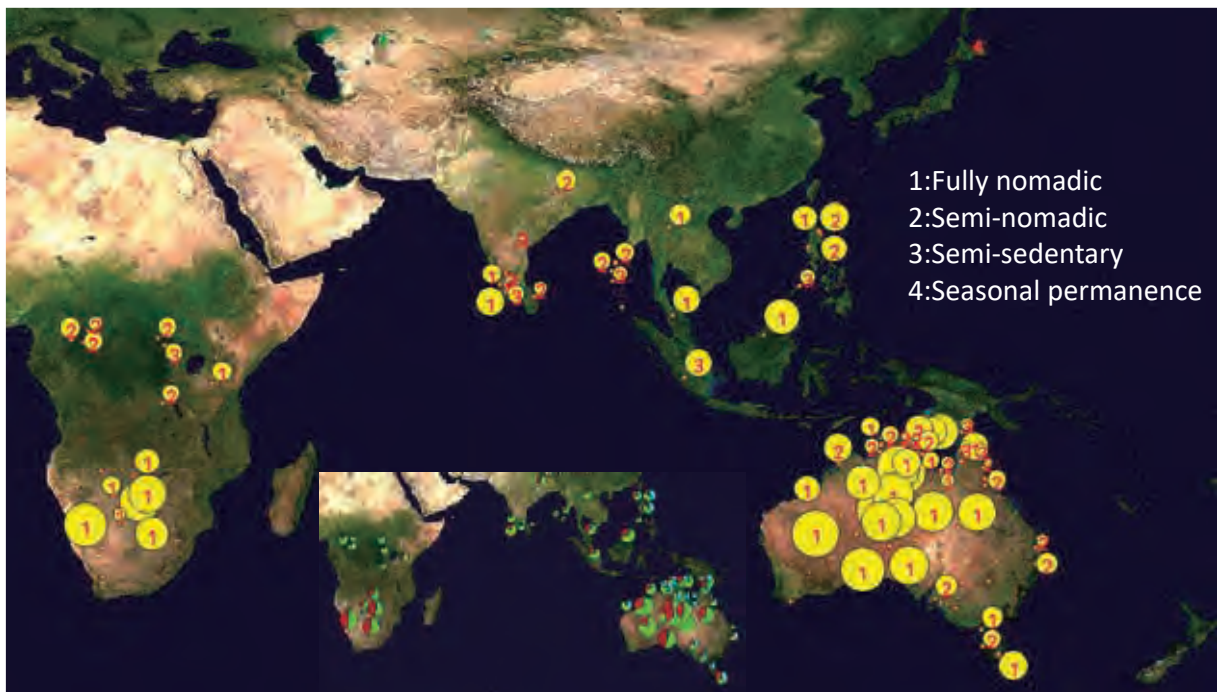


図5 生業比、移動パターン、移動距離（パイチャートの直径・1年）との関係



図6 100km²あたりの人口と生業比（狩猟・採集・漁労）との関係

先述したように、得られた結果はあくまで特定の民族誌から抽出されたデータを横断的に比較したものであり、個々の事例に照らし合わせた場合には議論すべき点が含まれていることには十分に注意しておく必要がある。一方で、引き出される行動則や疑問は、民族誌による再検証や考古学資料にもとづく過去の集団の動態復元に際して、一定の目安を与えることは可能であろう。

ビンフォードは線型的な相関分析を行い、そこから言えることや生じた疑問を、Generalization, Proposition, Problemとして同書に示している。これらは、狩猟採集民をマクロな環境で比較して得られたものであり、ミクロな環境にフィードバックして考える視点を与えるものである。

4. ビンフォードの Packing threshold (「集合閾値」)

ビンフォードは、これまでに述べてきたデータの分析から少なからぬ数の一般則 (Generalization) を示しており、特に具体的な集団像を想定するための Packing threshold (「集合閾値」) を示している (Binford 2001: 442)。

前提となる了解事項は、移動する狩猟採集集団は、移動のコストを最小限にするような規模の自律的集団であるということ、基本的には陸生資源に依存した集団を想定したモデルとなっている。それは、100kmあたりの人口が1.57人を越えたときに、集団には適応行動が必要となり、移動による動物資源の確保が可能な状況が生じるとされている。さらに、100kmあたりの人口が9.098人を越えたときに、移動は生態資源の収奪に関する効果的な戦略ではなくなるとする。

ビンフォードのこのモデルから考えられる人類集団の移動様式の変化は図7のように示すことができる。これは進化史的な順序を示しているものではなく、あくまで人口変動と移動様式との関係であることには留意しておく必要がある。着目すべき点は、定住型の小規模集団の存在である。こうした集団がどれくらいの期間、存続可能なのかはさらなる議論を要するが、性格の異なる定住性が採用するセツルメントパターンや生態資源の獲得様式の違いは、異なる考古学的証拠を残す可能性がある。

例えば、定住性2では、陸生動物の狩猟だけではなく、内水面、海産資源の利用、資源の集積といった、人口を維持するための別の戦略が採用されていることを考慮にいった遺跡の解釈が必要になってくる。

5. 投射 (Projection) にむけた検討

ここまで述べてきたことは、民族誌データの分析や解釈から得られる帰納モデルに関わることである。一方で、こうしてデータを扱うことのもう一つの意義は、得られたデータを手掛かりにして、失われた、もしくは、未発見の集団の姿を想像 (予想) することである。この作業はしばしば投射 (Projection) とよばれる。

この言葉は、日本人にとってはあまり馴染みのない言葉かもしれない。卑近な例で例えるならば、大型建造物を対象にしたプロジェクションマッピングです。これは、映像コンテンツをホワイトスクリーンではなく、形状や大きさの異なる建造物に投射して、映し出される映像を楽しむというものである。同じ映像コンテンツでも、例えば、東京タワーと通天閣では映し出される映像の姿は同一ではない。また、同じ東京タワーに投射しても、異なる映像コンテンツであれば、当たり前のことであるが異なる映像が見える。

民族誌データの投射は、映像コンテンツを大型建造物へ投射することと対応させると考えやすい。この場合、民族誌データとはある行動則を有した狩猟採集集団の属性であり、映し出す対象は、そこでの生活を予想したいと考える環境データがもっともわかりやすい。例えば、筆者が住んでいる京都府南部に狩猟採集集団が存在していた場合、それらはどのような生活・居住様式をとりうるのかは、年較差が比較的大きく、盆地上の地勢をとるような環境にある集団の特徴を浮かび上がらせることが求められる。

より一般的に述べれば、(1) 現生の民族誌データから、生業形態、人口、移動性、他との接触関係等を、(2) 現代の環境に関するデータからは、環境収容力、人間が利用できる生態資源の量、降水 (積雪) 量、土壌の質等々といった自然環境に関わる事項、アクセシビリティとい

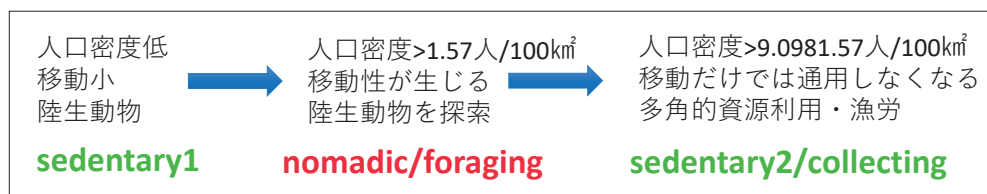


図7 Packing threshold (「集合閾値」) と集団の移動様式

う観点からの地勢や河川の位置といった事項が含まれる。現代の民族誌データの強みは、(1)と(2)の関係は把握できるということであり、現在は狩猟採集民が存在していない地域に「もし狩猟採集民がいたらその人たちはどのような資源利用を行いうるのか」を(2)のデータをもとに考えていくとともに、同様なデータ(2)が過去についてもわかったら同じ推定を試みることは可能となる。

6. まとめ

近年の傾向としてあげられるのは、多くの文化人類学者が、ギアツが厚い記述と呼ぶものに焦点を当てた戦略を追究しているということである。これは、特定の脈絡における特定の出来事についての理解を発展させる。また、これらの戦略は、抽象化や一般化が容易ではない人間の経験に特に焦点を当てている。一方で、詳細な情報に立ち入ることはできるが、事例を束ねたうえでその傾向を把握したり、対象を集団として扱い大規模なパターンを見ることは容易ではない。もちろん、個別化を深める議論と一般化させようとする努力は相反するものではなく、何を明らかにしたいかという目的によって、取り組む方向性や採用する方法が異なると理解しておいてよい。ただし、文化の定義もしくは属性が、水平方向への伝達と垂直方向への継承であることを認め、それらの動態を考えるのであれば、個別化された事例もまた集団のなかで説明される必要があり、それがまさに文化的な主体としての人間を意味していることになる。

こうした文化的な主体性は、人類を他の動物と区別する独特なものである。年齢、性別、社会的地位や社会的

役割に基づいて予測可能な方法で行動する人々が、ある一定の同意や条件のもとで存在しているのが集団であり、その集団の行動則を抽出することが、先述した事例を束ねたうえでの傾向の把握と言ってもよい。もちろん、これは社会のすべての成員が常に期待通りに行動するという意味ではない。とはいえ、環境変動や社会的な相互作用の理解に基づく行動則が認識され抽出できるということは、文化的、社会的な単位としての集団の存在をとらえることが可能ということである。

特定の条件下で行動する方法について、時には非常に長い期間にわたって、同じような意思決定をする複数の個人を反映するパターンを認識することを引き続き考えてみたい。

注

- 1) <http://ajohnson.sites.truman.edu/data-and-program>

参考文献

Binford, L.

- 2001 *Constructing Frames of Reference: An Analytical Method for Archaeological Theory Building Using Ethnographic and Environmental Data Sets*. Berkeley: University of California Press

大林太良他編

- 1990 『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析』(国立民族学博物館研究報告別冊 11 号) 吹田: 国立民族学博物館

Watanabe, H.

- 1972 *The Ainu Ecosystem: Environment and Group Structure*. Tokyo: University of Tokyo Press.

中央アジア草原地帯における人の移動と接触

藤 本 透 子

(国立民族学博物館)

1. はじめに

本報告では、中央アジア草原地帯の事例から、人の移動と接触にともなう社会変容と物質文化の変化について取り上げる。中央アジアでは旧石器時代の遺跡が A01 班によって発掘されており、旧人と新人の関係や、新人の拡散と定着の過程が検討されている（西秋 2018、国武 2018）。新人がアジアに拡散し定着した際の多様な行動パターンを推定しモデル化していくことが、プロジェクトにおける文化人類学の役割であるが、考古学と連携するには物と社会を結ぶ視点が必要とされる。考古学では物を手掛かりとして社会を復元する一方、文化人類学は社会そのものを観察して分析するという手法の違いがある。特に旧石器時代は、考古学的遺物が限定され、社会のあり方も現代と大きく異なる。

中央アジアの事例を検討しながら連携するひとつの試みとして、2018 年 10 月 20 日に B01 班と A01 班の合同研究会「中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化—人類学と考古学の接点から」を行った。この研究会は、中央アジアの文化人類学と考古学のフィールド・データをもとに、人の集団が移動し接触することによっていかなる社会変容が生じるのか、それが物質文化にはどのように現れるのかを検討することを目的としていた。文化人類学側からは、人の集団の接触にともなう、ものの作りの技術の継承・伝播、居住形態、墓の形態などに現れた変化を、菊田悠、吉田世津子、藤本透子が検討した（本報告書の吉田と菊田の報告も参照）。考古学側からは、現在進められている発掘調査の成果が、国武貞克、赤司千恵によって報告された。最後に、文化人類学データの考古学への具体的な応用可能性について検討した。1 回の研究会でまだ明確になっていない点も多いものの、さまざまな示唆を得ることができたので、今後につなげていきたいと考えている。

以下では、研究会での議論をふまえ、中央アジア草原地帯（カザフスタン）での文化人類学調査をもとに、季節的移動性の高い集団と低い集団の接触と、それにと

なう居住形態や物質文化の変化を検討する。その上で、過去の新人の行動や物（遺物）の解釈につなげる可能性についてまとめ、今後の課題を示す。

2. 集団をどのように捉えるか

旧石器時代と現代を対比させながら考えていく上で、留意しなければならない点のひとつが集団の規模と構成である。旧石器時代と現代では、人口密度が大きく異なり、集団の規模も異なっている。旧人と新人が「共存」あるいは「交替」した当時の集団と、文化人類学が対象とする現代の集団とをどのように位置づけて考えればよいのだろうか。

家族を形成すると同時に、家族を越えた共同体をも形成するという重層的な構造は、他の霊長類と比較した場合の人間の社会の特徴であるという（山極 2012: 157）。旧石器時代には家族を越える集団の規模はまだ小さく、旧人も新人も複数の家族からなる小集団で生活していたようだが、新人は次第に集団の規模を拡大させて今日に至っている。集団規模の拡大は、気候変動を背景として、狩猟採集民の定住化や、生業の変化と結びついて生じたとされる。1 万年前頃に定住的狩猟採集民が増加し、やがて農耕と牧畜が開始されたが（那須 2015: 42-46）、中央アジアでは気候の乾燥化によって約 3000 年前に定住農耕民と遊動的牧畜民（遊牧民）の集団が分かれ（林 2000: 15-27）、それぞれに特徴的な社会を形成した。中央アジア北部の草原（ステップ）では遊牧民、南部のオアシスとその周辺では農耕民や都市民が暮らすという形態は、20 世紀初頭まで基本的には連続していた。

旧石器時代には遊動的狩猟採集民であった人々が、いったん定住化した後、気候変動に即して再び季節的移動性が高い遊牧生活を開始し、その生活様式は約 100 年前まで環境に適合的であったことになる。19 世紀から 20 世紀初頭のカザフ遊牧民について概観すると、キャンプは基本的に父系親族関係に基づいて形成されたが、季節によってその構成は変化し、冬季に数家族ずつ分散して

厳しい寒さや風を避け、夏は広い草原に分散しながら放牧した。性別の分業が比較的はっきりしていることも特徴で、現在も男性が家畜の放牧、女性が住居の周りで調理や育児をすることが多い。家族形態は直系家族と核家族が主であったが、家族を超える集団として分節的体系をもつ父系親族集団があり、父系7世代までに共通の祖先がいる場合は結婚しないという外婚制の規範があった。夫方居住で、女性が出自を変更しないまま別の集団に婚入し、父系親族集団どうしが結婚によって結ばれるという婚姻連帯が見られた。詳細は略すが、父系出自の原理にもとづく集団が集まり、その上位レベルの集団としてカザフ民族が形成されるという重層的な集団構成になっている。

以下では、先住者集団と移住者集団の接触にともなう居住形態と物質文化の変化を検討するために、民族間の接触を主に取り上げるが、親族集団や家族にも必要に応じてふれる。

3. 集団接触にともなう人口動態

先住者集団と移住者集団の関係を考えるために、まず人口動態を概観する。中央アジアにおける集団接触は非常に複雑な過程を経ており、2集団の接触として単純に理解できるわけではないが、ここでは19世紀から21世紀初頭にかけてカザフスタンに居住する2つの主要な民族であるカザフ人とロシア人の関係を軸に検討する（図1参照）。カザフ人はテュルク系で先住者集団、ロシア人はスラヴ系で移住者集団にあたる。ロシア人は19世紀以降、中央アジア全域に居住するようになったが、特にカザフスタンはロシア人が多く移住した地域である。

現在のカザフスタンに相当する地理的範囲の人口は1897年には約433万人で、1913年までに約560万人に増加した。ロシア人が北西から移入していった時期にあたり、移入による人口増が生じていたと見られる。ただし、カザフ人は依然として全人口の過半数以上を占めていた。その後、1926年の約603万人から1940年代まで全人口はほとんど増加せず、先住者集団（カザフ人）の人口が大きく落ち込んで、移住者集団（ロシア人）の人口が初めて先住者集団を上回った。これは、ソ連のあまりに急進的な定住化政策によって、カザフ人のあいだで大規模な飢餓が生じたためである。その後、全人口は増加し、1989年までに1653万人に達した。1950年代を中心に再びロシア人の移入があり、1930年代から1980年代半ばまで約50年にわたり移住者集団が先住者集団の人口を凌駕していた。しかし、1990年代に入ると、ロシア人がロシアへと再移住（「帰還」）したことなどにより人口比は再逆転し、先住者集団が再び移住者集団を上回った。特に2000年代以降、カザフ人は出生率の上昇によって人口が大きく伸びている。

ここで、地域差について注記しておきたい。カザフスタン北部のパヴロダル州と、南部の南カザフスタン州の1989年における民族構成を図2に示した。パヴロダル州では、19世紀以降に移住してきたスラヴ系のロシア人とウクライナ人が合わせて50%以上を占め、先住のカザフ人を大きく上回っていた。しかし、南カザフスタン州では、ロシア人の割合は15%程度に過ぎなかった。カザフ人が過半数を占めていることに加え、もうひとつの先住者集団であるウズベク人がロシア人より多い。ウズベク人はカザフ人と同様にテュルク系だが、定住型の生活を営んできた人々であった。ロシア人が草原地帯に到来し

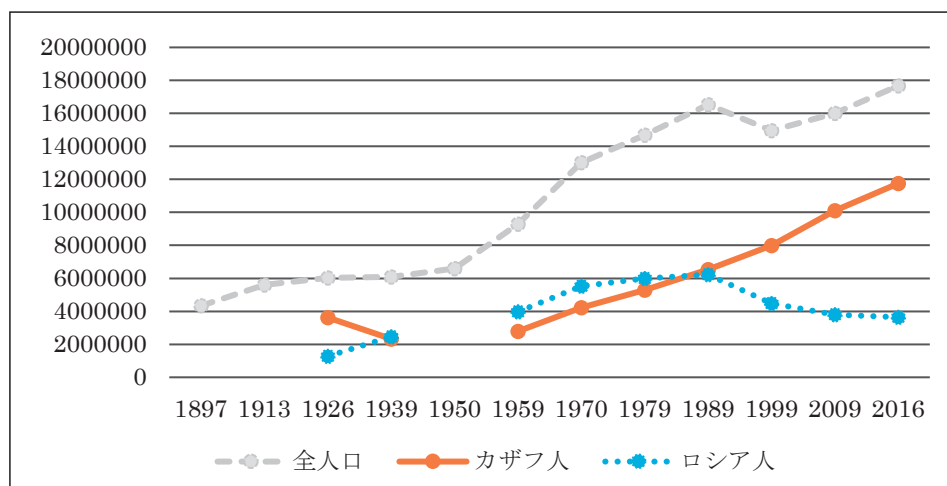


図1 カザフスタンの人口動態

出典：岡（1998）、Agenstvo Respubliki Kazakhstan po statistike（1999, 2009）、カザフスタン共和国経済省統計委員会 HP より筆者作成。

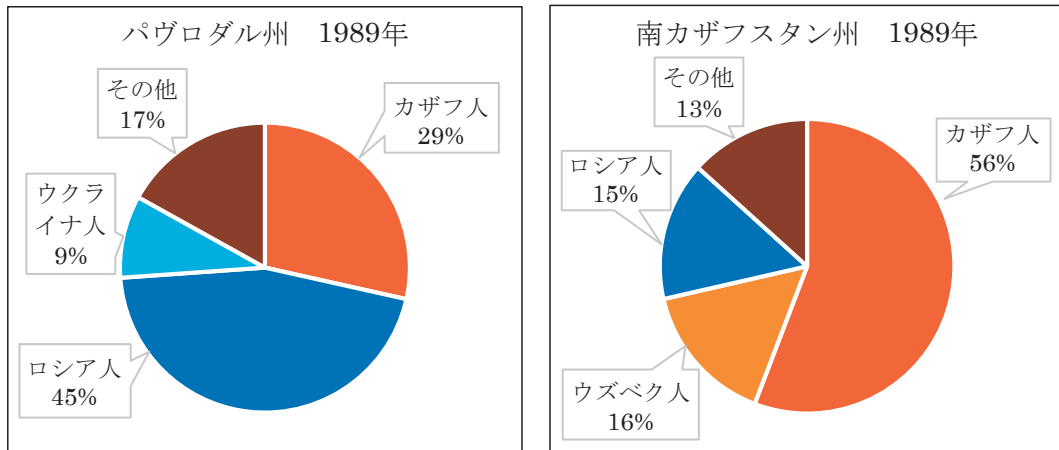


図2 地域による民族構成の差異

出典：Agenstvo Respubliki Kazakhstan po statistike (1999) より筆者作成。

定着していく過程で、主な先住者はカザフ人であったが、地域によっては複数の先住者集団がいたことは、居住形態や物質文化の変化にも関わってくる（後述）。

カザフスタンの具体例が示す約120年間の人口動態モデルは、移住者集団の人口が先住者集団を上回った後に、移住者集団の再移住により再逆転が生じたという点で、今年度の研究大会で西秋代表によって提起された二重波モデル（段階的拡散交替仮説）と異なる。ただ、二重波モデルは、数千～数万年のあいだに移住者集団が先住者集団を上回った過程に関する仮説である。二重波モデルが対象とする旧石器時代にも、100～200年という比較的短い期間で見れば、実際には地域によって先住者集団の方が多い状況が生まれたり、移住者集団が増えたのちに再び減るといった状況もあったと思われる。人口構成比の変動に影響を与えた要素は、移動と出生率と死亡率である。いずれも新人の集団なので、出生率や死亡率の違いは社会的な条件によるが、旧人と新人は生殖能力に差があったという指摘（篠田 2015: 74）もある。各集団の出生率や死亡率とその変化も、集団の関係を考える上で欠かせない。

4. 季節的移動性の高い集団と低い集団の接触

人口動態をふまえて、集団間の接触の具体的な状況に

ついて、次に検討する。狩猟採集民どうしの接触や共存のあり方と、遊牧民と農耕民の接触や共存の形態は異なると考えられるが、季節的移動性の高い集団と低い集団の接触によって何が生じるのかを考える手掛かりとして、カザフ人とロシア人の接触を主に取り上げる。ここで、もうひとつの先住者集団であるウズベク人も関係してくるので、3つの民族の概要を表1にまとめた。

ロシア人の進出以前、草原地帯の南縁にあたるカザフスタン南部では、オアシスやその周辺には定住農耕民であるウズベク人が暮らし、草原には遊動的牧畜民であるカザフ人が暮らしていた。移動性の高い集団と、移動性の低い集団が住み分けていたことになる。食生活にもそれぞれ特徴が見られ、カザフが動物性の食物を中心とするのに対し、ウズベクは植物性の食物をより多く利用していた。

一方、草原地帯の北縁にあたり森林地帯と接するカザフスタン北部では、寒冷な気候の森林地帯を開墾しながら農耕していたロシア人が、それまで農耕が行われていなかった草原地帯に進出した。移住者集団であるロシア人は、季節的移動性が低い定住型の生活を営んでいた。植物性・動物性の食料を共に利用するが、植物性が占める割合が高かった。草原地帯の南縁で先住者集団どうしが住み分けていたように、草原地帯の北縁でも、移住者集団と先住者集団は利用する自然環境や主要な食物が異

表1 各集団の概要（20世紀初頭）

民族	言語系統	生態環境	生業と居住形態	住居
ロシア人	スラヴ系	森林（タイガ）	定住農耕民	木造家屋
カザフ人	テュルク系	草原（ステップ）	遊動的牧畜民	天幕
ウズベク人	テュルク系	オアシス	定住農耕民	日干レンガ住居

なるために住み分け可能なように見える。しかし、移住者集団であるロシア人は、草原に点在する湖・川沿いや森林を中心に入植し年間をととして滞在することで、先住者集団であるカザフ人の冬営地を占拠したり、季節的移動のルートを寸断することになった。

これによって、カザフ人はそれまでの季節的移動性の高い生活を維持できなくなり、徐々に定住化の傾向が強まった。つまり、季節的移動性の低い集団は、草原に点在する居住可能な環境を足掛かりに進出し、その土地を恒常的に利用することで、季節的移動性の高い集団よりも有利になった。

5. 接触による居住形態の変化

接触状況の差異によって、1920～1930年代までにカザフスタンでは次の3パターンの居住形態の変化がみられた。

- A) カザフ人が複数の冬営地のひとつに集住して村落を形成。
- B) ロシア人が入植した地点に、カザフ人も集住して、民族混雑の村落を形成。
- C) ウズベク人が定住していた地点に、カザフ人も集住して、民族混雑の村落を形成。

このうち、AとBはカザフスタン北部の事例である（草

原に湖や林が点在するパヴロダル州バヤナウル地区での2002～2017年の調査に基づく）。Aのように冬営地に集住する事例（写真1）は、カザフスタン全体で広く見られたと考えられる。Bのように移住者集団であるロシア人の入植地にカザフ人が定住するパターン（写真2）は、入植者数が多かったカザフスタン北部の特徴と考えられる。一方、Cはウズベク人とカザフ人が近接して暮らすカザフスタン南部の事例である（カラタウ山地北麓にあたる南カザフスタン州ソザク地区での1999、2000年の調査に基づく）。

まとめると、Aは先住者集団内における集住であり、Bは移住者集団と先住者集団が混住、Cは異なる先住者集団どうしが混住する結果となった。いずれの場合も、季節的移動性の高い先住者集団の定住化がおきた（表2参照）。

こうした変化は、物質文化にはどのように反映されているのだろうか。住居を例にとってみていく。ロシア人がカザフ草原に移入する前には、集団ごとに住居の形態には違いが見られた。ロシア人は木造家屋、カザフ人は天幕、ウズベク人は日干レンガ住居である。その後、パターンAとBが生じたカザフスタン北部では、カザフ人の一部に木造家屋が取り入れられた。カザフ人有力者は、19世紀後半にロシア帝国の軍人や行政官に任じられ、ロシア人との接触の機会が多く、カザフ人居住地に木造家



写真1 カザフ人が集住した村落



写真2 ロシア人入植地（後にカザフ人が定住）

表2 集団間の接触にともなう変化

	集団接触	居住形態の変化	住居の変化	観察された地域
A	ロシア人－カザフ人	カザフ人が冬営地に集住	天幕 → 木造家屋／日干レンガ住居 → 日干レンガ住居	カザフスタン北部（草原）
B	ロシア人－カザフ人	ロシア人入植地にカザフ人が定住		カザフスタン北部（草原の湖や川沿い・森林）
C	ウズベク人－カザフ人	ウズベク人居住地にカザフ人が定住	天幕／日干レンガ住居 → 日干レンガ住居	カザフスタン南部（オアシス）



写真3 木造家屋



写真4 天幕



写真5 日干レンガ住居

屋を建設した。つまり、移住者集団の住居形態を先に取り入れたのは、先住者集団の有力者（男性）であった。しかし、草原地帯では木材が限られるため、木造家屋はカザフ人全体には広まらなかった。カザフ人の定住化が進むと、草原の土から作ることが可能な、日干レンガ造りの住居が普及していった。

日干レンガ造りの住居は、草原の南縁のオアシスに暮らす定住民の住居として使われていたものである。移動する生活を送っていたカザフ人も、墓には日干レンガを利用することがあり、日干レンガ造りの技術自体は知られていた。Cのパターンが見られたカザフスタン南部では、ウズベク人が日干レンガ住居、カザフ人が天幕に暮らしていたが、定住化するにしたがって、カザフ人も主に日干レンガ住居に暮らすようになった。AとBのパターンでも、最終的に日干レンガ住居が選択された。

この一連の変化をまとめると、草原地帯に新たな集団としてロシア人が移動してきたことにより、先住者集団であるカザフ人の居住形態と住居は変化した。しかし、移住者集団の住居は自然条件に適していなかったため最終的には取り入れられず、隣接する別の先住者集団で定住民であるウズベク人と共通する住居の素材が取り入れられた。ただし、ウズベクの日干レンガ住居と、カザフの日干レンガ住居は、基本的な形態が異なる。ウズベクの住居は、中庭があって口の字ないしコの字に居住空間が作られ、住居の壁が近隣と接していることが多い。これに対し、カザフの住居は中庭を設けず、住居は近隣とのあいだの空間を広くとって建てられる。この差異は、家族構成と住まい方の差異を反映している。

6. 物質文化に表れる／表れない集団接触

集団間の差異や接触の状況は、物質文化に表れる場合と表れない場合があることに、最後にふれておきたい。上述の民族間の接触によって、カザフ人が定住化していく際には、さまざまな父系親族集団の集住も引き起こされた。つまり、上位レベルでの集団の接触が、下位レベルでの集団の関係に影響を与えた。しかし、民族集団レベルの接触は物質文化に表れるが、父系親族集団レベルの接触は物質文化にほとんど表れていない。カザフの父系親族集団どうしは、物質文化にそれほど大きい差はないためである。父系親族集団の違いは、物質文化よりもむしろ、儀礼などの際の行動自体に現れる。例えば、父系親族集団によって異なる祖先の墓地に赴いて儀礼を行った事例が観察されている。どのレベルでの集団の差異が物質文化に反映されるのかは、接触にともなう物の変化を見ていく上で留意すべき点だろう。

また、男女ともに移動して別の集団に接触するのか、あるいは男性だけ、または女性だけが別の集団に接触するのかによって、物質文化への影響は異なると考えられる。カザフスタン北部の調査地では、上述のように、19世紀後半に先住者集団の有力者（男性）が移住者集団に入っていく、技術や物質文化を取り入れて戻ってくる事例が確認された。一方、女性が別の集団に入るのは、結婚を契機とする場合が多い。民族間の接触が進んだ20世紀前半の事例として、カザフ人男性が出身地でカザフ人女性を娶った後に、出身地を離れてロシア人女性と結婚し、民族の異なる2人の妻がいたケースがあった。20世紀後半には、先住者集団であるカザフ人が定住して形成した村落に、移住者集団から妻を娶った事例も確認され

た。今後さらに調査していく必要があるが、初期には男性が接触して物や技術を取り入れ、接触が進むと通婚によって女性が物や技術を伝えるようになる可能性がある。

ここで取り上げたのは新人の集団間の接触だが、人口密度が現代と比べてはるかに低かった旧石器時代に、新人は実際にどれほど旧人と会う機会があったのだろうか。核 DNA の分析からは、ネアンデルタール人やデニソワ人の遺伝子が新人にわずかに受け継がれていることが示されている(篠田 2015: 65-75)。限定的ではあっても通婚していたならば、新人の集団に旧人の女性が入ったのか男性が入ったのか、またそれは物の証拠とどのように結びつくのだろうか。仮に石器など特定の物を男性だけが作る場合、女性が別の集団に入っていくと人骨や遺伝子には変化が生じるが、男性が作る物自体には影響しないことも考えられる。ただし、旧人と新人の場合も、新人どうしの場合も、異なる集団がかなりの時間にわたって近接して暮らす状況でなければ通婚自体が稀であったと思われる。

7. まとめと今後の課題

文化人類学が観察と聞き取りという手法で調査できるのは新人の社会だけなので、導き出されるモデルも新人の社会や行動に限定される。また、文化人類学の調査で対象とできる時間の幅は数十年から百数十年である。より長い時間が積み重なって初めて、物質文化の変化として表れる場合も多いだろう。そうした限界を意識しつつ、本報告で検討した中央アジア草原地帯の事例から、人の移動と接触にともなう変化をまとめると次のとおりである。

1) 季節的移動性の高い集団と低い集団は、通常は自然環境によって住み分けるが、定住的な生活をする集団が草原に進出したことで季節的移動性の高い集団を圧迫した。その際、草原に点在する湖や森林など、限定的だが周囲と異なる環境が進出の足掛かりとなった。

2) 移住者集団の物質文化に、先住者集団が同化するとは限らない。定住化後の先住者集団の住居は、近接する別の先住者集団の住居と同じ素材で作られるようになった。移住者集団と先住者集団の関係だけでなく、先住者集団どうしに関係も同時に見ていく必要がある。

3) 民族レベルの接触は物質文化に表れやすいが、親族集団レベルの接触は物には表れず、行動自体で区別されていた。どのレベルの集団の差異が物質文化に反映されるかは、その時代の集団の規模や構成によって異なると考えられる。

4) 異なる集団との接触のしかたや程度には、性別に

よって差があり、それが物質文化にも影響している可能性がある。今後の調査で留意していきたい。

本報告では、季節的移動性の高低に着目して居住形態を中心に上げたが、そのほかに食物の獲得や分配、性別／年齢別の役割分担、結婚や子育てなどの互いに関連しあう事柄が、旧人か新人かを問わず生物としての人の社会の根幹に関わっている。これらの点は、新人がアジアに拡散し定着していく過程で重要であっただろう。また、現代の社会でも重要であり続けている。物質文化に着目しながら、人の社会のあり方を探っていきたい。

引用文献

- Agentstvo Respubliki Kazakhstan po statistike
1999 *Kratkie itogi perepici naseleniya 1999 goda v Respublike Kazakhstan*. Almaty: Agentstvo Respubliki Kazakhstan po statistike.
- Agentstvo Respubliki Kazakhstan po statistike
2009 *Perepici naseleniya Respubliki Kazakhstan 2009 goda. Kratkie itogi*. Almaty: Agentstvo Respubliki Kazakhstan po statistike.
- 国武貞克
2018 「カザフスタン南部における後期旧石器時代遺跡の調査」西秋良宏編『アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年の枠組み構築 2 (A01 班 2017 年度研究報告)』pp.44-51.
- 篠田謙一
2015 『DNA で語る日本人起源論』岩波書店。
- 那須浩郎
2017 「気候変動と定住化・農耕化—西アジア・日本列島・中米」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生』東京大学出版会、pp.42-57.
- 西秋良宏
2018 「アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年の枠組み構築—2017 年度の取り組み」西秋良宏編『アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年の枠組み構築 2 (A01 班 2017 年度研究報告)』pp.1-9.
- 林俊雄
2000 「草原世界の展開」小松久男編『中央ユーラシア史』山川出版社、pp.15-88.
- 山極寿一
2012 『家族進化論』東京大学出版会。
- インターネット
岡奈津子 1998 「カザフスタンの人口変動」『アジア長期経済統計』(一橋大学経済研究所 Discussion Papers). http://www.ier.hit-u.ac.jp/COE/Japanese/discussionpapers/DP98.16/98_16.html, 2018 年 7 月 13 日最終閲覧。
- カザフスタン共和国経済省統計委員会 HP
http://stat.gov.kz/faces/wcnav_externalId/publBullEthnos?_afzLoop=3228686674939665#%40%3F_afzLoop%3D3228686674939665%26_adf.ctrl-state%3Dx5leg558m_81 2018 年 10 月 1 日最終閲覧。

狩猟採集民における道具利用の多様性 ——民族誌データを利用した通文化研究に向かって

彭 宇 潔

(国立民族学博物館)

1. 本研究の目的と方法

本研究は引き続き、民族誌資料の研究に基づいて、狩猟採集民集団にみられる道具利用の多様性に関して、文化人類学の視点からその影響要素を検討することを目的としている。今年度においては、定量分析に応じて有効に利用できる民族誌データの選定に関する検討をおこなった。

民族誌データには調査対象社会の文化に関する記述的データであるが、時代や研究者のバックグラウンドなどによって記述のスタイルがそれぞれ異なる。そのような記述を定量的分析に用いることが非常に難しいと考えられている。その難点を考えて、本研究では筆者がこれまで実際のフィールド調査で得たデータと経験にもとづいて、道具利用に関する定量的分析の方法を模索した。この試行的研究を通じて、民族誌から通文化的研究に利用できるデータの選定を検討し、文化人類学における定量的な通文化的研究の方向性を示す。

本研究は 2010～2017 年に断続的に実施したフィールド調査で得た第一次資料をベースに、カメルーン東部州の狩猟採集民バカたちが持つ道具にみられる日常生活での多様な利用法を整理した。まずは、最も一般的に使用されている山刀を対象に、その使用技法、対象資源、及び年間生産スケジュールにおける多様な利用を整理する。それから、山刀を用いた果実の加工といった特定の活動を事例に、使用行動と山刀の形態、使用者の身体能力にどのような相関関係があるか、映像分析を通じて明らかにした。

2. 結果¹⁾

2-1. 年間生産スケジュールからみる道具利用の季節性

バカたちは市販の山刀を利用している。それはカメルーンないし中部アフリカ地域の各地各民族集団に一般的に利用されているものである。通常、バカたちは近隣集団の農耕民から購入するか、農耕民の手伝い作業の報酬と



図1 バカたちが使用する山刀（実物によって筆者作成）

して手に入るのである。そうした山刀はカメルーンで *machete* というフランス語名で呼ばれ、バカ語では「ンバラ (*mbala*)」と呼ばれている。図1に示したように、山刀は刃の部分が約 45～50 センチほどで、柄の部分が約 15 センチしかない長い刃物である。未使用の新しい山刀は刃の幅が約 8～10 センチあり、全体が約 1.5 キログラムある。長期的な使用と磨きなどのメンテナンスによって、刃の幅と長さが徐々に狭く短くなり、柄の部分も何度も新しい材料で補修したり補強したりされ、全体は小さくなって、最終的に短刀やナイフになってしまうことがしばしばみられる。

そのような山刀は男女を問わず成人がほぼ一人あたり 1～2 本所有している。山刀は活動によって使用技法が異なったり、また性別役割分業によって男女はそれぞれ違う活動に使ったりする。そして、彼らがおこなう主な活動は通年的と季節的に分けることができる。このように、まず、技法（わざ）と性別から、バカが使用する刃付き道具の利用を整理することができる。表1に示したように、山刀や短刀／ナイフはもっとも多様に使われていることがわかる。また、専門の用途を持つ道具は特にどちらかの性に偏って使われていることがわかる。

また、図2が示したように、通年的には毎日の薪採集、いも類の採集と罟の設置・確認が行われている。しかし、通年的におこなわれるが、道具における一回での使用時間が非常に短い。一方、季節の変化（図3）によって、獲得できる資源が変わるため、それに応じてバカたちの活動も変わる。小乾季にしか採集できない果実の採集と加工や、乾季に入ると頻繁に行われる女性たちの集団漁労（掻い出し漁）、大雨季に迎えるカカオ収穫への手伝いは、非常に季節性の高い活動である。そういった高い季節性

表1 バカが使用する刃付き道具の用途及び使用技法（筆者作成）

道具	性	使用わざ	用途
山刀	男	切る 削る	跳ね罟の製作と設置、小型動物の狩猟、家屋家具製作、キャンプ地開拓、捕獲した動物の解体
	女	切る 掘る 削る	鬼ねずみ猟、薪採集、各種植物採集、小屋製作、編み物製作、搔い出し漁、調理
短刀 ナイフ	男	切る 削る	捕獲した動物の解体、道具製作、果実の加工
	女	切る 削る 剥く	編み物製作、調理、果実の加工
槍	男	突き刺す	大型動物の狩猟
斧	男	切る	ハチミツ採集、キャンプ地開拓、薪採集
カミソリ	男	切る 剃る	獣皮加工、ゴムを切る、爪切り
	女	切る 剃る (削る)	治療、イレズミ、髪そり、爪切り

Jan	Feb	Mar	Apr	May	Jun	Jul	Aug	Sep	Oct	Nov	Dec
搔い出し漁						搔い出し漁					搔い出し漁
					果実の採集・加工						
			農耕民の畑仕事					農耕民の畑仕事			
〔通年〕薪採集											
〔通年〕イモ類採集											
〔通年〕罟瓢											

図2 バカの主な生業活動の年間スケジュール（筆者作成）²⁾

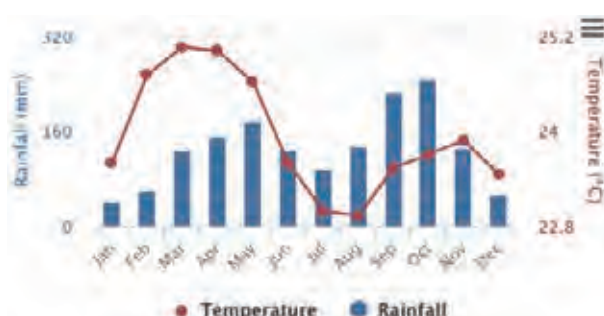


図3 調査地の月間降雨量と月間気温（World Bank, 2016）

の活動は長い時間で集中的に作業するため、通年적으로こなわれる活動より使用道具へ負担がずっと高い。

2-2. 道具利用に関する定量分析の試み

切ることは狩猟採集漁撈社会や牧畜社会、農耕社会などの非工業化社会の人々の日常において基本的な技法だと考えられる。特に狩猟採集漁撈社会においては、切る行動は生存に関わる重要な技法である。切ることは、一

つのモノをいくつかに分割する、あるいは一つのモノからその一部を削除する行為だという解釈をここに用いたい。肉を切ることや樹木の伐採、獣皮の剥離、髪切りなどのことはすべて、切ることに関わっている。ここでは、バカたちの切る行動と道具の形態との相関関係について、定量化分析を通して考えた。

1) 形態と切る対象

バカたちは4種類の道具を切る行動に使っている。斧は伐採に使われていて、切る対象が身体から離れている（図4）。最も小さい道具のカミソリは、治療やイレズミ、髪切りなどのような、身体を直接に対象にしている（図5）。ミドル・サイズにあたる山刀とナイフ・短刀は、ちょっとした伐採から調理まで、用途が多様で頻繁に使われている（図6）。

2) 形態と身体の動き

大きいサイズの道具はより多くて大きい身体部分を、小さいサイズの道具はより小さい身体部分を使われている傾向が見られた。斧や大きい山刀は、両手と上半身が動いて使う。一方、小さい山刀とナイフ・短刀の場合では、上半身が安定したままで片手か両手が動いて使うのは一般的である。カミソリを使う時は何本かの指が動き、斧や山刀などの場合より、小さい筋肉群だけ使われている。言い換えれば、大きい道具の利用には力（筋肉の強度）が必要で、小さい道具の利用には精度（コントロール能力）が必要である。



図4 大きい樹に登って斧で樹幹を切っているバカ男性。（筆者撮影、2010年10月26日、カメルーン東部州）

3) 道具のサイズと技法の利用

三人のバカ女性を対象にナッツを切る行動に対する観察をした（図7）。三人の女性はそれぞれ、60代、40代、20代で、同じ集落に住む、近い親族関係を持つ人たちである。分析対象のビデオクリップは11分40秒あって、5人の作業集団の中にいるその三人の作業が記録されているものである。三人の行動に対して、ナッツを切る3つ

の段階におけるそれぞれかかった時間、総計生産量、作業－休憩の割合などに関して定量分析を試みた。その結果から下記の傾向がみられた。

- (ア) 一番年上の60代女性は生産率が圧倒的に遅くて、ナッツの加工ペースがまちまちである。
- (イ) 若い40代と20代の女性二人は、同じレベルの生産性を持ち、加工のペースも安定している。



図5 カミソリで息子の体中に瀉血治療を施すバカ女性。

（筆者撮影、2011年11月3日、カメルーン東部州）



図6 家具を制作するために、バカ男性が山刀を使って長い棒を適切な長さに切断する。

（筆者撮影、2017年9月2日、カメルーン東部州）



図7 バカ女性がナッツを切る加工作業の風景。（筆者撮影、2017年9月7日、カメルーン東部州）

- (ウ) 休憩のタイミングはずれていたが、三人とも作業－休憩の割合に大きな違いがない。
- (エ) 60代の女性は加工過程の「思考段階」に一番時間をかけていた。それは、彼女は目がはっきり見えないことや力がほかの二人より劣っていることに関連していると考えられる。
- (オ) 40代と20代の二人に身体的能力の差がみられなかった。ただし、二人が使っている山刀のサイズは少し異なっている事実は、二人が加工の各段階における時間的配分に影響をもたらした可能性があると考えられる。

3. まとめと課題：道具利用に関する通文化研究の方法論

今年度の研究をととして、狩猟採集民集団における道具利用に関する通文化的研究の方法を検討することができた。まずは、年間スケジュールと月間気候変動（気温・降雨量）、獲得する対象資源、使用される道具との相関関係の整理・分析は、民族誌データをベースにおこなうことができると考えられる。これまでの民族誌資料は記述のスタイルや内容が異なって定量的な比較研究に耐えられる材料にならないが、記載された民族集団の生活環境は地理的情報から把握できる。それに、主要な対象資源のリストや諸活動の年間スケジュールなどの基本情報は一部の民族誌から収集することが可能であって、民族集団を選定して通文化的研究は可能になる。

一方、道具使用行動の映像分析は現在の民族誌資料から映像データを得ることが非常に難しいが、石器制作の行動分析をする他班のメンバーと交流して、行動分析の共同研究が期待される。

注

- 1) 研究結果の詳細は、彭（2018a, 2018b）及び Peng（2018）の発表において公開した。
- 2) 居住地域によって動植物資源の種類が多少異なり、対象資源と獲得時期に違いが生じる可能性がある。

参考資料

彭宇潔

2018a 「熱帯地域の狩猟採集民にみられる道具利用の比較研究—集団内・外における社会関係に着目して」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第5回研究大会』名古屋大学、2018年5月12–13日（予稿集18頁）。Peng, Y. (2018) Comparative study of tool use among hunter-gatherers in tropical regions: focusing on social relations within/between groups. *The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University, Nagoya, May 12–13, 2018 (Proceedings, p.19).

2018b 「道具利用行動に関する定量化の試み—狩猟採集民バカの切る行動を事例に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第6回研究大会』東京大学、2018年11月17–18日（予稿集24頁）。Peng, Y. (2018) An exploratory quantitative analysis of tool use behaviors: In the case of cutting among Baka hunter-gatherers. *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17–18, 2018 (Proceedings, p.25).

Peng, Y.

2018 An exploratory quantitative analysis of tool use behaviors: In the case of cutting among Baka hunter-gatherers. *The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16–18, 2018 (Proceedings, pp.100–101).

宗教と神話の進化

——集団間の動態におけるその役割

山 田 仁 史

(東北大学)

本報告は、人類における宗教・神話の進化に関する従来の諸仮説を総合し、かつ宗教や神話が集団間の動態にいかなる影響をおよぼしたかを考察するものである。

まず1960年代、宗教社会学のベラー、人類学のウォーレス、インド学・仏教学の中村元らがそれぞれ独立して、宗教の進化に関する大きな見通しを提出した [Bellah 1964, Wallace 1966, 中村 1960, 1974-77]。図に見るように、これらは多少とも、ヤスパースの「枢軸時代」(Achsenzeit, Axial Age) 概念に依拠している。これは紀元前500年頃、より広くとれば前800年から前200年の間に、ユーラシア大陸の東西にひろく精神的な覚醒が起き、いわゆる「救済宗教」が生じたという論である [Jaspers 1949]。なお、この「救済宗教」を狭義の宗教とすれば、本稿で扱うのはより広義の〈宗教〉である。21世紀に入り、当概念の有効性はますます認められる方向にあるが [Bellah 2011, Bellah & Joas eds. 2012, Turner *et al.* 2018]、人類の宗教進化については、より古い時代まで溯って検討する動向が生じている。

つまりここ30年ほど、考古学、古人類学、遺伝学の進歩にともない、数万年におよぶ宗教進化について様々な仮説が出されており、以下三つの立場に分けられるが [Singh & Chatterjee 2017]、いずれも宗教の価値判断につながるという難点を有している(本稿末尾の《補論》を参照のこと)。

(1) 宗教は人類進化にとって適応的 (adaptive) : (1.i) 個体レベルで: ハンディキャップ理論 (costly signaling theory: R. Sosis ら) ; (1.ii) 集団レベルで: 多レベル淘汰説 (multilevel selection theory: E. Sober, D. Wilson, E. Wilson, J. Bulbulia ら) [cf. Purzycki *et al.* 2017]。

(2) 宗教は人類進化における何らかの心理機制の副産物 (by-product) : スパンドレル説 (spandrel theory: S.J. Gould ら) ; 行為主体を過敏に探知する装置説 (HADD: hyperactive agency detection device: S. Guthrie, J. Barrett ら) ; 心の理論 (theory of mind: S. Atran, P. Boyer ら)。

(3) 宗教は文化的に伝達される非適応的 (maladaptive)

現象: 文化進化とくにミーム理論 (meme theory: R. Dawkins, D. Dennett ら)。

またこれらとは別に、出アフリカ (Out-of-Africa) の際に現生人類はどんな神話をもっており、どう拡散したのかについても新たな仮説が登場している。たとえばインド学のヴィッツェルによれば最古の人類がもっていたパン・ガイア神話のうち、古層部分はゴンドワナ神話群として残存し、ユーラシア大陸の文明圏ではローラシア神話群と呼ぶべき発展をみせたという [Witzel 2012]。また考古学・人類学のベリョースキンによる世界伝承モチーフの膨大なデータベース化によれば、死の起源の神話などは出アフリカ以前から知られていた。その後、インド太平洋とユーラシア大陸の間において長い隔離が続いた結果、大きな二つのクラスターが形成されるに至ったとされる [Berezkin 2013]。さらにデュイの神話の「系統発生分析」(phylogenetic analysis) では、コズミック・ハントとポリュペーモス (アニマル・マスター) 神話をフィーチャーする [d'Huy 2016]。

他にも、この文脈で考慮に入れるべき仮説としては、まずフロベニウスの理論がある。彼によると人類文化は有機的であり、文化生成時点で人が何に「心とらわれた状態」(Ergriffenheit) だったかを考慮する必要がある、とされる [Frobenius 1938]。またエリアーデによるとヒトが直立歩行を開始し、周囲の空間に不安をおぼえた時、宗教がきざしたという [Eliade 1976]。これは当然メタファーだが、人間における実存という問題にふれており、興味深い。このほかるローワ＝グーランは狩猟採集民の巡回空間と定住農耕民の放射空間、という認識のちがいを指摘し、北米のトリックスター譚などにこのアイデアを適用した [Leroi-Gourhan 1964-65]。またオングは無文字社会における記憶術として、奇怪な姿の神話的存在が語られたと主張した [Ong 1982]。この論は、いわゆるアニマル・マスターの表象などを考える際にきわめて示唆的である。さらにボームは、狩猟採集民社会においても「超自然的制裁」(supernatural sanctioning) が広く行われていたということを強調している [Boehm

ベラー		ウォーレス			中村	
宗教形態	象徴・行動・組織・社会的意味	宗教形態	祭祀制度・宗教的職能者・神観念	一般的進化段階	思惟／思想	主な特徴
現代宗教 (modern)	例: 啓蒙主義以降の西洋プロテスタント	(考察なし)			近代的思想 ／	自我の自覚。家庭生活に意義。宗教的意義をもつ現世的職業生活。 例: プロテスタンティズム、鎌倉以降の浄土教、インドのヴァッラバ
近代宗教 (early modern)	現世の活動の中で直接的救済。個人の内的な信仰。階層制の弱体化。民主的社会への移行。 例: プロテスタント宗教改革					
歴史宗教 (historic)	人間の救済を目標とする。自我の把握と、現世からの分離という理想。宗教・政治の階層制。宗教が社会秩序を正統化・補強。 例: イスラエル、ギリシャ、インド、中国	一神教的宗教	祭司団。至高神。 例: インドの農村	国家	中世的思惟 ／	教権に対する挑戦としての神秘主義: 西洋の神秘家、東洋の禪 ↑ 教権と思惟方法の確立 ↑ 古代帝国の没落と中世的教権の成立: 封建制度 ↑ 民衆化された普遍的宗教: 救済者を立てる宗教
(枢軸時代: Axial Age)					古普遍的思惟 ／	普遍的な世界国家 ↑ 都市の興隆: 自由思想家と普遍的な教説 ↑ 哲学的思惟の成立 例: ジャイナ教、仏教、ヒンズー教、儒教、道教、ストア哲学、エピクロス派、キリスト教、マニ教 (枢軸時代: Achsenzeit)
古代宗教 (archaic)	神々と宇宙論。供犠による神・人の交流。神聖王・専門的司祭など。救済者たる王の出現に対するメシア的期待など。 例: エジプト、メソポタミア、殷・周など	オリュンポス	教会。専業の祭司団、強力な諸高神を含む階層的神界。 例: ダホメー		原始的思惟 ／	アニミズム、トーテミズム、死者祭祀、祖先崇拜、祈禱、供犠、呪術。基本的に多神教。明るく朗らかな人生観。宇宙創造神話。 民族宗教／国民宗教: 神道、ユダヤ教、バラモン教。
未開宗教 (primitive) / 部族宗教 (tribal)	神話的象徴。儀礼的行動。ときにシャマンや呪医。儀礼生活が社会の連帯を補強。 例: オーストラリア・アボリジニ	共同体的宗教	共同体による時々の儀礼(収穫儀礼、通過儀礼など)。自然を統御する複数の神々。 例: トロブリアンド諸島民	チーフダム		
		シャマン的宗教	シャマン、個人主義。パートタイムの宗教的職能者。 例: エスキモー	食部料族生産 狩猟採集経済 バンド		(考察なし)

図 宗教の進化に関する従来の諸理論

[典拠: 以下をもとにして山田作図。Bellah 1964, 2011, Bellah & Joas (eds.) 2012, Miles 2013, Juergensmeyer 2013, Wallace 1966: 88-101, Kottack 2002: 500-502, 中村 1960: 249-287, 1974-77, 大林 1996: 13]

2012]。

以上のような動向もふまえ、今後への見通しをひとつままとめておこなうなら、次のようになるだろう。

まず宗教の進化については、枢軸時代を中心とする仮説はいまだに有力だが、より古い人類史にまで遡っての検討が進行中である。そこでは宗教が人類進化にとって(1)適応的か、(2)それ自体は適応的でも非適応でもなくニュートラルな副産物にすぎないのか、(3)非適応的か、

という三つの立場が見られる。しかし、これらは宗教に対する価値判断を含みがちである。

次に神話の進化について、出アフリカ時点で現生人類が持っていた神話やその後の拡散が議論されている。無文字で狩猟採集を行っていた人々が早期に有していた可能性がある神話として、コズミック・ハント、アニマル・マスターやトリックスター、そして死の起源、を挙げてよからう。これらは当時の人々が「心とらわれ」、実

存の不安に対処する中から生まれたものとも言う。

最後に、こうした象徴化や物語による自然認識・環境認識の共有は、超自然的制裁といったモラルの浸透にも伴って、他集団との対決に際して有利に働いた可能性が考えられる。具体的な民族誌データにもとづく検討とモデル化を今後の課題としたい。

《補論》宗教の進化にかかわる三つの立場

[Singh & Chatterjee 2017 に大幅に依拠]

前もって全体的な感想を述べるなら、英語圏においてこのテーマを論じる場合、「宗教」への価値づけあるいはイデオロギーを含んでしまう、という難点がある。「宗教なるもの」を今後も擁護すべきなのか、不要な過去の遺産として棄却してゆくべきなのか、という立場表明をせざるをえないこと、が見えてくる。それはつまり、「宗教 (religion)」のもととなった “religare” というラテン語の両面でもある。語義は英語で “to bind” すなわち人々を「結びつける」という正の面と、「束縛する」という負の面の両方が、この語で含意されているのだ。

さて三つの立場とは、本文中でも述べたように (1) 宗教は適応的 (adaptationist explanations) つまり宗教は “adaptive” であると支持する立場、(2) 宗教は適応に関してはニュートラルであり、人類進化において宗教とは別の適応的な心理機製の副産物として生まれたもの (by-product explanations) つまり宗教は “nonadaptive” とする中立の立場、そして (3) 宗教は文化的に伝達される非適応的現象 (cultural explanations) という宗教は “maladaptive” だと批判する立場、である。シンとチャタジーによれば、これら三つの立場のうち、(1) と (3) は宗教というものが如何に維持されてきたかを扱うが、宗教の発生自体については何も言っていない。他方で (2) は宗教の起源と維持について語っている。では一つずつ見ていこう。

まず第一の、宗教は適応的 (adaptationist explanations) つまり宗教は “adaptive” であると支持する立場からいこう。これの先駆者はフィッシャー [Fisher 1930] である。彼は形質進化においては自然淘汰のみが重要だと強調した。次に生物学者ウィリアムズ [Williams 1966] に至って、初めて今日の適応学説が提唱された。つまり身体的・心理的形質が適応的か非適応的かを認めるために、自然淘汰概念を適用する一般基準を定義した。次に、以降の議論では個体 (individual) と集団 (group) の二つのレベルにおける適応が区別される。すなわち (i) 個体に関してと (ii) 集団に関して、である。

まず (1.i) 個体レベルの適応を出したのは、人類学者リチャード・ソーシス [Sosis 2004] である。彼の「高コストシグナル理論」(costly signalling theory; 日本で

はハンディキャップ理論として知られる) とは、もとはザハヴィにより、野生動物における捕食者と獲物の間にみられる特異なシグナル行動を説明するために発展された、より広範なシグナル理論 (ハンディキャップ原理 handicap principle と呼ばれる) の特殊な応用にすぎない [cf. Zahavi 1977, Grafen 1990, ザハヴィ／ザハヴィ 2001]。ソーシスらはユダヤ教のキブツなども含む様々な宗教コミュニティを調査し、高コストな儀礼に参加する者は集団内で高評価を得、したがって配偶へのアクセスが増加する、と結論した。なぜなら高コストな儀礼に参加することはコミュニティ内で共有された信念にかかわることを意味し、これによりコミュニティ側も参加者に好意的にふるまうようになるからだ。彼らによれば宗教的であることによりもたらされるベネフィットは、かかるコストをはるかに上回るので、宗教的行動は個体レベルにおいて適応的である。また宗教的であることにより、心身の健康にもたらされるベネフィットも報告されているが、因果関係は必ずしも明らかでない、という批判もある。

次に (1.ii) 集団レベルの適応である。これは非宗教的コミュニティにくらべて、宗教的コミュニティにおいてはメンバー間の団結や協力が増す、という議論で、この見地に立つ主要な論者の1人は、デイヴィッド・ウィルソンである [Wilson 2002]。彼のマルチレベル選択説 (多レベル淘汰) (multilevel selection theory) によると、淘汰圧 (選択圧) は個体と集団の両方のレベルにかかる。個体レベルでは高コストで不利な行動でも、集団レベルではベネフィットをもたらす可能性がある。エリオット・ソーバーとウィルソン [Sober & Wilson 1998] はこの理論を用いて、人類における利他性の存在を説明した。つまり利他的であることは、個体レベルでは行為者の遺伝的適性をそこなうかもしれないが、集団内での協力を促進するので、集団全体の適性を増進するというのである。これはすなわち、集団選択／グループ選択／群淘汰 (group selection) を重視したということだ。

マルチレベル選択説を宗教に適用し、デイヴィッドとエドワードの両ウィルソンらは [Wilson & Wilson 2008]、宗教の集団利益はコストをはるかに上回る、と論じる。ただし集団レベルでの適応性は、個体レベルでの適応性とは必ずしも一致しない。利他性の例のように、個体としては非適応的になってしまう場合もある。ウィルソンは、宗教は各個人の向社会的行動を奨励することで、コミュニティを統合する役割を果たすと説いた [Wilson 2002]。宗教による道徳的教化力つまり自動的監視 (automatic policing) の役割を重く見たのだ。

ブルブリアもまた、宗教的コミュニティでは人々の行

動に賞罰を与える強力な主体が存在する場合、外的な規則の強制はさほど要請されないとする [Bulbulia 2004]。そしてウィルソンの議論は、経済的ゲームの研究により広汎な経験論的支持を受けている [Ruffle & Sosis 2006, Bulbulia & Mahoney 2008]。つまり宗教的な人間は、同じ宗教に属する人と取引する際、信用や利他性をより大きく発揮する。そして個体と集団の両レベルを併せ考えると、宗教がなぜ繁栄を続けるかがよりよく説明される。それは個体も集団も、宗教的である方が非宗教的であるよりも利益を受けやすい傾向にある、ということだ。

この議論について批判は二つある。まず (a) 集団の定義があいまいというもの。たとえばジョーゼフ・ブルブリアは二つの長老教会を例に出しているが、どちらも一つのセクトに属する一方でメンバーやファンをめぐっては競合関係にある。これは異なる集団とすべきか、それとも同一集団と見なすべきか、という疑問が残る。もう一つの批判は (b) 群淘汰は、宗教発展の初発の原因とはいえないというものだ [Boyer 2001, Atran 2002]。

ほかに古生物学者スティーヴン・ジェイ・グールドと遺伝学者リチャード・ルウォンティン [Gould & Lewontin 1979] も適応論者たち一般を批判している。諸形質を適応と説明もするのに急であり、そうした形質が選択された正確なメカニズムを示していない、というのである。重要なのは、宗教に関する特定の行動が、世代内・世代間においていかに伝達されるのかを示すことだ、と彼らはいう。

次に第二の論陣を見てみよう。宗教は適応に関してはニュートラルであり、人類進化において宗教とは別の適応的な心理機制の副産物として生まれたもの (by-product explanations) という立場である。これはスパンドレル (アーチ・壁の外側の湾曲部と天井・枠組みとの間にできる三角形の部分) 説とも言われる。つまり宗教とは、宗教以外の心理的機制における適応の、スパンドレルである、というのだ。上記のグールドとルウォンティンが提唱したもので、「適応主義」に対する「反適応主義」とも呼ばれる。つまりは、宗教それ自体は適応の副産物だが、それ自体が適応的なわけではない、という。生物学の事例としては、鳥の羽はもとは暖をとる目的で選択されたが、後には飛行に用いられるようになり、羽の主要機能になった例がある。

そもそも宗教とは進化の副産物である、というのはダーウィンが初めに主張した。その後ステュアート・ガスリー [Guthrie 1993] は、適応的な心理特性による選択が、宗教の発展を説明すると唱えた最初の論者たちの1人である。ガスリーは、宗教の核心にあるのは超自然的動作主が存在するという信念であり、これは行為主体を探知す

る過働装置 (overactive agency detection systems) による、と主張し、これはジャスティン・バレット [Barrett 2000, cf. 2011, 2012] により、「行為主体を過敏に探知する装置」(HADD: hyperactive agency detection device) と命名された。人間にはこれが備わっているため、何もない所にも擬人化した物を見がちである。それが宗教的認知に寄与している、というのである。これについては実験により支持する結果が多く出されている (パレイドリア pareidolia)。たとえばコンピュータによりランダムに生成されたパターンに、人間の顔を認めてしまうなど、パターンを認識しようとする強い傾向が、人間の認知システムにはあるというのである。バレットもガスリーも、HADD は人類の祖先にとって適応的だったと考えていた。たとえば狩猟をしていて、後ろの茂みがガサガサした時、逃げた方が生存に有利だったはずだから、というのだ。

これに心の理論 (theory of mind) つまりヒトが他者の心の状態を察する能力もあわせ考えると、宗教的信念がいかにして発生したのか、説明できそうだという [Atran & Norenzayan 2004]。またこれ以外にも多くの心理機制が、宗教の発達に寄与しただろうとされる。たとえばパスカル・ボイヤー [Boyer 2001] は、宗教は心理機制の選択によってのみでは説明できない、と論ずる。宗教がコミュニティを越え、世代を越えて伝わるのはなぜか、説明できないからだ。彼によれば宗教にとり非常に重要な特性とは、最小限の反直感構造 (minimally counterintuitive structure) なのだという [Boyer 1994]。つまり宗教的な概念には、直感に反する要素が少しあるが、あまり多すぎたはいけない。それがあつて、記憶し伝達する気にさせる、というのである。

さて以上の副産物論者への批判としては、認知的説明に頼りすぎており、文化の役割を十分に考慮していないというものがある [Wilson 2002]。ただ批判はあるにせよ、副産物というニュートラルなとらえ方は保守的でもあり、支持されやすい。また宗教そもその起源についても説明しているのである。

最後に、宗教は文化的に伝達される非適応的現象 (cultural explanations) だとし、宗教は “maladaptive” だと批判する人々に目を向けよう。宗教を文化として説明する論者たちは、宗教が人々におしつける重大な対価を強調し、その非適応性を説く。そして主に文化進化とくにミーム理論に依拠する。ミームはもともとリチャード・ドーキンスの発案だが、ボイヤーやアトランはミームという観点を拒否している。他方でデネット [Dennett 2006] はミーム理論を採用するが、ミームも遺伝子と同じく淘汰圧にさらされる、と主張する。なおデネットは、

宗教の非適応的側面だけでなく、適応的な面も指摘した。ただしミーム論を宗教の説明に適用することについては、経験論的な支持がほとんど得られていない。そして総じて見るなら、副産物という第二の説明が今のところ最も支持を得ているのである。

引用文献

- Atran, Scott
2002 *In Gods We Trust: The Evolutionary Landscape of Religion*. New York: Oxford University Press.
- Atran, Scott & A. Norenzayan
2004 Religion's evolutionary landscape: counterintuition, commitment, compassion, communion. *Behavioral and Brain Sciences*, 27: 713-770.
- Barrett, Justin L
2000 Exploring the natural foundations of religion. *Trends in Cognitive Sciences*, 4: 29-34.
2011 *Cognitive Science, Religion, and Theology: From Human Minds to Divine Minds*. Templeton Press.
2012 *Born Believers: The Science of Children's Religious Belief*. Free Press.
- Bellah, Robert N
1964 Religious Evolution. *American Sociological Review*, 29(3): 358-374.
2011 *Religion in Human Evolution: From the Paleolithic to the Axial Age*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University.
- Bellah, Robert N. & Hans Joas (eds.)
2012 *The Axial Age and Its Consequences*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University.
- Berezkin, Yuri E
2013 *Africa, Migration, Mythology*. (Kustkamera Petro-politana). Sankt-Peterburg: Nauka. (In Russian with an English abstract)
- Boehm, Christopher
2012 *Moral Origins: The Evolution of Virtue, Altruism, and Shame*. New York: Basic Books.
- Boyer, Pascal
1994 *The Naturalness of Religious Ideas: A Cognitive Theory of Religion*. Berkeley: University of California Press.
2001 *Religion Explained: The Evolutionary Origins of Religious Thought*. New York: Basic Books. (ボイヤー、パスカル『神はなぜいるのか?』叢書コムニス6、鈴木光太郎／中村潔訳、東京：NTT出版、2008年)
- Bulbulia, Joseph
2004 The cognitive and evolutionary psychology of religion. *Biology and Philosophy*, 19: 655-686.
- Bulbulia, Joseph & A. Mahoney
2008 Religious solidarity: the hand grenade experiment. *Journal of Cognition and Culture*, 8: 295-320.
- Dennett, Daniel C
2006 *Breaking the Spell: Religion as a Natural Phenomenon*. New York: Penguin Group. (デネット、ダニエル・C『解明される宗教：進化論的アプローチ』阿部文彦訳、東京：青土社、2010年)
- d'Huy, Julien
2016 The Evolution of Myths. *Scientific American*, 315(6): 62-69.
- Eliade, Mircea
1976 *De l'âge de pierre aux Mystères d'Éleusis*. (Histoire des croyances et des idées religieuses; tome 1 - Bibliothèque historique). Paris: Payot.
- Fisher, Ronald A
1930 *The Genetical Theory of Natural Selection*. Oxford: Oxford University Press.
- Frobenius, Leo
1938 *Schicksalskunde*. Weimar: Verlag Hermann Böhlaus Nachf.
- Gould, Stephen Jay & Richard Lewontin
1979 The spandrels of San Marco and the Panglossian paradigm: a critique of the adaptationist programme. *Proceedings of the Royal Society of London, Series B: Biological Sciences*, 1161: 581-589.
- Grafen, A
1990 Biological signals as handicaps. *Journal of Theoretical Biology*, 144: 517-546.
- Guthrie, Stewart
1993 *Faces in the Clouds: A New Theory of Religion*. New York: Oxford University Press.
- Jaspers, Karl
1949 *Vom Ursprung und Ziel der Geschichte*. München: R. Piper & Co.
- Leroi-Gourhan, André
1964-65 *Le geste et la parole*, 2 tomes. Paris: Éditions Albin Michel.
- 中村元
1960 『比較思想論』(岩波全書；247) 東京：岩波書店。
1974-77 『世界思想史』全7巻(中村元選集；17-23) 東京：春秋社。
- Ong, Walter J
1982 *Orality and Literacy: The Technologizing of the World*. London: Methuen.
- Purzycki, Benjamin *et al.*
2017 The evolution of religion and morality: a synthesis of ethnographic and experimental evidence from eight societies. *Religion, Brain & Behavior*, 2017: 1-32.
- Ruffle, B. J. & R. Sosis
2006 Cooperation and the in-group-out-group bias: a field test on Israeli kibbutz members and city residents. *Journal of Economic Behavior and Organization*, 60: 147-163.
- Singh, Dhairyaa & Garga Chatterjee
2017 The evolution of religious belief in humans: a brief review with a focus on cognition. *Journal of Genetics*, 96(3): 517-524.
- Sober, Elliot. & David S. Wilson
1998 *Unto Others: The Evolution and Psychology of Unselfish Behavior*. Cambridge: Harvard University Press.

-
- Sosis, Richard
2004 The adaptive value of religious ritual. *American Scientist*, 104: 166-172.
- Turner, Jonathan H. *et al.*
2018 *The Emergence and Evolution of Religion by Means of Natural Selection*. (Evolutionary Analysis in the Social Sciences). New York: Routledge.
- Wallace, Anthony F. C.
1966 *Religion: An Anthropological View*. New York: Random House.
- Williams, George C.
1966 *Adaptation and Natural Selection: A Critique of Some Current Evolutionary Thought*. Princeton: Princeton University Press.
- Wilson, David S.
2002 *Darwin's Cathedral: Evolution, Religion, and the Nature of Society*. Chicago: University of Chicago Press.
- Wilson, David S. & Edward O. Wilson
2008 Evolution 'for the good of the group'. *American Scientist*, 96: 380-389.
- Witzel, E. J. Michael
2012 *The Origins of the World's Mythologies*. New York: Oxford University Press.
- Zahavi, Amotz
1977 The testing of the bond. *Animal Behaviour*, 25: 246-247.
- ザハヴィ、アモツ／アヴィシヤグ・ザハヴィ
2001 『生物進化とハンディキャップ理論』大貫昌子（訳）東京：白揚社。

旅するマンドラゴラ伝承

山 中 由里子

(国立民族学博物館)

地面から引き抜く際にそのヒト型の根が出す叫び声を聞くと人間は死んでしまう。このような描写が現代のファンタジー小説や映画を通して一般にも広まっているため、マンドラゴラ（またはマンドレイク）は神秘的な力を有した空想上の植物と思われがちであるが、古代から鎮痛・鎮静・催淫などの薬効がある実際の植物として知られてきた。古代・中世ヨーロッパの医学書や博物誌などに表れるマンドラゴラは、今では「マンドラゴラ・オフィシナルム」という学名の付けられた、地中海沿岸に分布するナス科マンドラゴラ属の实在の植物と比定されている。この多年生草本植物の根はアトロピン系アルカロイドを含むため、副交感神経の抑制をもたらし抗コリン作用、幻覚誘発、催眠作用があり、摂取量によっては痙攣、錯乱、幻覚、活動亢進などの症状の末に死に至ることもある。薬としての貴重性と激しい毒性を相持つこの植物の採取法に関しては様々な伝承が、地中海のマンドラゴラの植生分布をはるかに超える地域に伝播した。

本年度はフランス国立科学研究センター（CNRS）、テクスト史研究所（Institut de recherche et d'histoire des textes）のイザベル・ドレランツ氏と、このマンドラゴラ伝承の伝播について共同研究を行った。ドレランツ氏がギリシア語、ラテン語、ヨーロッパ諸言語の百科全書や医学書のテキストと図像の分析を、山中がアラビア語、ペルシア語、中国語のテキストと図像の分析をそれぞれ担当し、植物学的・医学的知識と民間伝承—特に「犬を使ってマンドラゴラの根を抜く」という逸話—の伝播ルートと逸話の時代的変遷を明らかにした。さらに、ユーラシア大陸を横断した語りと、交易による人とモノ（薬としてのマンドラゴラ）の移動の相関関係について考察した。

成果の英文論文“*How to Uproot a Mandrake: Reciprocity of Knowledge between Europe, the Middle East, and China*”はソルボンヌ大学出版から2019年中に刊行予定である。

本論文にまとめた重要な発見の一つは、12世紀のペルシア語百科全書に見られるマンドラゴラに関する記述が、

先行研究では見落とされていた伝播過程の「ミッシング・リンク」であることが分かったことである。

さらに報告者は分析の対象を医学書や百科全書など、当時の「学術書」の中の記述だけにとどめず、「バヌー・サーサーン」（サーサーンの末裔）と呼ばれる放浪のペテン師集団のいかさまの手口を描いた暴露本や演劇作品にも注目し、13-14世紀のイスラーム世界において、放浪のいかさま師が伝承の普及と偽マンドラゴラの流通に大きく寄与したのではないかとすることを明らかにした。マンドラゴラは薬として珍重され、非常に高価であったため、植物の根をヒト型に加工したまがいものが流通していたようで、例えば13世紀シリアの著述家アル＝ジャウバリは、ペテン師どもがマンドラゴラ（アラビア語ではヤブルーフ）と称して高く売りさばいているのは、実はシクラメンの根をヒト型に彫って、再び土に埋め、しばらくして掘り起こした偽物であることを暴露している。

このように自然を細工した偽マンドラゴラは、19世紀末、20世紀初頭頃まで普及していたようである。イギリスでの調査では、オックスフォード大学のピット・リバーズ民族学博物館において、「偽マンドレイク」あるいは「マンドレイク擬き」の実物を確認することができた。

写真1-2に見られる1890年代にトルコやマケドニアで収集されたという「マンドレイクの根」は、顔、手足などが植物の根に彫り込まれているのがよくわかる。どことなく円空の仏像を思わせる。

写真3にある「類感呪術」の道具を展示したケースには、イギリスで1916年に「無名の労働者」によって発見されたという black briony のヒト型をした根の標本があった。こちらは加工されたというのではなく、自然にヒトの形をした状態で見つかり、魔術的な力を持つ「マンドレイク」と信じられたモドキである。

これらの「マンドレイク」の物的証拠がいまだに博物館に保存されていることが驚きであるが、具体的にどのような呪術的行為で使われていたかは、さらに調査をする必要がある。



写真1 オックスフォード、ピット・リバーズ博物館 展示ケース144 “Forms Suggested by Natural Shapes” 自然の形が暗示するもの



写真2 展示ケース144のアップ

左：トルコで Greville John Chester 牧師によって収集された「マンドレイク」（標本番号 1889.17.1）
 右：マケドニアで John Linton Myres によって収集された「マンドレイク」（標本番号 1896.44.1）



写真3 オックスフォード、ピット・リバーズ博物館 展示ケース61 “Sympathetic Magic”（類感呪術）

左手前：1891年12月に Greville John Chester 牧師によって寄贈された「マンドラゴラ」（標本番号 1891.43.1）
 左奥：1916年にオックスフォード郊外ヘディントンの労働者によって発見された black briony（プリオニア）の根。（標本番号 1933.51.66）¹⁾

薬としての有効性と、猛毒性と、さらに人との類感性を感じさせる形状（植物であるのに動物的である）という諸要素が重なることによって、マンドラゴラは古代から人々の想像力を刺激してきた。マンドラゴラに関する伝承の範囲が広いのは、その知識の伝播が書物を通してだけでなく、移動範囲の広い薬売りや放浪の民が媒介となって伝わったからではないかと推測できる。

注

- 1) それぞれ標本データベース上の写真は以下参照：
<http://objects.prm.ox.ac.uk/pages/PRMUID66096.html>
<http://objects.prm.ox.ac.uk/pages/PRMUID70952.html>

技術と接触

——中央アジア・クルグズスタンの墓碑調査から

吉 田 世津子

(四国学院大学)

1. はじめに

「パレオアジア文化史学」にて中央アジアにおける人間集団間の接触を考察するに当たり、筆者は死者の埋葬方法（墓制）に着目することの意義について触れた（吉田 2018: 23）。墓制は文化人類学だけでなく、考古学的にも「経済と社会構造」とそれに含まれる「人工物による集団・個人の表出」、「象徴行動」とそれに含まれる「副葬品、顔料、儀礼品を伴う埋葬」の研究に関わるものとして、重要である（McBrearty and Brooks 2000: 492）。本稿では引き続き、クルグズ（キルギス）人の墓制を取り上げる（中央アジアにおける墓制の歴史の変遷については藤本参照）（藤本 2018: 17-18）。まずはこれまでの墓地調査で明らかにしたことを確認しておきたい。

2017年度の「パレオアジア文化史学」調査において筆者は集団間接触を検討するため、墓の形態変化を取り上げた。その結果、変化を示す代表的な要素として、居住地変更による墓地移動・墓の材料（鉄柵の導入）・墓碑スタイル（肖像写真プレートの導入）の3点を挙げた。特に鉄柵と肖像写真プレートは、誰から導入したのか住民の認識は不明瞭なままであり、直接相まみえることのない、間接的な集団間接触の可能性について指摘した（吉田 2018: 28-32）。

これを受けて2018年度調査では肖像写真プレートに焦点を当て、墓地の観察調査ならびに聞き取りを実施した。なぜクルグズ人は肖像写真プレートの導入を選択したのか。またその選択からはどのような集団間接触の様相が見えてくるのか。本稿はこれらの問いを明らかにすることを目的としている。それでは本論に入る前に、筆者の研究手法について触れておく。

これまで筆者は北クルグズスタン（キルギス）の村落社会を対象に、文化人類学的な研究を行ってきた。その手法は現地でのフィールドワークであり、定性的な社会調査法である住民の日常生活への参与観察、クルグズ語による聞き取り調査で構成されている（大谷ほか 2013）。

フィールドワークは主にナルン州のクルグズ人一村落

を対象としてきたが、「パレオアジア文化史学」2018年度調査では、複数村落で墓地の観察調査を実施した（次節で詳述）。文化人類学的フィールドワークが直接の対面調査の可能な地理的範囲で行われる特性上、本稿が基礎にしている資料は極めて限定的なものである。だが「現代と過去のものの変化を相互参照」（野林 2017: 3）するための調査データを提供することで、集団間接触の研究に寄与することが可能と考える。

2. 調査概要

本稿は、筆者が2017年8月ならびに2018年8月に行ったフィールドワークに基づいている。その資料はナルン州およびチュイ州の合計14カ所で実施した、墓地の観察調査で収集された（図1参照）。また墓碑に関する聞き取りは、筆者が継続的にフィールドワークを実施しているナルン州コチコル地区一村落で行った。また首都ビシケク市にある墓碑銘製作店で肖像写真プレート製作過程の観察、製作者への簡単な聞き取りを実施した。各村落住民・各墓地被埋葬者の主な民族的帰属、ならびに宗教（〔 〕で表示）の内訳は以下の通りである。

- ①ナルン州コチコル地区クルグズ人〔ムスリム〕一村落
 - ・墓地4カ所
 - ・住民への聞き取り
- ②ナルン州コチコル地区中心地
 - ・クルグズ人他〔ムスリム〕墓地4カ所
 - ・ロシア人他〔正教徒〕墓地1カ所
- ③チュイ州ビシケク市
 - ・クルグズ人他〔ムスリム〕墓地1カ所
 - ・ロシア人他〔正教徒〕墓地1カ所
 - ・クルグズ人・ロシア人他軍務関係者〔ムスリム・正教徒〕墓地1カ所
- ④チュイ州ビシケク市近郊一村落
 - ・クルグズ人・ロシア人〔ムスリム・正教徒〕墓地

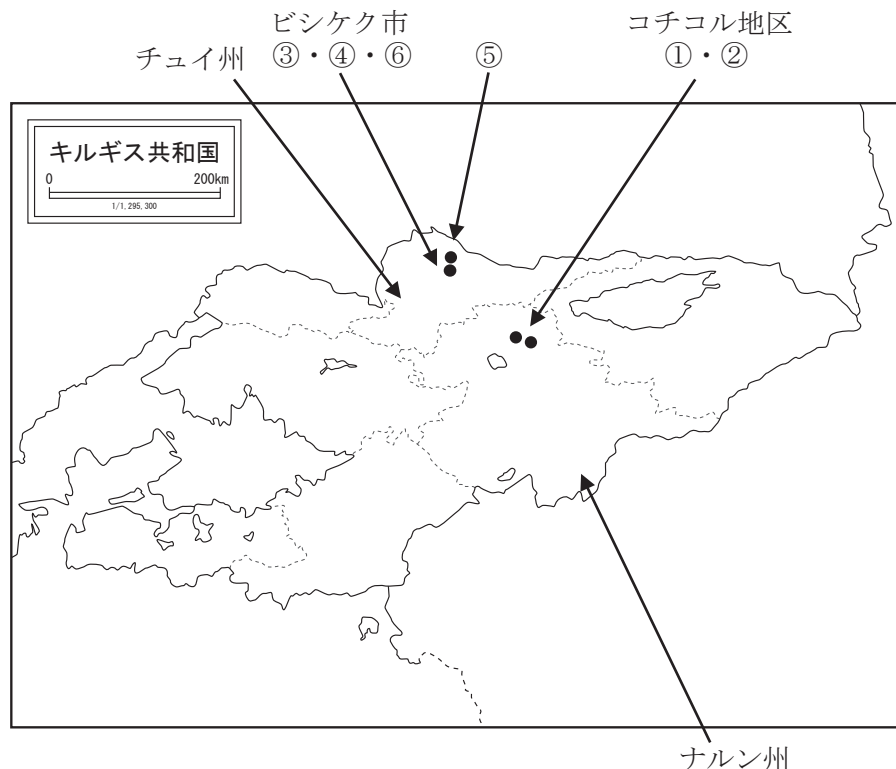


図1 クルグズスタン（キルギス共和国）

白地図（<http://www.freemap.jp/item/asia/kyrgyzstan.html>）を基に筆者作成

注：①～⑥は調査概要参照

1 カ所

⑤チュイ州アラミュデュン地区ロシア人〔正教徒〕一村落

- ・ロシア人・一部クルグズ人傷病兵〔正教徒・ムスリム〕墓地1カ所

⑥チュイ州ビシケク市商業中心地

- ・墓碑銘製作店1カ所
- ・製作者への聞き取り

①は上述した筆者の継続的なフィールドワーク対象地であり、住民の圧倒的多数はクルグズ人でムスリム（イスラーム信徒）である。②のコチコル地区中心地ではクルグズ人他ムスリムの埋葬された墓地4カ所、ならびにロシア人（ロシア正教徒）を中心とした墓地1カ所を観察調査した。後者には少数のユダヤ人も埋葬されていた。③の首都ビシケク市ではクルグズ人他ムスリムの埋葬された墓地1カ所、ロシア人他正教徒墓地1カ所、更には民族・宗教的に混在の兵士等軍務関係者墓地1カ所を観察した。

④はビシケク市近郊一村落の墓地で、クルグズ人（ムスリム）とロシア人（ロシア正教徒）はそれぞれ別個に固まり1つの墓地のなかで埋葬されていた。⑤はチュイ

州で最大級のロシア人（ロシア正教徒）村落の墓地だが、第二次世界大戦時に傷病兵となり病院で死没したクルグズ人が一部固まって埋葬されていた。最後に⑥はビシケク市内の墓碑銘（肖像写真プレート）製作店で、製作過程の観察ならびに製作者への簡単な聞き取りを行った。

①～⑤ではいずれも墓地の位置を確定するため、地理に詳しい現地住民（クルグズ人）を調査協力者とした。また⑥では墓碑銘製作者がロシア語話者であったため、クルグズ人を通訳・調査協力者とした。以下、本稿では①～⑥を調査地Noとして用いる。また考察には主に①・②・⑤・⑥で収集した資料を使用する。写真は全て筆者が撮影したものを掲載した。

最後に、クルグズ人の墓制について簡単に触れておく（以下、吉田随時参照）（吉田 2018: 26）。クルグズ人は基本的に死後3日目に、単独で個人墓に埋葬される。この時点では盛り土があるのみで、通常は翌年に鉄柵または日干しレンガ等で囲いが建てられ、名前・生没年、時に碑文も加えられた墓碑が設置される。近親者が同一年または数年の間に続いて死亡した場合、2～3名の死者に対して1つの囲いが建てられることもある。墓の建立には人手と資金が必要なため、状況によっては数年後に囲いと墓碑銘が設置されることもあるが、大多数は死後

1 年で建立される。墓地の囲いがあるかどうかは当該地域の状況により、農村地帯の古い墓地では基本的に囲いは見られない。それでは次節から本論に入りたい。

3. クルグズ人墓地の肖像写真プレート

1) ナルン州コチコル地区クルグズ人一村落

今回の調査対象である墓地 4 カ所のうち、初めて肖像写真プレートを墓碑に用いた墓が出現するのは、1950 年

代～74 年に使用されていた 2 カ所においてである（以下、墓地①-I および墓地①-II と表記、写真 1・2 参照）（墓地と年代については吉田参照）（吉田 2018: 24）。墓地①-I・II ともに、1966 年に死亡した住民の墓 2 基に設置された肖像写真プレートが初期のものと考えられる。写真 3 は墓地①-I にある男性の墓で、肖像写真プレート・名前・生没年の記された墓碑銘を拡大したのが写真 4 である。写真 5 は墓地①-II にある女性の墓で、肖像写真プレートを拡大したのが写真 6 である。



写真 1 墓地①-I (2017 年撮影)



写真 2 墓地①-II (2018 年撮影)



写真 3 墓 (1966 年) / 墓地①-I (2017 年撮影)



写真 4 写真 3 墓碑銘の拡大 (2017 年撮影)



写真 5 墓 (1966 年) / 墓地①-II (2018 年撮影)



写真 6 写真 5 肖像写真プレートの拡大 (2018 年撮影)

これらの墓に肖像写真プレートが設置された背景として、①の住民である70代女性・80代女性の2人は、「ちょうど写真（肖像写真プレートのこと、筆者注）が出始めていた」と言う。

2) ナルン州コチコル地区中心地

それでは、コチコル地区中心地の墓地ではどうだろうか。地区中心地とは、地区役場を始めとした様々な行政機関や工場・商店・飲食店が集中し、大規模なバザールを主催する地区きっての町である。

地区中心地住民の埋葬された墓地5カ所を調査したところ、最も古いといわれているクルグズ人墓地は墓と墓の間にわずかな隙間しか残っておらず、大変密集して建てられていた。また樹木と雑草が深く生い茂り迷路のようになっていたため、墓地全体を観察することは出来なかった。調査をした範囲では、1990年代以降の墓碑銘のみ確認した。だが地区中心地で2番目に古いというクルグズ人墓地1カ所では（以下、墓地②-Iと表記）、1969年に死亡した女性の墓に肖像写真プレートが設置されていた（写真7・8参照）。



写真7 墓地②-I（2018年撮影）

墓地①-I・II、墓地②-Iで観察した肖像写真プレートがどこで製作されていたのか、①での聞き取りによると70代男性は「ビシケクで、都市で注文して持ってきていた」と言う。同じく70代女性は、1970年代後半には「地区中心地に」肖像写真プレートを製作する「店があった」と言う。更に80代男性は、「村では作ってない。地区中心地やビシケクで作らせていた」と言う。だが地区中心地で肖像写真プレートを製作していた店は、1990年代には閉鎖されていた。では、ビシケク市ではどうだろうか。次節でビシケク市の肖像写真プレート製作店を取り上げる。

4. 写真焼付技術とその導入

ビシケク市で最大級の商業中心地の一角に、こぢんまりとした墓碑銘製作店が位置している（写真9・10）。ここでは2人の男性が働いており、1人は碑文を、1人が肖像写真プレートを製作している。2018年8月、肖像写真プレート製作者であるB.I.氏に製作工程の説明を受け、簡単な聞き取りを行った。



写真8 墓（1969年）／墓地②-I（2018年撮影）



写真9 肖像写真プレート製作店入り口（2018年撮影）



写真10 店舗内部（2018年撮影）

B.I. 氏（60 代）はアゼルバイジャン人の父とロシア人の母を持つムスリムで、40 年近く肖像写真プレートを製作してきた。彼はソ連時代、ビシケクにあった写真家の団体「写真合同サリュート」（Foto ob'edinenie “Salyut”）で、職業写真家として仕事をしていた。サリュートでは肖像写真プレートを注文製作しており、またその製法も教えていた。次第に B.I. 氏は肖像写真プレートに興味を持つようになり、サリュートで製法を学んだ。

1990 年にはサリュートから独立し、碑文を担当するロシア人同僚とともに現在の店舗を構えるようになった。B.I. 氏がサリュートにいた頃は 20 人弱が肖像写真プレート製作に従事していた。だが現在サリュートは存在せず、2018 年 8 月時点、ビシケク在住の製作者は彼 1 人だけという。

B.I. 氏によると、楕円形のプレートに肖像写真を焼き付ける技術はロシア語で「フォトケラミカ」（fotokeramika）という。『岩波 ロシア語辞典』では「陶磁器の写真焼付け」と訳されているが（和久利ほか編 1992: 2105）、B.I. 氏は「フォトケラミカ」は墓碑銘として始まったと言う。本稿では彼の言述に従い、墓碑銘に使用する楕円形の肖像写真プレート製作技術を指して、「写真焼付」（フォトケラミカ）と呼ぶことにする。

写真焼付は、薬品を塗った金属板（鉄）を電動炉で焼いて琺瑯のような白く滑らかな表面を作り、肖像写真を薬品で処理してそこに貼って、再び電動炉で焼き付ける技術である（写真 11・12）。必要な材料としてはロシアより金属・薬品・フィルム、クルグズスタンではガラス板を購入する。薬品にはモスクワの工場が生産する、大変高価なものもある。

ビシケクにどのように写真焼付技術が導入されたのか、B.I. 氏は、ソ連時代にレニングラードからやって来た 1 人のユダヤ人男性が始めたと言う。彼によると、1950 年代半ば～60 年代、何年かははっきりわからないが、クルグズスタンにやって来て気に入ったのか、ユダヤ人が住み着いた。そのユダヤ人がまたレニングラードに行って写真を勉強し、写真焼付技術を初めてビシケクに持ち込んだ。中央アジアで初めてのことで、カザフスタンにも無かった。写真焼付はモスクワやレニングラードでも 1960 年代から始まった、ソ連全体でそうだった。1930～40 年代にはまだ技術は出来ていなかった。レニングラードから始まったのだ、と言う。

以上のことから写真焼付は、ロシアで始まりユダヤ人がクルグズスタンへ導入した技術であった。肖像写真プレートがロシア由来のものであるならば、ロシア人墓地ではどのように導入されているのだろうか。チュイ州で最大級のロシア人村落の墓地を見てみたい。



写真 11 肖像写真プレート製作の一工程（2018 年撮影）



写真 12 肖像写真プレート製作の一工程（2018 年撮影）

5. ロシア人墓地の肖像写真プレート

1) チュイ州アラミューデューン地区ロシア人一村落

ソ連時代、⑤はチュイ州で最大のロシア人村落であり、当時はロシア人ばかりが住んでいたという。ロシア人以外にも、アゼルバイジャン人・カラチャイ人といった人々や、カフカズから来た人々も住んでいた。クルグズスタン独立後約 30 年になる現在では、クルグズ人も多数住み着いている。写真 13・14 は、墓地の遠景写真である（以下、墓地⑤と表記）。先述したが墓地⑤には、少数ではあるがクルグズ人も埋葬されている。ここでは名前・肖像写真から、ロシア人あるいはスラヴ系住民と判別できる墓碑銘を取り上げる。

墓地⑤で墓碑銘を観察したところ、写真 16 の右側の女性が 1963 年に死亡していることから、肖像写真プレートは初期のものと思われる。写真 17・18 の墓は、碑銘の上部が剥落したと推測される。というのも他の墓を観察したところ、いずれも墓碑は上部に肖像写真プレート、その下部に碑銘が配置されるのが一般的なスタイルである。

従って碑銘の上部が最初から空白だったとは考えにくく、おそらく設置された肖像写真プレートが剥がれ落ちたのだろう。碑銘は鉄板が錆びているため没年がはっきりしないが、1960年または1963ではないかと推測される。



写真 13 墓地⑤（2018 年撮影）

2) ナルン州コチコル地区中心地

前項でチュイ州最大のロシア人村落の墓地を取り上げた。では、ナルン州のロシア人墓地の観察調査からは、どのようなことが見て取れるのだろうか。第2節で触れ



写真 14 墓地⑤（2018 年撮影）



写真 15 墓（近親者3人の共同囲い）／墓地⑤（2018年撮影）



写真 16 写真 15 下部 2 人の肖像写真プレートの拡大（2018 年撮影）



写真 17 墓（1960 年または 1963 年？）／墓地⑤（2018 年撮影）



写真 18 写真 17 碑銘の拡大（2018 年撮影）

たが、2018 年 8 月、ナルン州コチコル地区中心地にあるロシア人墓地の観察調査を行った（以下、墓地②-II と表記）。地区中心地そばを流れるコチコル川の岸辺に位置する、小規模な墓地である（写真 19・20 参照）。

写真 21 の右側の墓は、楕円形の肖像写真プレート自体は剥落してしまっていて残っていない。だが碑銘部分からは、1968 年に死亡した人の墓であることが分かる。墓地②-II では 1960 年代～1970 年代の死者で、生没年と肖像写

真プレートの双方が確認できる墓は見られなかった。唯一 1960 年代の死者で肖像写真プレートが設置されていたことが観察できるのは、写真 21・22 の墓ぐらいである。

一方で、ロシア人の古い墓碑スタイルではないかと推測される墓を確認した。写真 23・24 は、1957 年に死亡した人の墓である。写真 24 から、ロシア正教の十字架の縦中央部分に、長方形の窪みが彫られていることが分かる。おそらくここに、何らかの絵か写真を取り付けてい



写真 19 墓地②-II（2018 年撮影）



写真 20 墓地②-II（2018 年撮影）



写真 21 墓（1968 年）／墓地②-II（2018 年撮影）



写真 22 写真 21 碑銘の拡大（2018 年撮影）



写真 23 墓（1957 年）／墓地②-II（2018 年撮影）



写真 24 写真 23 墓碑銘の拡大（2018 年撮影）

たのではないと思われる。墓碑・埋葬部分（盛り土）を囲う鉄柵は、後年設置されたものと考えられる。

6. 肖像写真プレートの普及と受容

1) 普及の経路

これまで①・②・⑤・⑥の観察調査ならびに聞き取りから、肖像写真プレートは1960年代初期にビシケクへ導入され、前半にはチュイ州で普及し始めたと考えられる。③のビシケク市のムスリム墓地でも、1960年代前半に死亡した人の墓に、肖像写真プレートが据え付けられていたことを確認している。このことから、チュイ州ではビシケクを中心にロシア人・クルグズ人等の間で、1960年代前半～半ばには肖像写真プレートの取り付けが始まったと考えてよいだろう¹⁾。

チュイ州ビシケク市で始まった肖像写真プレートの製作・設置は、1960年代後半以降、ナルン州コチコル地区へ広がっていた。筆者が観察した範囲では、いずれも1966年以降の死者の墓に取り付けられていた。チュイ州・ビシケク市同様に、クルグズ人・ロシア人ともにおよそ同時期に導入されていったと思われる。①～⑥での調査の限りにおいて、時間的には肖像写真プレートの普及は、中央から地方へ進展していったといえる。

2) 普及の経緯とその背景

それでは実際に肖像写真プレートを取り付けてきた人々は、そのきっかけをどのように捉えているのだろうか。まずB.I.氏はロシア人の間で肖像写真プレートが広まったことに関して、「誰かが取り付けただのを見て、他の人も真似て取り付け始めたんだ」と言う。①の住民である70代男性も、「みんなあちこちを見て来るようになった、ビシケクやロシアの中央（首都・中心都市の意、筆

者注）を見て来たんだ」（出かけた先で肖像写真プレートを他の人が取り付けているのを見て真似するようになった、の意）と言うのである。

上述のことから分かるのは、都市住民であるB.I.氏も農村住民である男性も、出かけた先で「見た」ことを持ち帰って「真似た」と認識していることである。では、肖像写真プレートを「見て真似た」のは、どのような人物と考えられるだろうか。ここでは墓地①-I・IIの墓碑銘建立の背景を探ってみたい。

墓地①-Iで取り上げた写真3・4の墓は、死者の息子が建立した。彼はコチコル地区役場に勤務しており、農村住民から見れば出世株だったといえる。次に墓地①-IIの女性は（写真5・6）、①の住民である70代女性によると、長男が当時ビシケク市在住で内務省に勤務しており、警察の少佐であった。またもう1人、やはり内務省に勤務していた息子がいたと言う。新しいモノを導入・採用する人についてロジャーズは、「初期の採用者」の属性として「社会的な地位が高く、社会的流動性が高」いことに触れている（Rogers 2007: 252）。死者本人ではなく墓を建立する人物、すなわち肖像写真プレートを選択・採用する立場にある人が、一定の社会的地位を有していたことは他の例からも窺える。

写真25・26は、墓地①-IIにある1967年に死亡した男性の墓で、①では最初の横顔像付墓碑である。すでに横顔像は剥落しているが、薄く取り付けられた痕が残っているのが見て取れる。70代男性によると、死者の男性はナルン州の州都・ナルン市で軍事委員部に勤務していた。彼の男性キョウダイの妻はビシケク市で工場長をしており、彼女がビシケクで横顔像を製作させて持って来たと言う。

これらのことから墓碑を建立する立場にあった人々はいずれも村落外部に勤務先を持ち、うち2例では1960年代という時期に首都に住んでいた。こうした背景から、



写真 25 横顔像付墓碑（1967年）／墓地①-II（2018年撮影）



写真 26 写真 25 碑銘の拡大（2018年撮影）

ビシケク市で普及しつつあった肖像写真プレートという新しいモノを、「見て真似る」機会をより多く持つ人々であったといえよう。

3) なぜ肖像写真プレートは受容されたのか

上述したように肖像写真プレートを最初に新規採用したのは、村落外部と交流の深い社会的地位のある人々と考えられる。だがその後、今日に至るまで、多数の人々に肖像写真プレートは採用されてきた。なぜ肖像写真プレートは受容され採用され続けてきたのだろうか。

その理由について①の70代女性と80代女性は、「肖像写真があれば墓が誰のものかわかる。碑銘があれば名前がわかる。誰の子どもなのかわかるからよ。誰が誰かわからなければ、クルアーン暗誦ができないの」と言う。また70代男性も、「墓に行きあった時、墓碑があればクルアーン暗誦ができる。クルアーンが暗誦される時は某の息子（娘も含む、筆者注）某へと捧げられるんだ。墓碑を見てクルアーンを暗誦するんだよ」と言うのである。

クルアーン暗誦とは、アッラーに死者の平安と冥福を祈り、葬式・忌日・死者供養で章句を暗誦することである（吉田 2004: 227）。クルグズ人にとって死者のためのクルアーン暗誦は非常に重要なことであり（詳細は吉田参照）（吉田 2004）、80代男性によると「クルアーンというのは単純に暗誦されることはない、必ず誰かに捧げられて暗誦される。父の名前、本人の正確な名前を言わなければならない。クルアーン暗誦のためには必ず父の名前を見つけ出さなければならない」のである。

これらのことから肖像写真プレートの採用は、クルグズ人のイスラーム的脈絡における選択だったことが指摘できる。彼らのイスラーム信仰上の論理に合致していたからこそ、1970年代以降、墓碑に肖像写真プレートを取り付ける人々が大多数となっていったのである。しかし

イスラームでは偶像崇拝を厳格に禁止しており、肖像画・肖像写真を墓に取り付けることは、本来ならばシャリーアに反している。それが「クルアーン暗誦」という脈絡で幅広く受容された背景には、ソ連の反宗教政策の強い影響があることは間違いないであろう。このことは、現在進行している墓碑スタイルの変化から窺える。

クルグズスタンでは独立後、イスラーム復興が急速に進展してきた（吉田 2008）。2000～2010年代に①では、1974年以降に使用している墓地で、肖像写真プレートを取り付けない碑銘のみの墓が増加している。②のコチコル地区中心地でも、現在使用しているクルグズ人（ムスリム）墓地1カ所で（以下、墓地②-Ⅲと表記）、碑銘のみの墓が増えている（写真27）。墓地②-Ⅲではそれだけでなく、生没年もない名前だけの碑銘の墓まで出現している（写真28）。だが生没年のない名前だけの墓碑は、まだ少数である。この墓碑スタイルが普及するかどうかに関しては、今後も注意が必要である。

7. 2つの普及過程—肖像写真プレートと採用者

1) 時間から見た普及過程

前節で考察した肖像写真プレートの普及過程について、再度検討してみたい。まず写真焼付技術はロシア・レニングラードを起点とし、クルグズスタン・ビシケクへと持ち込まれた。その技術によって生産された製品＝肖像写真プレートは、ビシケクの写真合同サリュートから同じくビシケク、チュイ州のビシケク市近郊地域、更にはナルン州へと普及していった（図2参照）。技術と製品の時間的な普及過程を見れば、前節で述べたように、全ソ的にも「中央から地方へ」という経路をたどったことが明らかである。だが、どのようにして製品を知り手に入れたのかという観点から見ると、その普及の経路は



写真 27 墓（2018年）／墓地②-Ⅲ（2018年撮影）



写真 28 墓（2018年に死没と推定）／墓地②-Ⅲ（2018年撮影）

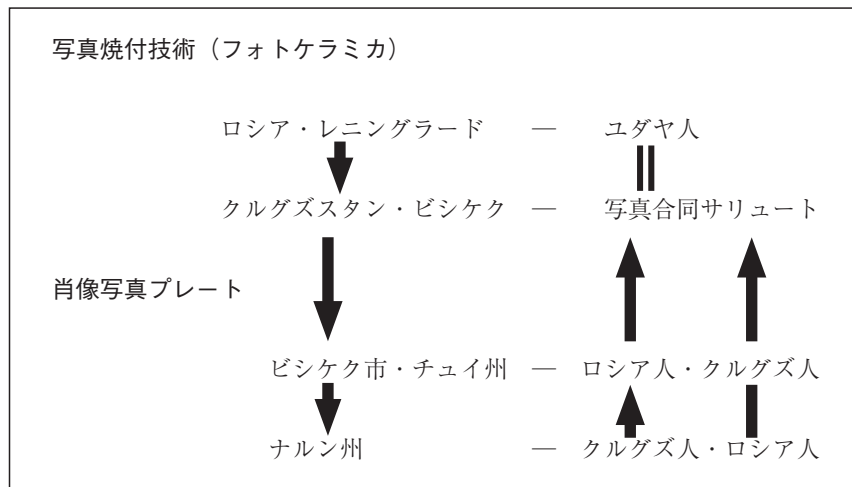


図2 写真焼付技術と肖像写真プレートの普及経路

逆となる。

前節で肖像写真プレートを採用したきっかけについて、ビシケク住民であるB.I.氏も村落住民である男性も、どちらも他の人を「見て」「真似た」と語っていることを挙げた。ナルン州のクルグズ人もチュイ州のロシア人も、どちらも中央から流れて来る製品をただ受動的に受け入れたのではなく、積極的に取り込み採用していたことが窺える。

1960年代以降、写真焼付技術がビシケクにもたらされ、写真合同サリユートで注文販売に応じるようになったとB.I.氏は言う。おそらく1970年代後半にはコチコル地区同様に、クルグズスタンの諸州・諸地区で肖像写真プレートを製作する店があったものと思われる。確かに肖像写真プレートを取り付け始めたのは、クルグズスタンの中央であるビシケクやチュイ州の住民であろう。だがそれを普及させたのは、「地方から中央へ」、あるいは「外部へ」と出かけて新しい知識やモノに触れ、「見て真似て」取り入れた人々なのである。

先述したように、技術と製品の時間的な普及過程という観点から見ると、それは「中央から地方へ」という経路をたどっていた。だが実際に製品を普及させたのは、「地方から中央／外部へ」という経路をたどる、「採用者」だったといえる。

2) 採用者から見た普及過程

上述のことから肖像写真プレートの普及過程を明らかにするには、技術と製品だけでなく、それを採用する「人」について考える必要がある。つまり、どのような「人」をたどって製品＝モノに関する知識と経験が流れてゆくのか、その経路が問題となろう。肖像写真プレート＝モノの普及過程を採用者＝人／集団という観点から見

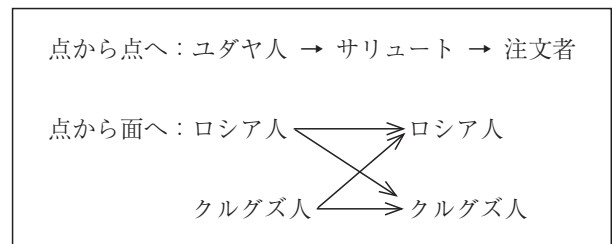


図3 採用者から見た肖像写真プレートの普及過程

た場合、最初は「点から点へ」という経路をたどっていることが指摘できよう（図3参照）。クルグズスタン・ビシケクに写真焼付技術を持ち込み肖像写真プレートを製作したのは、1人のユダヤ人という「点」であった。それが職業写真家の団体である写真合同サリユートという「点」へ、更には注文者という「点」へとつながっていた。

だが製品の注文者という「点」は、そのまま「点」であり続けるわけではない。前節で触れたが、①において肖像写真プレートを初期採用する立場にあったクルグズ人は、いずれもソ連時代に公務員・警察・内務省役人・工場長と、共産主義建設の指導的立場にいる人々であった。つまり彼らは①の一般的な住民よりも、ロシア人等他民族出身者との接触頻度がより高い人々だったといえよう。そうした彼らを先頭に後続のクルグズ人が、ロシア人や同じクルグズ人の肖像写真プレート採用者を「見て真似る」ことで、製品は「点から面へ」と拡大普及していったと考えられるのである（図3参照）。

8. おわりに

クルグズスタンにおける肖像写真プレートの普及過程を採用者という観点から検討した場合、現地住民の言述

からは「見る」・「真似る」、すなわち「観察と模倣」が強調されていることを指摘してきた。つまり、クルグズ人が直接ロシア人から、あるいはロシア人が直接クルグズ人からといった人／集団間の直接的な接触よりも、間接的な接触が生じていたことが窺えるのである。

「パレオアジア文化史学」2017 年度調査では、墓囲いの鉄柵と今回取り上げた肖像写真プレートの使用に関して、「誰から来たのか」がほぼ意識されていないことを報告した（吉田 2018: 32）。2018 年度の肖像写真プレート調査からは、同様に「誰から」ということよりも、自身の側の「観察し模倣する」意識の強いことが明らかであった。

以上のことから写真焼付技術と肖像写真プレート製品の普及過程において、クルグズ人集団内／外、ロシア人集団内／外での「観察と模倣」という、間接的な集団間接触が浮かび上がる。新しいモノやその知識の獲得・採用と普及は、直接的な接触だけでなく、「観察と模倣」による間接的な接触によっても可能なのである。また肖像写真プレートの「観察と模倣」による採用は、間接的な接触が必ずしも消極的な行為を意味するわけではないことを示している。「観察と模倣」は、積極的な集団間接触ともいえるのである。

注

- 1) 2018 年の拙稿で 1937 年に死亡したスラヴ系女性の肖像写真プレートを取り上げた（吉田 2018: 31-32）。B.I 氏によると、第二次世界大戦後にロシアから親族がビシケクにやって来て、墓碑を製作し直すことがよくあったという。そのため 1930～50 年代の没年の肖像写真プレートは、1960 年代以降に製作され設置されたものである。1937 年死亡の女性の肖像写真プレートも、1960 年代以降に製作されたものだろうと B.I 氏は語っていた。ここで修正・補足しておく。

参考文献

- McBrearty, S. and A. S. Brooks
 2000 The Revolution That Wasn't: A new interpretation of the origin of modern human behavior. *Journal of Human Evolution*, 39: 453-563.
- Rogers, E.
 2007 『イノベーションの普及（第 5 版）』（三藤俊雄訳）東京：翔泳社。
- 大谷信介・木下栄二・後藤範章・小松洋編著
 2013 『新・社会調査へのアプローチ論理と方法』東京：ミネルヴァ書房。
- 野林厚志
 2017 「計画研究 B01 班のねらい」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2016 年度研究報告 人類集団の拡散と定着に伴う文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』pp.1-4.
- 藤本透子
 2018 「中央アジアの草原地帯における墓制の展開—カザフスタンでの調査から」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2017 年度研究報告 人類集団の拡散と定着に伴う文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』pp.16-22.
- 吉田世津子
 2004 『中央アジア農村の親族ネットワーク—クルグズスタン・経済移行の人類学的研究』東京：風響社。
 2008 「クルグズスタン（キルギス）北部農村のモスク開設—中央アジア・イスラーム復興に関する調査報告」松本光太郎編『中国ムスリムの宗教的・商業的ネットワークとイスラーム復興に関する学際的共同研究』（平成 17 年度～平成 19 年度科学研究費補助金・基盤研究 B・研究成果報告書）pp.185-191.
- 2018 「墓の形態変化と集団間接触に関する一考察—中央アジア・クルグズスタン調査から」野林厚志編『パレオアジア文化史学 B01 班 2017 年度研究報告 人類集団の拡散と定着に伴う文化・行動変化の文化人類学的モデル構築』pp.23-33
- 和久利誓一・飯田規和・新田実編
 1992 『岩波 ロシア語辞典』東京：岩波書店, p.2105.

研究計画 B01 班 2018 年度研究活動

1. B01 班主催の学会セッション

CHAGS XII (12th International Conference on Hunting and Gathering Societies)

Schedule: July 23–27, 2018

Venue: Universiti Sains Malaysia, Penang

Session Title: Comparative studies of hunter-gatherers in Asia: from nomadic to sedentary lifestyles for long-term periods (P15)

Convenor: Kazunobu Ikeya

Abstract: Hunter-gatherers in Asia have some characteristics: they have adapted to diversified circumstances from the far north to tropical zones, and have contacted and maintained relationships with neighbours. The continuity, social changes, and historical transitions from nomadic to sedentary life of hunter-gatherers in Asia from prehistory to the present will be discussed.





2. B01 班主催のシンポジウム・講演会

(1) シンポジウム「バスケットリーと人類」(2018年11月3日)を開催しました

日 時：2018年11月3日(土・祝) 13:30～16:20

会 場：国立民族学博物館 第4セミナー室

主 催：大阪日本民芸館・新学術領域研究(パレオアジア文化史学)「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築」(課題番号 16H06411、代表：野林厚志)

(2) Dr. Yu Pei-Lin 氏の講演 & 研究懇談会(2019年1月5日)

日 時：2019年1月5日(土) 14:00～16:30

会 場：国立民族学博物館 第7セミナー室

講演者：Dr. Yu, Pei-Lin (Boise State U. Department of Anthropology)

講演タイトル：Using Ethnoarchaeology of Pumé Forager-Gardeners and the Binford Hunter-Gatherer Database to Investigate the Case of the ‘Vanishing Farmers’ of the Amazon”.

3. B01 班主催研究会

(1) B01 南アジア班 2018 年度第 1 回研究会

「線具」からみる生態資源利用について-3

日 時：2018年5月7日(月) 13:00～18:00

出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美

場 所：国立民族学博物館 第1演習室

内 容：アッサム地域のタケに関する道具利用について、現地調査でのデータの精査および、その利用の特徴について考察をおこない、今後の研究の展望に関する議論をおこなった。

(2) B01 南アジア班 2018 年度第 2 回研究会 「線具」からみる生態資源利用について-4

日 時：2018年7月7日(土)～9日(月)
10:00～17:00

出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美

場 所：国立民族学博物館 第1演習室

内 容：昨年度に引き続き、現生人類の素材・道具利用について「線具」に焦点あて、現地調査の精査および民族誌の渉猟をおこない、植物素材による「線具」製作と利用の実態を検討し、今後のパレオアジア文化史学の研究調査方針について議論をおこなった。

(3) B01 南アジア班 2018 年度第 3 回研究会 「線具」からみる生態資源利用について-5

日 時：2018年9月16日(日) 10:00～17:00

出席者：上羽陽子、金谷美和、中谷文美

場 所：国立民族学博物館 第1演習室

内 容：現生人類の素材・道具利用のなかでも特に糸やヒモなどの線状物、バスケットリーに焦点をあ

て、それらの製作技術や用途の特徴を明らかにし、生態環境から得られる資源を最大限に活用し、暮らしのなかの用途に適した多様な線具を製作している要因について議論をおこなった。

4. B01 班班会議

(1) 第1回班会議

日 時：2018年7月2日(月)

場 所：国立民族学博物館

参加者：B01 班研究分担者、研究協力者、招待研究者

(2) 第2回班会議

日 時：2019年2月24日(土)

場 所：国立民族学博物館

参加者：B01 班研究分担者、研究協力者、招待研究者

5. B01 班共催の研究会

(1) A01/A02/B01 合同研究会：温帯更新世の狩猟採集民の実像を求めて（2018年10月7日）

日 時：2018年10月7日(日) 13:00～17:00

会 場：国立民族学博物館（2階 第3セミナー室）

内 容：「温帯更新世の狩猟採集民の実像を求めて——寒帯・温帯・熱帯での狩猟採集民の資源利用と移動・移住パターンの比較——」

企画の意図：温帯更新世の狩猟採集民（とくに日本列島）の資源利用と移動・移住モデルについては、限られた考古資料で語っている現状のなか、周辺地域や隣接分野からの傍証を利用することから新たなモデルを構築していくことが求められている。そこで今回は、温帯更新世の狩猟採集民研究の現状と課題を紹介したあとに、温帯以外の更新世の狩猟採集民研究、民族誌研究を参照することから、温帯での狩猟採集民の資源利用と移動・移住パターンに関する提案をしていくことがねらいである。（A01 高倉純および B01 池谷和信）

(2) A01/B01 合同研究会：中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化（2018年10月20日）

中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化——人類学と考古学の接点から

日 時：2018年10月20日(土)

場 所：国立民族学博物館 4階 第3演習室

〈研究会の趣旨〉

中央アジアの人類学と考古学のフィールド・データをもとに、集団接触によっていかなる社会変容が生じるのか、それが物質文化にはどのように現れるのかをモデル化する。人類学側からは、集団間の接触にともなう、居住形態（移動・定住）、もの作りの技術の継承・伝播、集団の象徴としての墓の形態などに現れた変化を示す。考古学側からは、現在進められている発掘調査の成果を報告するとともに、人類学データの考古学への具体的な応用可能性について検討する。全体として、前回の研究大会で提起された二重波モデルを念頭に置きつつ議論を深める。

〈プログラム〉

10:00～10:10

趣旨説明 藤本透子（民博）

10:10～11:00

中央アジア草原地帯における集団接触と居住形態の変化（人類学）

藤本透子（民博）

11:00～11:50

中央アジアにおける後期旧石器研究の諸問題（考古学）

国武貞克（奈良文化財研究所）

13:10～14:00

民族誌の植物考古学への応用：薬用植物にかんするケーススタディ（考古学）

赤司千恵（東京大学総合研究博物館）

14:00～14:50

陶器の天然灰釉「イシコール」の変遷と集団接触（人類学）

菊田悠（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）

15:10～16:00

技術と接触——中央アジア・墓碑をめぐる人の関係（人類学）

吉田世津子（四国学院大学社会学部）

16:00～17:00

総合討論 司会：野林厚志（民博）

研究計画 B01 班 2018 年度研究業績

出版物 Publications

編著書 Books

- R. Fleming Puckett and K. Ikeya (eds.) (2018) *Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates*, Senri Ethnological Studies 99, National Museum of Ethnology.
- K. Ikeya (2018) *Beads in the World*. National Museum of Ethnology.

雑誌論文 Journal articles

- Yamanaka, Y. (2019) Authenticating the Incredible: Comparative Study of Narrative Strategies in Arabic and Persian 'ajā'ib Literature. *Jerusalem Studies in Arabic and Islam* 45. (印刷中)
- 二文字屋脩・園田浩司・彭宇潔 (2019) 「第 12 回国際狩猟採集社会会議 (CHaGS-12) 参加報告」『文化人類学』83(4): 3-8。
- 大西秀之 (2018) 「モノとヒトが織りなす技術の人類誌／史：考古学の可能性をめぐる民族誌フィールドからの応答」『現代思想』46(13): 170-180。
- 山田仁史 (2018) 「(書評) 池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史：自然・隣人・文明との共生』東京、東京大学出版会、2017 年」『文化人類学』83(1): 125-129。
- 山田仁史 (2018) 「蟹と蛇：日本、東南亜和東亜之洪水和地震的神話と伝説」王立雪 (訳)、『民俗研究』2018 年第 6 期 (総第 142 期): 75-84、済南：山東大学『民俗研究』編集部。
- 卯田宗平 (2019) 「カワウの人工繁殖をめぐる漁師の技法と生殖介入の動機—中国雲南省洱海における鵜飼い漁師たちの繁殖技術の事例から」『国立民族学博物館研究報告』43(4): 555-668。
- 卯田宗平 (2018) 「鵜飼のウミウの繁殖生態と鵜匠による技術の安定化—宇治川の鵜飼における 4 年間の記録から」『生き物文化誌学会ビオストーリー』29: 96-105。
- 野林厚志 (2018) 「エスニシティを可視化する手段としての衣服—台湾原住民族サキザヤ族の民族認定を事例として—」『国立民族学博物館研究報告』42(4): 379-409

書籍掲載論文 Book chapters

- R. Fleming Puckett, K. Ikeya, Robert K Hitchcock (2018) Introduction. In R. Fleming Puckett and K. Ikeya (eds.) *Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates*, Senri Ethnological Studies 99, pp.1-28, National Museum of Ethnology.
- K. Ikeya (2018) Settlement Patterns and Sedentarization among the San in the Central Kalahari (1930-1996) In R. Fleming Puckett and K. Ikeya (eds.) *Research and Activism among the Kalahari San Today: Ideals, Challenges, and Debates*, Senri Ethnological Studies 99, pp.177-196, National Museum of Ethnology.
- 大西秀之 (2018) 「プロセス学派とポストプロセス学派の相克をめぐる人類学的布置」『ムカシのミライ：プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話』阿子島香・溝口孝司 (監修) 125-149、勁草書房。
- Yamanaka, Y. (2018) The Tear-bottle Quest: European Perception of the Biblical Orient and Iranian Shiite Ritual. Regina F. Bendix, D. Noyes eds., *Terra Ridens*, Dortmund, Verlag für Orientkunde, pp.152-172.
- 山中由里子 (2018) 「イスラームにおける地獄」西山 克編『地獄への招待』pp.89-108、京都：臨川書店。
- 山田仁史 (2018) 「ヴィルヘルム・シュミット」岸上伸啓 (編)『はじめて学ぶ文化人類学：人物・古典・名著からの誘い』：9-15、京都：ミネルヴァ書房。
- 山田仁史 (2018) 「カール・フローレンツの比較神話論」石井正己 (編)『外国人の発見したニッポン』(アジア遊学；219): 37-54、東京：勉誠出版。
- 山田仁史 (2018) 「文庫版解説 ささげられる人体」高木敏雄『人身御供論』(ちくま学芸文庫): 287-299、東京：筑摩書房。
- 山田仁史 (2018) 「構造人類学」(pp.105-106)、「口頭伝承」(p.107)、「神話学」(p.168)、「ブリコラージュ」(p.274) 能智正博 (編集代表) 香川秀太／川島大輔／サトウタツヤ／柴山真琴／鈴木聡志／藤江康彦 (編)『質的心理学辞典』東京：新曜社。

その他の出版物 Other publications

- 池谷和信 (2019)「ビーズに秘められた可能性(5) 鉄ビーズ」『Bead Art』Vol.28、64-67 頁、The JAPAN BEAD SOCIETY
- 池谷和信 (2018)「タカラガイの道一貝に刻まれた人類史一」『国立民族学博物館コレクション 貝の道』、41-45 頁、神奈川県立近代美術館。
- 池谷和信 (2018)「The Cowrie Road: Shells Inscribed by Human History」『国立民族学博物館コレクション 貝の道』、46-49 頁、神奈川県立近代美術館。
- 池谷和信 (2018)「ビーズに秘められた可能性(4) ガラスビーズ」『Bead Art』Vol.27、54-57 頁、The JAPAN BEAD SOCIETY。
- 池谷和信 (2018)「ビーズに秘められた可能性(3) 貝殻」『Bead Art』Vol.26、62-65 頁、The JAPAN BEAD SOCIETY。
- Ueba, Y. 2018 From Line to Form. National Museum of Ethnology (ed.) *National Museum of Ethnology Exhibition Guide*, National Museum of Ethnology, pp.162-165 (2018.12.28)
- Ueba, Y. 2018 Beadworks of Rabari society protecting infants. Ikeya, K, National Museum of Ethnology (ed.) *Beads in the World*, National Museum of Ethnology, pp.74-75 (2018)
- 卯田宗平 (2018)「ドメスティケーションが生起する条件一しない／できない事例から考える」『民博通信』163: 14-15。
- 卯田宗平 (2018)「想像界の生物相一カワウソ老いて河童になる?」『月刊みんぱく』42(10): 14-15。
- 卯田宗平 (2018)「持ち運びが便利な双胴船」『文部科学教育通信』ジアース教育新社、第 436 号、1 頁。
- 彭 宇潔 (2018)「アフリカ熱帯雨林の狩猟採集民とたばこ」『月刊みんぱく』2018 年 7 月号: 10-11、国立民族学博物館。
- 山田仁史 (2018)「異文化へと向かう比較論と人間に対する洞察: 東西の意外な接点に、読者は眼を開かれることだろう [書評: 細田あや子著『生と死と祈りの美術』三弥井書店]」『図書新聞』3347 号 (2018 年 4 月 14 日付)。
- 野林厚志 (2018)「旅・いろいろ地球人 パレオアジア文化史④ 魂と通じる道具」『毎日新聞』(2018.4.28 夕刊)。
- 野林厚志 (2018)「旅・いろいろ地球人 パレオアジア文化史③ 運搬具と人類の移動」『毎日新聞』(2018.4.21 夕刊)。
- 野林厚志 (2018)「旅・いろいろ地球人 パレオアジア文

化史② 石器文化の境界線」『毎日新聞』(2018.4.14 夕刊)。

野林厚志 (2018)「旅・いろいろ地球人 パレオアジア文化史① 旧人から新人へ」『毎日新聞』(2018.4.7 夕刊)。

講演・学会発表 Conference presentations

主宰 Organized conferences

Dr. Pei-Lin Yu 講演会 “Using Ethnoarchaeology of Pumé Forager-Gardeners and the Binford Hunter-Gatherer Database to Investigate the Case of the ‘Vanishing Farmers’ of the Amazon” 於: 国立民族学博物館第 7 セミナー室、2019 年 1 月 5 日。

K. Ikeya (2018) ‘Hunter-gatherers and civilization in Asia’ *CHAGS12 (12th Conference on Hunting and Gathering Societies)* School of Social Science, Universiti Sains Malaysia, Penang.

Ōnishi, H. (2018), Contributing to recent Ainu issues: possibilities through anthropological and archaeological studies (P23). co-organizer and chairperson. *CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies) XII*, Universiti Sains Malaysia (Pulau Pinang, Malaysia), July 23-27, 2018.

『シンポジウム バスケットリーと人類』、主催: 大阪日本民芸館・新学術領域研究 (パレオアジア文化史学)「人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築 (課題番号 16H06411、代表: 野林厚志)、於: 国立民族学博物館第 4 セミナー室、2018 年 11 月 3 日。

B01・A01 合同研究会『中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化一人類学と考古学の接点から』於: 国立民族学博物館 4 階第 3 演習室、2018 年 10 月 20 日。

A01/A02/B01 合同研究会「温帯更新世の狩猟採集民の実像を求めて一寒帯・温帯・熱帯での狩猟採集民の資源利用と移動・移住パターンの比較一」、国立民族学博物館 (2018 年 10 月 7 日)

招待講演 Invited presentations

山中由里子 (2018)「歴史叙述の解体と再構成: 中世イスラーム世界の博物誌におけるアレクサンドロス伝承」西洋史研究会大会、東北大学、2018 年 11 月 18 日。

Nobayashi, Atsushi. (2018) The Authentic Change of Material Culutre of the Indigenous People in Taiwan. *The 3rd World Conference of Taiwan Studies*, Academia Sinica, 2018, 09.07. (Proceeding: The

Authentic Change of Material Culutre of the Indigen-
ous People in Taiwan. Taiwan in the Globalized
World: The relebance of Taiwan Studies to the
Social Sciences and Humanities, *The 3rd World
Conference of Taiwan Studies*, Academia Sinica)

口頭・ポスター発表等 Oral and poster presentations

池谷和信 (2019)「アジアの先住民族：現状と人権問題」、
桃山学院大学国際教養学部開設10周年記念シンポジウ
ム「アジアの先住民族と人権—フィリピン ママヌワ
族の方をお招きして—」、桃山学院大学 (2019 年 2 月
16 日)

K. Ikeya (2019) Hunter-gatherers and Beads in Africa
and Asia. International Symposium “Integrated
Anthropology from Genetics to Ecology, Biodiver-
sity-Conservation of Organisms, Cultures, and
Ethnicities” 先導科学共働プログラム「遺伝学から生
態学、生物多様性に至るまでの統合人類学の構築」、総
合研究大学院大学葉山キャンパス、2019 年 2 月 1 日。

S. Nakai, and K. Ikeya (2018) ‘Sedentarism and the
continuity of the relationship between hunter-gath-
erers and farmers in Thailand.’ *CHAGS12 (12th
Conference on Hunting and Gathering Societies)*
School of Social Science, Universiti Sains Malaysia,
Penang.

池谷和信 (2018)「素材から見たビーズの道」みんなく友
の会・オリ美友の会相互企画トーク・イベント、岡山
市立オリエント美術館、2018 年 11 月 25 日。

池谷和信 (2018)「ビーズ展示からみえるホモサピエンス
像」世界のビーズ講座特別版「文化のビーズ、文明の
ビーズ—縄文、エジプト、現代社会」、岡山市立オリ
エント美術館、2018 年 11 月 4 日。

池谷和信 (2018)「趣旨説明」世界のビーズ講座特別版
「文化のビーズ、文明のビーズ—縄文、エジプト、現
代社会」、岡山市立オリエント美術館、2018 年 11 月 4
日。

池谷和信 (2018)「人間にとってビーズとは何か？一つ
なが・かざる・みせる」世界のビーズ講座、岡山市立
オリエント美術館、2018 年 10 月 27 日。

池谷和信 (2018)「民族誌からみた技術、資源利用、行動
圏」パレオアジア文化史学 A01/A02/B01 合同研究会
「温帯更新世の狩猟採集民の実像を求めて—寒帯・温
帯・熱帯での狩猟採集民の資源利用と移動・移住パ
ターンの比較—」、国立民族学博物館、2018 年 10 月 7
日。

池谷和信 (2018)「タカラガイと貝の道」神奈川県立近代

美術館葉山 (2018 年 8 月 4 日)

池谷和信 (2018)「アフリカのビーズとグローバルヒスト
リー」日本アフリカ学会第 55 回学術大会、北海道大
学、2018 年 5 月 26 日。

池谷和信・野林厚志 (2018)「民族学からみる狩猟採集社
会同士の接触と交替」(池谷和信・野林厚志)日本考古
学協会第 84 回総会研究発表要旨、pp.120-121 明治
大学、2018 年 5 月 26-27 日。

Ikeya, K. (2018) Human dispersal and adaptation for
livelihood: Hunting style changes with dogs. *The
International Workshop, Cultural History of Paleo-
Asia*, Research Institute for Humanity and Nature,
Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, p.33).

池谷和信 (2018)「長期間におけるアジアの狩猟採集民の
社会変化と持続性」『文部科学省科学研究費補助金・新
学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5
回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日 (予稿
集 42 頁)。Ikeya, K. (2018) Social changes and con-
tinuity among hunter-gatherers in Asia for the long
term. *The 5th Conference on Cultural History of
PaleoAsia*, Nagoya University, Nagoya, May 12-13,
2018 (Proceedings, p.43).

門脇誠二・池谷和信 (2018)「中部旧石器時代から上部旧
石器時代への居住移動行動の変遷：南ヨルダン、カル
ハ山域の資源利用に注目して」『文部科学省科学研究費
補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文
化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-
18 日 (予稿集 2-3 頁)。Kadowaki, S. and K. Ikeya
(2018) Changes in residential mobility from the
Middle Paleolithic to the Upper Paleolithic: from the
perspectives of natural resources use in the Jebel
Qalkha area, southern Jordan. *The 6th Conference
on Cultural History of PaleoAsia*, The University of
Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings,
pp.4-5).

上羽陽子 (2018)「線状物を生みだす人類の知恵」『シン
ポジウム バスケットリーと人類』、主催：大阪日本民芸
館・新学術領域研究 (パレオアジア文化史学)「人類集
団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類
学的モデル構築 (課題番号 16H06411、代表：野林厚
志)、於：国立民族学博物館第 4 セミナー室、2018 年
11 月 3 日。

Nakatani, A., Kanetani, M. and Ueba, Y. (2018)
“Unweaving textiles, Disentangling Ropes: Explora-
tion of “Lineware” as an Analytical Category”, *Textile
Society of America’s 16th Biennial Symposium*,

- Sheraton Vancouver Wall Centre, Canada, 2018.9.20.
- 上羽陽子 (2018)「糸やヒモのもつ見えない力ー人類の繊維利用」(招待講演)、主催：小松市埋蔵文化財センター、於：小松市埋蔵文化財センター研修室、2018年10月20日。
- 金谷美和、上羽陽子、中谷文美 2018「道具としての植物利用ーインド北東部アッサム地域を中心にー」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第6回研究大会』、p.86 (2018.11.17) Kanetani, M., Ueba, Y. and Nakatani, A. 2018 "The Use of Plant Resources for Tools in Assam, Northeast India" The 6nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, p.87, 2018.11.17.
- 上羽陽子、金谷美和、中谷文美 2018「タケ利用と「単純な」技術ーインド北東部アッサム地域を事例に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究2016-2020：パレオアジア文化史学第5回研究大会』、p.44 (2018.5.12) Ueba, Y., Kanetani, M. and Nakatani, A. 2018 "Simple Technologies and the Use of Bamboo in Assam, Northeast India" The 5nd Conference on Cultural History of PaleoAsia, p.45, 2018.5.12.
- Nakatani, A., Y. Ueba, and M. Kanetani (2018) The vital role of "cordage" in food acquisition and other aspects of human life. *The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp.96-97). poster
- 中谷文美「ヒトによる道具製作とジェンダー：『線具』としてのヒモへの注目から見えること」岡山大学文学部プログラム研究「ジェンダーの多層性に関する領域横断的研究2」2018年度第1回研究会、於：岡山大学、2018年12月15日。
- 卯田宗平 (2018)「鵜飼からみた中国と日本ー方法としての漁撈研究」名古屋大学環境学研究科特別講義、名古屋大学環境総合館、2018年12月13日。
- 卯田宗平 (2018)「なぜ中国の鵜飼ではカワウを domesticate するのかー日本の鵜飼との事例比較から」大学共同利用法人人間文化研究機構 (NIHU) ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」東北大学東北アジア研究センター拠点「日中交流セミナー・動物資源をめぐる文化のデザイン」国際シンポジウム、東北大学北アジア研究センター、2018年11月23日。
- 卯田宗平 (2018)「ウ類に対する働きかけの違いとその要因ー日本と中国の鵜飼をめぐる事例から」第70回日本民俗学会年会、駒沢大学駒沢キャンパス、2018年10月14日。
- 卯田宗平 (2018)「中国の鵜飼についてー日本と中国の鵜飼技術の違いから背景文化の違いを知る」第32回特別展示『中国の鵜飼ー卯田宗平フォトコレクションから』関連岐阜市民講座、岐阜市長良川うかいミュージアム会議室、2018年9月15日。
- 卯田宗平 (2018)「なぜ日本の鵜匠はウ類を domesticate しないのかー中国の鵜飼との事例比較から考える」AA 研共同利用・共同研究課題「『わざ』の人類学的研究ー技術、身体、環境（「もの」の人類学的研究(3)）」研究会、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2018年7月8日。
- 卯田宗平 (2018)「失われつつあるものを、かき集めたー日本展示資料の紹介」開館40周年記念特別展「太陽の塔からみんぱくへー70年万博収集資料」国立民族学博物館ウィークエンドサロン、国立民族学博物館、2018年5月27日。
- 大西秀之 (2019)「景観認識としてのアイヌ文化遺産：北海道標津町における地域住民の語りを事例として」『生態人類学会第24回研究大会』、鴨川グランドホテル (千葉県鴨川市)、2019年3月20～21日。
- 大西秀之 (2018)「アイヌ文化の二つの源流」『2018年度同志社大学公開講座：地域と社会・文化』、同志社大学京田辺校地 (京田辺市)、2018年10月3日。
- Ōnishi, H. (2018), Ainu historical heritage as common property of the local community. *CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies) XII*, Universiti Sains Malaysia (Pulau Pinang, Malaysia), July 23-27, 2018, (Proceedings, p.48).
- Ōnishi, H. (2018) Hybridization of two different cultural groups in the Ainu history. *The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp.98-99). poster
- 大西秀之 (2018)「アイヌ文化に対する地域住民の多様な語り：北海道標津町7地区における聞き取り調査を事例として」『日本文化人類学会第52回研究大会』、弘前大学 (弘前市)、2018年6月3日。
- Ōnishi, H. (2018), Is 'culture' a buzzword? Ontological challenge of an interdisciplinary project on the cultural history of early modern humans in Asia. *CAA (Computer Applications and Quantitative Methods in Archaeology) 2018*, University of Tübingen (Tübingen, Germany), May 19-22, 2018, (Proceedings, p.63).

- 大西秀之 (2018) 「アイヌ文化の形成過程における異系統集団の混交」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日 (予稿集 44 頁)。Onishi, H. (2018) Hybridization of two different groups in the historic process of Ainu culture. *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p.45).
- 大西秀之・近藤康久・岩本葉子 (2018) 「文化としての人間行動という視座—パレオアジア文化史学の語彙分析を事例として—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日 (予稿集 92 頁)。Onishi, H., Y. Kondo, and Y. Iwamoto (2018) Perspectives of human behavior as culture: A case study on lexical analysis of "Cultural History of PaleoAsia". *The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p.93). poster
- Kondo, Y., H. Onishi, and Y. Iwamoto (2018) Lexical analysis of the concept of culture in the PaleoAsia project. *The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp.87-88). poster
- 菊田 悠 (2018) 「ウズベキスタン陶器職人の技能伝承—家系、資質、生計の関係から—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日 (予稿集 96-97 頁)。Kikuta, H. (2018) Transmission of skill among potters in Uzbekistan: lineage or talent? *The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, pp.98-99). poster
- Fujimoto, T. (2018) Social change and behavior patterns in the course of contacts between the previous inhabitant group and migrant group: A case study from Kazakh steppe. *The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp.94-95). poster
- 藤本透子 (2018) 「民族接触の過程における人口変動—カザフ草原の事例から—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日 (予稿集 84 頁)。Fujimoto, T. (2018) Population change in the course of contacts between ethnic groups: A case study from the Kazakh steppe. *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p.85).
- 藤本透子 (2018) 「中央アジア草原地帯における集団接触と居住形態の変化」B01 班研究会「中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化—人類学と考古学の接点から」国立民族学博物館、10 月 20 日。
- Peng, Y. (2018) "What we learnt from CHaGS12", The Closing Plenary. *12th Conference on Hunting and Gathering Societies (CHaGS XII)*, University Sains Malaysia, Penang, Malaysia, 27th July, 2018.
- Peng, Y. (2018) Cutting: from play to work among Baka children in southeastern Cameroon. *12th Conference on Hunting and Gathering Societies (CHaGS XII)*, University Sains Malaysia, Penang, Malaysia, 24th July, 2018.
- 彭 宇潔 (2018) 「狩猟採集民バカに見られる景観情報の共有：集団採集活動を事例に」『日本アフリカ学会代 55 回学術大会』北海道大学、2018 年 5 月 26-27 日。
- 彭 宇潔 (2018) 「道具利用行動に関する定量化の試み—狩猟採集民バカの切る行動を事例に—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日 (予稿集 24 頁)。Peng, Y. (2018) An exploratory quantitative analysis of tool use behaviors: In the case of cutting among Baka hunter-gatherers. *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p.25).
- Peng, Y. (2018) An exploratory quantitative analysis of tool use behaviors: In the case of cutting among Baka hunter-gatherers. *The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp.100-101).
- 彭 宇潔 (2018) 「熱帯地域の狩猟採集民にみられる道具利用の比較研究—集団内・外における社会関係に着目して—」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020 : パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日 (予稿集 18 頁)。Peng, Y. (2018) Comparative study of tool use among hunter-gatherers in tropical regions: focusing on social relations within/between groups. *The 5th*

- Conference on Cultural History of PaleoAsia, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p.19).
- 野林厚志・池谷和信 (2018)「民族学からみる狩猟採集・農耕社会の接触と交替」(野林厚志・池谷和信) 日本考古学協会第 84 回総会研究発表要旨、pp.118-119 明治大学、2018 年 5 月 26-27 日。
- Nobayashi, A. (2018) Social and cultural change in the indigenous population after contact with colonizers: Historical ecology of Taiwan's people in 18th-20th century. *The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, pp.36-37).
- Nobayashi, A. and Y. Peng. (2018) Cross-cultural perspective of the technology and techniques for hunting and gathering from the ethnographic data. *12th Conference on Hunting and Gathering Societies (CHaGS XII)*, University Sains Malaysia, Penang, Malaysia, 25th July, 2018.
- 野林厚志・池谷和信 (2018)「民族学からみる狩猟採集・農耕社会の接触と交替」日本考古学協会第 84 回総会、明治大学、2018 年 5 月 27 日。
- 野林厚志 (2018)「定量分析のための民族誌データセット：Binford (2001) を考える」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日 (予稿集 42 頁)。Nobayashi, A. (2018) Ethnographic datasets for quantitative analysis: an introduction to Binford (2001). *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p.43).
- 野林厚志・門脇誠二 (2018)「中部旧石器時代から上部旧石器時代にかけての狩猟具の小型化の行動論的考察：民族誌からの予察」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日 (予稿集 6 頁)。Nobayashi, A. and S. Kadowaki (2018) Behavioral significance of size-reduction of hunting tools from the Middle to Upper Paleolithic: a perspective of ethnographic data. *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p.7).
- 中村光宏・野林厚志 (2018)「東南アジア大陸・島嶼・ウォーレス線境界と文化項目の相関の定量的検証」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日 (予稿集 6 頁)。Nakamura, M. and A. Nobayashi (2018) A quantitative analysis on the correlation of cultural elements of Southeast populations: mainland, islands and Wallace Line. *The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, p.7).
- 中村光宏・野林厚志 (2018)「新人文化の鍵となる文化要素とその伝達様式：東南アジア・データベースの分析を中心に」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日 (予稿集 22 頁)。Nakamura, M. and A. Nobayashi (2018) Key cultural elements and their transmission: statistical analysis of SEAO database. *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p.23).
- Yamada, H. (2018) Evolution of religion and mythology: Its role in intergroup dynamics. *The International Workshop, Cultural History of Paleo-Asia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16-18, 2018 (Proceedings, p.102). poster
- 山田仁史 (2018)「狩猟採集民における生業変容：新人文化へのパースペクティヴ」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12-13 日 (予稿集 100-101 頁)。Yamada, H. (2018) Transformation of subsistence among hunter-gatherers: A perspective on modern human cultures. *The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University, Nagoya, May 12-13, 2018 (Proceedings, pp.102-103). poster
- 山田仁史 (2018)「人類における〈宗教〉の進化：諸仮説の総合へ向けて」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016-2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17-18 日 (予稿集 88 頁)。Yamada, H. (2018) Evolution of “religion”: toward a synthesis of hypotheses. *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17-18, 2018 (Proceedings, p.89).
- Yamanaka, Y. (2018) Complexity and “environmental

adaptability” of imaginary creatures. *The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia*, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto, December 16–18, 2018 (Proceedings, p.103). poster

山中由里子 (2018) 「ヒュードロドロの系譜—この世ならざるものの出現にともなう音」『第 477 回みんぱくゼミナール』国立民族学博物館、2018 年 2 月 17 日。

山中由里子 (2018) 「想像界の生物相 (4) —旅するマンドラゴラ伝承」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第 5 回研究大会』名古屋大学、2018 年 5 月 12–13 日（予稿集 94 頁）。Yamanaka, Y. (2018) Biota of the Imaginary (4): Travelling tales of the Mandragora. *The 5th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, Nagoya University, Nagoya, May 12–13, 2018 (Proceedings,

p.95). poster

山中由里子 (2018) 「想像界の生物相 (5) —世界地図と水の怪物」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研究 2016–2020：パレオアジア文化史学第 6 回研究大会』東京大学、2018 年 11 月 17–18 日（予稿集 90 頁）。Yamanaka, Y. (2018) Biota of the imaginary (5): Mapping water monsters. *The 6th Conference on Cultural History of PaleoAsia*, The University of Tokyo, Tokyo, November 17–18, 2018 (Proceedings, p.91).

吉田世津子 (2018) 「技術と接触—中央アジア・墓碑をめぐる人の関係」B01 班研究会「中央アジアの集団接触にともなう社会変容と物質文化—人類学と考古学の接点から」国立民族学博物館、2018 年 10 月 20 日。

PaleoAsia Project Series 21

パレオアジア文化史学

—アジア新人文化形成プロセスの総合的研究—

Cultural History of PaleoAsia

発 行 日：2019年 3 月30日

編 者：野林厚志（「パレオアジア文化史学」B01班研究代表者）

編 集：彭 宇潔（「パレオアジア文化史学」B01班研究協力者）

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館 TEL. 06-6876-2151

発 行：文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）2016-2020年度
計画研究 B01班（研究課題番号 16H06411）

I S B N：978-4-909148-20-9

印刷・製本：株式会社遊文舎

〒532-0012 大阪市淀川区木川東4-17-31

TEL. 06-6304-9325



文部科学省科学研究費補助金
新学術領域研究（研究領域提案型）
2016－2020
パレオアジア文化史学

計画研究 B01 班 2018 年度 研究報告